
蒼天のシンフォニア

アルノー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼天のシンフォニア

【Zコード】

Z9967L

【作者名】

アルノー

【あらすじ】

『遺跡災害』。そう呼ばれる災害が頻繁に起じる『異世界』シンフォニア。

その災害に、古の遺産によつて世界そのものを書き換えながら立ち向かう者たちがいた。

その名を『魔術士』といつ。

そんな『魔術士』の一人レーゼ・クライスはある日、遺跡内部にて水晶に封印された少女と出会つた。

その瞬間から、彼は世界をも巻き込む争いへと足を踏み入れていく。

戦いの果てで得るのは眞実か、それとも虚実か。時を超えて、魂さえも超え、全てを知るための物語が今、始まる。

序

章：神焉の世界

- The End of the World -

個人HPで連載していたものの改正版です。以前よりも楽しめるものに仕上げたので、皆さん楽しんで読んでいくください。

序 章・神焉の世界 - The End of the World -

かつて世界は一度亡んだ。その傲慢さゆえに。

古文書『全理ノ解』の序章一節目より引

用

序章・神焉の世界 - The End of the World -

夜の闇が虚空を覆い、満月が妖しく輝くその下に紅蓮に彩られた世界があつた。

それを成すのは紅蓮の灼熱に包まれて崩れ落ちていく街だ。

長大にして巨大。恐らく、どんなに空高く昇っても全景を見ることはできないような、そんな大都市が赤く縁取られ無限に燃えていた。

だが、その中でも比較的まともな外見を保っている建物が中心部に存在している。

それは白亜の壁とそれを守り囲うような外壁でかたじられ、東西南北に尖塔が均等に外壁の角を担っていた。

まるでこの都市と一体になることにより、ひとつ芸術品となるように設置されたそれらの周りと内部はしかし、悲鳴と怒号で溢れ

ていた。

熱氣と死臭漂う城の中庭や回廊など、ありとあらゆる場所には褐色肌の男たちと銀の鎧を着た男たちが対峙し、己の得物を振るい合っているのだ。

直接肌の上から鉄の鎧をまとつた一人の褐色肌の男が筋肉を膨らませて手にした大斧を振り下ろす。

対する騎士らしき甲冑に身を包んだ男は豪奢な装飾が施された長剣を掲げて防ごうとした。

だが

「おおおおおお！」

雄叫びと共に長剣」と肩から切り裂かれ、血と肉片が飛び散り、紅の絨毯をさらに赤く染めた。

周りの騎士たちも徐々に押され、ついには槍や長剣の凶刃に掛かり、赤黒く染まつた絨毯の上に倒れ伏した。

そして彼らは回廊を渡り、次の騎士たちが待ち構える部屋へとなだれ込んでいく。

その頃の都市内のあるところでは、熱に炙られた金属の銅像が限界温度を超過した事によつて溶け落ち、烈火に抱擁された木材建物は黒炭となり、自重に耐え切れず火の粉を吹いて倒れ込んでいた。

その中を、いくつもの人影が走り抜けていく。

追われるもの。そういう表現が適切だろうか。白い肌を持ち、

高級な素材で織られた長衣を着たこの街の住民たちが、赤く染まつた街中を駆けていった。

逃げ惑う羊のように、それぞれの顔に恐怖をこじりつかせて彼らはただ走り続ける。

そこに、炎の壁を突き抜けて褐色肌を持つ男たちが彼らの行く道の前に飛び込んできた。

燐光を放つ長剣を持つ者、あらゆる部分に刃が生えた長槍を持つ者、三角状の黒光りする三連装の銃身がある長銃を肩に背負う者などと、彼らは総じて奇異な武器を手にし、白肌の人々の前に立ち塞がる。

たちまち住民たちは大混乱に陥り、意味を成さない叫び声を上げて散り散りになつた。

だが男たちはそれを許さない。初めから決めていたかのように頷き合い、別々の方向へと彼らは走り出したのだ。

燐光を放つ長剣を持つた男が逃げていく女性の一人に早速追いつき、その長髪を無理やり掴んで引き寄せる。

「嫌あ！」

女性が叫び声を上げる。だが男は眉一つ動かさずに、その背に向けて刃を突き刺した。

同時にそれを横へ薙ぎ払い、胴を寸断する。

ブシャツ！ と、水が地面の上をはねる音が響き、血と臓物を飛

び散らせながら石畳で整備された地面を赤黒く染めた。

各所に散つた男たちも同様に、次々と切り裂き、撃ち穿ち、物言わぬ死体へと変えていく。

そして彼らはそれらを終えると無言で頷き合い、再び駆け出した。次に狙う獲物を求めて。

絶望と恐慌、殺人の快樂と『狩り』の愉悦。

負の感情の全てが渦巻く紅と熱の世界が、そこにあつた。

城から見て西にある尖塔の最上階。その中から、燃え盛る都市を悠然と眺める青年が一人いた

肌色は白というより蒼白。長身で、引き締まつた瘦躯の上にはラフなシャツとズボン。

そして研究者のような白衣を着てあり、両側面に付いたポケットに青年は両手を突っ込み、遙か下の崩れた世界を見下ろしている。

鋭い茶の瞳には何の感情も浮かんでおらず、短く切つた白髪は赤の色を反射して赤銅色と化していた。

彼もまた、『逃げる側』の人間だった。

だが青年はまったく慌てる様子もなく、ただ子供が興味を失った玩具を見るような目つきで遙か下の様子を見ている。

「……これが報いか。」

青年はかすれた声で呴くように、一人の想い人の名を呼んだ。かすかに表情を曇らせ、しかし次の瞬間には元の無表情へと戻つてゐる。

彼が名を呼んだ彼女はもはやこの場にはいない。もう一人の恋敵であり親友である青年が、『来世への希望』のためにと連れて行つてしまつた。

「来世、か。あいつらしい」

そう口にして、低く笑う。まるで喧嘩をした子供たちをいさめる母親のように困ったような、それでいて優しい笑みを浮かべ、ただ淡々と彼は忍び笑いを続けていた。

そして彼は思い出す。遙か昔の記憶を。

それは輝かしき日々だった。親友と、愛しい人と共に歩んできた最高の記憶。時には喧嘩をし、時には共に研究をし、時には晴れた空の下、三人で草原の中に寝転んだりもした。

結局愛しい人への恋は片想いに終わつたが、これでよかつたと青年は思う。

彼は目を細め、息を吐いてポケットから両手を引き出す。

その右手の人差し指には、紫色の宝玉がはめ込まれた指輪が差されていた。

眼前に広がる炎の世界が、揺らいだ気がした。

その時だ、尖塔の最上階から下へと通じる螺旋階段への鉄扉が勢いよく開いたのは。

轟音が響き、鉄扉が悲鳴のよつた軋み声を上げる。

その音を聞いて、青年は非常にゅつたりとした動作で振り返った。

「『三柱将』^{さんちゅうじょう} ガルディア・ザッハーグ、君か」

「ほう、貴様がこんなところにいたとはな」

まるで獲物を見つけた肉食獣のように、褐色肌の男は灰色の目を細めた。

それは見上げんばかりの巨漢だった。

薄汚れた鉄の鎧を筋骨隆々の胴体にまとい、顔や手足を返り血でどす黒く染め、荒く息を付いている。

その右手に握られているのは柄尻同士が繋ぎ合わさつた双剣だ。

男 ガルディアの身長一メートルを超えるそれは血と死臭がこびりついており、その臭いを受けて青年は細めていた目に力を込めた。

鋭く、全てを裂く刃。それを連想させる青年の眼光にガルディアは怯んだように後退りし、呻く。

「ぬう……」

だがガルティアは胆力でそれを押し返すと双剣を両手で構え、ただ事実を告げるべく口を開いた。

「貴様もここまでだな。『神の右腕』ヘルベルト・フォン・カラヤン」

「どういう意味で『ここまで』ということかな?『三柱将』にして『飢沼の戦幻』、ガルティア・ザッハーツ」

まるで何かを確かめ合つよう、互いの名前を呼び合つ。

そこには親しみなどない。

ただ、殺意だけを込めた言葉のやり取りだ。

「分かるだろ?、ヘルベルト・フォン・カラヤン。貴様の命だ」

「……君も『背信の聖者』や『龍の夢』と同じことを言つんだね。けど、僕の死に場所は僕が決める。悪いけどお引き取り願おうか」

言葉と同時にパチン、と乾いた音が鳴り響いた。

刹那、凄まじい威圧感と共にヘルベルトと呼ばれた青年を中心として尖塔の床の上に奇妙な青の円形をした紋章が一瞬で現れる。

ありとあらゆる記号を組み合わせたような、意味を理解する事すらできない文字と線で形作られたその紋章は瞬く間に床を覆い、さらには帯状になつて宙を舞い、壁や天井に張り付くようにそれを描いていく。

「それに……命、ね」

そして、ただ紅に染まつた空を見上げ。

「ふざけたことを抜かすなよ、ガルディア・ザッハーケ。僕は死はない。僕は死ねない。僕の罪が赦されぬ限り、僕は永遠に生き続ける。僕の魂は、永久にこの世界に囚われ続ける」

淡々とヘルベルトは言つ。だがその表情は苦痛に満ちており、まるで罪の重さに震える咎人のようだ。

そしてそう言い切ると同時に、親指と中指を重ね合わせた。

不意打ちに近い『陣』の展開にガルディアはうろたえるように身じろぎし、しかしその瞬間、戦士の顔となつて武器を構えて叫ぶ。

「貴様、これはもしや！」

「『否定』の力だ。さて、愚かなガルディア君。君と僕はここで永久のお別れだよ」

先ほどの様子とは打つて変わって、ヘルベルトは聖母のような笑みを浮かべた。

その顔を見たガルディアはさせないとばかりに双剣を振りかぶり、ヘルベルトへと踏み込む。

「おおおおおッ！」

「その存在意義を否定され、一片たりとも残さず、」

田の前に迫り来る『敵』に對してまったくの恐怖を抱かずに青年は宣告する。

声色に慈悲を施さず、殺意を込めず、感情を含まず　まわしく全てにおいて平等な神の如く。

「　“世界に食らい尽くされてしまえ”　」

そして、指を弾いた。

直後、生まれたのは酷く乾いた音と、風が吹き荒れる音。

その風は部屋中に満ち溢れ、あらゆる場所を撫でていく。ヘルベルトはそれに、風が竜のように鎌首をもたげて牙を剥いたかのような錯覚を覚えた。

紋章が一度だけ強く脈動する。その瞬間、最初の一撃がきた。

パキュッ！　と、乾いた音と共に、ガルディアの強靭な肉体ごと胸が穿たれたのだ。

「……は、『あつー』

円状の傷は強固な筋肉をえぐり取り、背骨を貫通し、そのまま背面へ抜ける。

その一撃によつて喉の奥から沸きあがつてきた熱い血をガルディアは吐き出し、田を血走らせて咆哮を上げた。

だがその叫びが契機となつた。風が唸るような咆哮を上げ、次々に円の傷が男の体を穿つていく。

顔に、肩に、腕に、腿に、手の平に額に頬に眼球に脹脛に頭に鼻骨に腹に心臓に肺に背骨に脇腹に頭蓋骨に脳に股関節に胸骨に膝に足に。

次々と、次々と、次々と。風が吹き、穴を穿つ。

しかし、風の穿ちはそれだけでは終わらない。

ヘルベルトの隣、窓に近い壁に同様の穴が開いたのだ。
それに感染するかのように周囲の壁が穿たれ、じわじわと消失し

同時に天井にも穴が開き始め、数秒後、ついに何の音も立てずに尖塔の最上階の天井と壁が消滅した。

それはたつた五秒の出来事。

た。

外気に晒され、熱風がヘルベルトの顔を撫でていく。

眼前の光景　世界の終焉のような、地平線まで続く紅蓮の色に
青年は再び目を細めた。

「さあ燃える。燃えて、消えてしまえ。傲慢と虚装に満ちた僕らの

『世界』よ。全ての終わりを、紡ぐために』

空は赤く照らされ、血の臭いと肉が焦げる臭いと木が焼ける臭いが世界の破滅を告げるよつに、青年の周りを包んでいた。

そしてその日、世界は滅んだ。

序

章：神焉の世界

- The End of the World -

導入部はあまり変わっていませんが、徐々に変わっていく予定ですのでよろしくお願いします。

第一話・依頼 守護機兵と嫌な予感

清清しいほどに晴れ渡った空は苦手だ、とレーゼ・クライスは内心でひとりごちた。

青い空の下、地平線すら見えるほど何の起伏も存在しない草原の上に立つ青髪の青年である。

刃のような雰囲気を放つ鋭く細められた青の眼を前へと向け、黒の防刃シャツを覆つように纏つた青外套は、ただ風を受けて揺れ動いていた。

「……青い空は、気が滅入るからな」

理由は分からんが、と付け足すように呟く彼の前方とその周囲には、全身をくすんだ鎧で身を固めたずんぐりむつくりな『人形』が三体、大剣を構えた状態で動きを止めている。

ただし、その身長は普通の人の1・5倍近くはあるが。

全長二㍍強はあるうかというそれらは、皮膚の変わりに『ゴーレム』とした鈍色の装甲を纏い、親指ほどの大きさの紅色をした宝玉を單眼として煌かせ、時折それに知的な光が奔っている。

「守護機兵の騎士型」^{ゴーレム}か。よくも外に出でくるまで『狂つた』ものだな。騎士の名が泣くだろ^{ナイト}う。

そんな巨体に囲まれながらもレーゼは、まるで己の感情を押し隠すように淡々と呟いた。

その名の通り、守護機兵は各地に存在する遺跡を護るために機械人形だ。血は魔力であり、肉は鋼と歯車であり、皮膚は並の武器では破壊できないほどに固い。

そんな守護機兵たちの中に、時折思考の『狂つた』ものが遺跡の外へと出てくる事がある。それをレーゼは排除しにきたのである。

彼の声に答えるかのように、田の前にいた一体の守護機兵が豪腕を振り上げ、千年とう長い年月の間で劣化しそぎた剣を青年に向かって振り下ろしてきた。

だが、迫る剛剣をレーゼは横へ飛びのくことで回避。勢い余った剣は地面に突き刺さり、粉塵を巻き上げる。

「なるほど、やはり『彩奏珠』は完全に壊れているらしい。 となれば、やることはない」

冷静に眼前の守護機兵の状態を確認すると、青塗りの柄に右を添え。

「 排除する」

鞘から、剣を引き抜いた。

そして、そこからは一瞬だった。

地面深くまで突き刺さって抜けなくなつた剣をどうにかして引き抜こうとしていた守護機兵の懷へ、残像を残す勢いで踏み込み一閃。

それは右上から左下へと振り下ろす、じく単純な切り裂く動作。

柄元の真ん中から切つ先にかけて深い溝が刻まれた白銀の刃が翻り、風を切り裂く音を立てる。

だが、ただそれだけで分厚い守護機兵^{ガーレム}の装甲を、人間にとつての内臓とも呼べる内部機構^{ゴーレム}こと、それこそ熱したナイフでバターを切るように斬り裂いた。

痛覚を持ち合わせていないはずだが、両断された守護機兵^{ガーレム}が断末魔のような耳障りな金属音を上げる。

すると、その音に残りの一^ヒ体が過剰反応を示した。まるで恐れを振り払うかのように、両方ともが大剣を振り上げ、左右からレーゼへと突っ込んできたのである。

だが、。

「遅い」

極めて冷静な声と、地を蹴る音が響いたのは同時。レーゼは迷うことなく『右側』の守護機兵へと体を向け、迎撃するのではなく、そのまま向かっていったのである。

それは、そのままの位置で迎え撃つと確実に挟み撃ちにされると分かつっていたがゆえの判断であった。

「ふつ！」

レーゼはすぐ田の前に迫った守護機兵^{ガーレム}掛け、裂帛の声と共に長剣を振るつ。

キンッ！^ム と鋼鉄が裂かれる澄んだ音が蒼天に響いた。守護機兵^{ガーレム}が横に両断されたからだ。

草原の上に、金属がまとめて落ちたような甲高い音が鳴る。そしてそれすらも無視して、残り一体の守護機兵はレーゼの背後へと突き進んだ。

ガチャガチャと、ギチギチと、怒りとも悲しみとも取れる音を発しながら、鈍色にびいろの装甲を鳴らし、涙を流すように紅色の宝玉を輝かせながら。

「 ビバ！ 一・撃・必・殺！」

刹那、空から声が響き 爆音。

まるで地震のごとき凄まじい揺れが起こり、あまりの衝撃に地面が砕けて粉塵が宙を舞う。
だが、風がすぐにそれを押し流した。

そして見えてきた光景は 上から押し潰され完全に砕け散った機兵の上に、黒の外套と灰色の上下を身にまとい、頭部に深紅の鉢巻をつけた青年が立っているというものだった。

「 ょおーう、レーゼ。油断は大敵だぜ？」

空から降ってきたその青年 アシュレイ・ツァイスはそう言いながら鉄塊と化した機兵から刃を引き抜き、立ち上がる。
彼が手にしている得物。それは槍だ。黒塗りの刃の中心部に灰色の宝玉が象眼されており、先端から石突まで一メートルほどある。

その姿を認めたレーゼは空を見上げ、まるで呆れたように口を開

く。

「『重力操作』で空から一撃か。相変わらず派手なことをするな、お前は」

「ま、それが俺の得意技だしな。ところで、お前を助けた俺様に対するお礼とかないのかにゃー？」

「ああ、むせび泣いてありがたがりやがれ！」と胸を張るアシュレイに、レーゼは面倒くさいといった様子で半眼を向けると、

「ふむ、メルヴィスを簞巻きにする権利をやろう」

「それはいつもやつてることだと思つんだが……」

「確かにそうだな。……さて、報告ひとつすると今まで最後らしいが」

さりげなく話題を逸らし、辺りを見渡した。

黒く焦げて鉄くずと化した機兵の姿が五つと、体の中心を砕かれて機能を停止している機兵の姿が五つ。計十体の機兵が草原の上に倒れていった。

これら全てが十数分のうちにレーゼヒアショウレイの手によつて『排除』されたものだ。

どれもこれも思考回路たる『彩奏珠』^{レヴィオス}が完全に壊れているので、人々に害を及ぼすものばかりである。ゆえに、破壊したところで文句などは言われない。

「確か騎士型が五体と小人型が一体、んで魔術士型が三体だつたっけか？」

『依頼内容』を思い出しながら、何か忘れているのかアシュレイは首を傾げた。

「……けどなんか忘れているような」

「ふむ。奇遇だな、俺もだ」

大の大人が一人でうーんと唸りながら、改めて周囲を確認する。

すると地面の一部が不自然に盛り上がりしていく風景が見えた。
ぼこり、ぼこりと急速に隆起していくそれを目にしたレー・ゼとアシュレイの脳裏に浮かび上がったのは、グツとこちらにサムズアップして二ヒルな笑顔を浮かべている己の上司の顔だった。

「……ああ、思い出した。さっきの通信でメルヴィスから追加注文があつたはずだ」

「確かに、巨人型一体が新たに確認されたとかだつたつけ？」

アシュレイがそういつた瞬間、2人の眼前で限界まで盛り上がりいた地面が爆音と共に粉碎した。

その中から現れたのは見上げんばかりの巨体の機兵、通称『巨人型』。

全長は大体十メートルほどだろうか。全身をくすんだ青の鎧で覆われ、人で言う額の部分には茶の宝玉が埋め込まれており、頭部の頂点には地面を掘り進むためのドリルが装着されている。

そして両手にはやけに黒ずんだナックルガードが見えた。あれで多くの人間を肉塊へと変えたのだろう。

その姿を認めた瞬間、アシュレイはわめき立てた。

「あーっ！ これだからあいつの依頼を受けるのは嫌だつたんだ
！」

「つべこべ言つな、ちつとも片付けるぞ」

そんな彼にレーゼは鼻^{メルヴィス}を鳴らしながら長剣を構え、己の魔力をそ
の刃に纏わせながら^{タイプント}巨人型に向かつて走り出した。

「分かつてゐよ、こなくそつ！ “神意は虚無へと移ろいゆく

”

やけくそ氣味にアシュレイは叫び、槍を構えて^{タイプント}巨人型を睨みつけ
る。

そして 酸素の如く宙に存在する『界魔力』^{オード}と己の体内に駆け巡
る『魔力』^{マナ}を魔術の触媒たる灰色の宝玉^{テリオス}魔奏珠へと送り込み、
世界の根源であり全ての魔術の源である『世界樹』へと続く『回線』^{ロープ}を開いた。

開かれた回線から重力といつ名の『事象』^{ロビー}を複製、本来の役
割を改編。

僅かコンマ一秒の間にそれを済ませると、槍の刃に象嵌されてい
る灰色の宝玉から帶が飛び出し、^{タイプント}巨人型を囲む。

それを見た機兵は金属の擦れ合つのような唸り声を上げ、右腕を振
り上げた。

(術が発動する前に俺ごと押し潰す魂胆らしいが、そつは行かん！)

「バックアップは任せたぞ、アシュレイ！」

レーゼが思考を終えるのと叫びを放つは同時だった。見上げんばかりの守護機兵の足元にたどり着くと、『魔力』によつて脚力を強化。鈍く輝くドリルが装着されている頭部めがけて跳んだ。

「んなこたあ分かつてんだよ！　いくぜ！　　“ザガン鍊帝の滅杖”！」

その瞬間、アシュレイが槍を振るつ。

瞬間、鋼鉄を切り裂く甲高い音と、超重力の一撃が草原ごと機兵を飲み込んだ。

よく晴れ渡つた空の下、太く歪な「く」の字をした大陸　　リス
トア大陸の中心部にその都市はある。

『魔奏都市』ダルムヘイツ。

総人口三〇〇万人を抱える大都市であり、『魔奏都市』と呼ばれる街。

昼も夜も明かりが絶えず、眠るということを知らないこの大都市には、一つの大きな特徴があった。

それは街の中心部に鎮座する、地上十五階・地下三階建ての巨大な漆黒の建造物。

遺跡探索・魔術士ギルド『ヴァルハラ』、その本部だ。

『魔術士』。この世の森羅万象を操るものたちの総称である。ある者は虚空に炎を生み出し、ある者は空間そのものを支配し、またある者は運命さえも超越する。

だが、そんな夢物語を現実へと変えてしまう力は万人に与えられたものではなかつた。

魔力^{マナ}。人の体に流れる『血』とは異なる、もう一つの『流れ

。それを有しているものだけが、魔術士となれるのだ。

そこで本来ならば、それを有しているものとしているもの、その間で蔑みや差別が生まれるはずだつた。

だがそれが生まれるよりも早く、動いた者たちがいた。

『ヴァルハラ』の初代ギルドマスターたちだ。

彼らのすばやい動きによつてその悪しき流れは食い止められ、今この活気に満ちたダルムヘイツがその影が『ほぼ』ないことを物語つている。

そのヴァルハラの本部は、やはりと言つべきか周囲の建物と比べて破格の大きさと巨大さを誇つており、近くには所属魔術士専用の寮や保育所まで存在しているのだ。流石は世界最大の大きさを誇るギルドといったところだろうか。

そんなヴァルハラには、三人のギルドマスターが存在している。

ここ『魔奏都市』ダルムヘイツと『医学都市』イザーク、そして

『聖都』エル＝エデン。

それぞれが手のつけられないほど個性的な性格を持っているが、その類まれなる統率力によつて、ヴァルハラの管理者として魔術士たちの頂点に立つてゐる。

そして、ギルドマスターの一人である青年 メルヴィス・セルタレイは誰がどこからどう見ても性格が『変わつて』いる『人間に分類されるもの』であった。

彼を知る者はすぐからく口をそろえてこう言つだらう。

曰く、変人とはアレを指すのではないか、と。

「くくく、約束の時は来たれり……」

ギルドから下された依頼 “近隣の村を繰り返し襲う壊れた機兵を超、ゴリ押しで破壊せよ作戦”（メルヴィス命名）という名の仕事が終わり、報告のために本部の最上階へ昇降機を使って行き、ギルドマスター専用の執務室へと足を踏み入れたレーぜとアシュレイを迎えたのは、怪しそうな声を発しながらビーカーの中の怪しい紫色の液体をかき混ぜているメルヴィス・セルタレイ、その人だった。雪のように白い頭髪と悪戯小僧のような光を浮かべた茶の瞳を持つおり、整つた顔には今現在、怪しそうな笑みが張り付いている。

それを見たレーぜはため息の後に淡々とした声で言つた。

「アシュレイ。医者呼べ、医者」

「おう、任された」

その言葉に乗ったアシュレイは早速懐から小型の通信機を取り出し、知り合いの精神科医辺りへと連絡を取りつとして。

「……ごめん、調子に乗った僕が悪かったです。だからお医者さんだけは……お医者さんだけは勘弁して……！」

慌ててメルヴィイスが止めに入る。するとアシュレイはつまらなさそうに舌打ちをし、通信機を懐に仕舞いなおした。

それに安心したのか白髪のギルドマスターは「ふう」とため息をつき、さも残念そうに呟いた。

「一人ともせ、もうちゅうといつ……面白おかしい的確なツッコミとかをあ、期待してたんだけどね」

「そんな下らん願望はドブにでも捨ててしまえ」

そんなレーゼの斬つて捨てるような言葉にシクシクと擬音を発しながら女座りで座り込んだメルヴィイスを一瞥し、懐から報告書を取り出して執務用デスクの上に置く。

するといつの間に傷心から復活したのか、ようよるとした足取りで執務用デスクに向かうとその報告書を手に取り、

「うーん……、面倒だからこれで認証ぶへえ！」

斜め読みさえせずに報告認証の印を押すとするメルヴィイスの頭部をレーゼは鞘つきの長剣で引っ叩いた。

今までしないと、彼の暴走は斜め四五度はあるか九〇度を超える勢いで爆進するためがゆえの突つ込みなのである。

無論、面倒なので「しつこい方が手っ取り早い」と思つてこの部分もなへはない。

「むぐぐぐ」と頭を押さえながら呻き声を上げてデスクの下に沈んだ口の上向いて一呼吸ため息をついた。

「それじゃ、俺は帰るだ

「俺も。じゃあなメルヴィス」

レー、ゼは振り返らず、アシュレイは後ろ手で振ったまま執務室から出で行こうとするが。

「ふふふふ、ギルドマスターの僕をコケにするとは……。僕、怒ったよ……！」

地の底から響く声で、ゆっくりとメルヴィスはデスクの下から姿を現した。だが涙を目に溜めたその表情ほどからどう見ても怒っているように見えず、さらに言つならまつたく怖くな。

彼の声に振り返り、その姿を見たレー、ゼはともに面倒くさうに鼻を鳴らし言い返した。

「いや、あれはお前が悪い

「右に同意」

そんな、あまりにも反省していない一人の様子にメルヴィスはあ

れえ？と首をかしげ、

「おかしいなあ、」こらで僕の怒りパワーに恐れおののいたレーゼ君とアシュレイ君が五体投地して僕を敬つてくれるはずなんだけど……」

「……どうせひきの頭のネジが緩んだようだな。もう一撃加えるか」

「いや、こには俺がやってやるぜ」

「ちょっと痛たちー何で僕を殴る方向に走つてのつー？」

鞘つきの剣を肩で担いでいるレーゼとやる気満々の表情で腕まくりしたアシュレイに青年は叫ぶように突っ込んだ。

「……で、用があるんだろ？？」

唐突にレーゼは鞘を鞘止めにパチリと収め、ため息と共に問う。するとメルヴィイスは太陽のような笑みを浮かべて頷いた。

「さつすが僕の部下！僕の言いたいことをこじんぱかりに言いつけてくれるなんてね！」

「まつたく、お前は……」

「めかみを人差し指と親指ではさみ、揉み解す。

「の上司とはもう四年の付き合いだが、そのお陰か彼が言いたい事がその場の雰囲気や行動で分かつてしまふのだ。正直言つて、この破天荒さに慣れてしまった己が恨めしい。」

そんなメルヴィイスの様子にアシュレイもやつと事の次第が理解できたのか、険しい表情で凄む。

「んで、また『仕事』かよ？ 労働法違反で訴えるぞ」「！」

「大丈夫、書類を書き換えれば問題ないから！」

「お前は一度地獄に落ちてこい」

呆れた表情でレーゼはそう言い捨てる。だがそんな一言にもめげずメルヴィイスは悠然と微笑み、机の上で指を交差させ、

「それじゃ、『仕事』のお話 始めようか？」

余裕を持った表情で、そう告げた。

『遺跡』。そう呼ばれるものがこの世界には数多く存在する。

聖王都市エル＝エーテンの聖地の奥深くに封印されているという『始まりの遺跡』“エンド”や、製造ラインを破壊してもいつの間にか修復し、今でも守護機兵を製造し続ける『創造の遺跡』“パレード”など、各地に存在する遺跡を数えるとその数は三桁にも及ぶだろ。

それらは全て、世界統一思想を持つアルカーナ大陸帝国と、海を

挟んで存在するリストア大陸共和国が反発したことによって世界統一戦争が始まり、アルカーナ大陸の勝利として終戦した一年後、アルカーナ大陸帝国の指導の下に『世界統一政府』^{（アスガルド）}が発足したその年の初めに、唐突に、そして『独りで』に出土し始めたのだ。

そう、『独りで』なのだ。

誰かが掘り出したわけでもなく、ただ『勝手』に地面を突き破り、遺跡内部へと続く『門』が現れ始めたのである。

なぜそんなものが勝手に地中から現れたのかは、未だにまったくといつていいほど解明されていない。

明確に分かつていては三つ。

出土した遺跡はかつての古代文明の建造物であること。

そこを守護していた『守護機兵』と呼ばれる人を模して作られたその思考はほぼ壊れていること。

そして『守護機兵』は遺跡内部から外に出では人に危害を加える、というものだけだ。

だが、それを世界中の人々が知ることになるまでは、かなりの時間がかかってしまった。

なぜなら、『出土』が始まつた時、『世界統一政府』^{（アスガルド）}は発足したてで足並みがまつたく揃わず、それに対応ができずに世界規模の混乱が巻き起こつてしまつたせいだ。

多くの人々が死んだ。巨大な守護機兵に押しつぶされ、騎士の姿をした守護機兵に斬り屠られ、短剣を装備した小さい守護機兵に群がられ無残な死が、世界に蔓延した。

これは後で分かったことなのだが、守護機兵に対する魔力を上乗せした攻撃でなければダメージが通らない、という事実もそれに拍車をかけていた。

だが、人はそのような過去の遺産に負けるほど柔ではなかつた。

命知らずな者達が遺跡の中へ潜り、そこで得られたもの 主に『魔奏珠』^{テリオス} という名の宝珠や魔術に関する書物、いわゆる魔道書だを解析・改良することで、守護機兵を打ち倒すまでに至つたのである。

そして探索できるものたちが集い、次第にその集団は大きくなつていつた。

それが、『ヴァルハラ』、遺跡探索・魔術士ギルドの始まりだ。

こうして九一年間、人は未だに現れ続ける遺跡や守護機兵の脅威『遺跡災害』に晒されながらも、ただひたすらに戦い続ける。

『“アルバレスタ”って呼ばれている遺跡は知つてるかい？
南西部のかなり辺境にある、最近出土した遺跡なんだけどさ』

見上げると首が痛くなるほどの高い天井と、大人が五人並んでもずいぶんと余裕のある広さを持つ廊下をレーゼは一人で歩いていた。外壁に水に浸すと発光する鉱石が水の入った小さいケースの中に入れられて設置されているので、明かりには困らない。

ちなみに、一緒に来ていたアシュレイは早速入り口のトラップで

ある落とし穴に引っかかつて床下に消えた。

きちんと地図を確認しないからこうなるのだ、とレー・ゼは呆れた様子でそう思つ。

その際に『やつちまつたああああ……！』などと言んでいたが、心配しなくて恐りく生きているだらう。彼のしづとやはギルド一なのだ。

『それで最近、そこにギルド^{ウチ}の遺跡調査隊が入ったんだけどね。奥の方に予想以上の量の機兵^{アーマー}がいて、結局調査は終わらずじまい』

メルヴィスに手渡された最奥部以外が記された地図を見るに、この遺跡は一層構造で作られているようだ。

先ほどアシュレイが引っかかつた落とし穴は一層田に通じるものらしい。

『そこで、君たちには最奥部の調査をして欲しいんだ。あ、マッピングと適度な機兵の撃破もお願ひいね？』

（だが、これは……）

改めてこの遺跡の全容を地図で確認し、レー・ゼはふむ、と顎に手を当てて思考する。

この遺跡は巨大すぎる、と。

通常、大陸の端　つまり中央から外れるに従つて、遺跡の規模

は小さくなるはずなのだ。それは、九一年前に始まつた遺跡が有する絶対の法則。

そう、そのはずであつた。

なのにこの遺跡はその法則から外れている。それにあのギルドマスターが気づかない事があるはずがない。

「何か厄介な事が起こりそうだな……」

それだけは確信を持つて言える。

何せ、面倒メルガイスごとを察知する能力とそれを他者に押し付けることに
おいて、上司の右に出るものはいないのだから。

『くろーくろー、じゅうじゅうシローリ。闇にねあすが「ノホヤロー』

と、左耳だけに引っ掛けっていた丸ごと覆うような大きさのイヤホンから聞き覚えのある声が響いた。これは電波を飛ばす旧式のものではなく、遺跡内部でも通信が出来るように魔術的な工夫がなされたものだ。

レーゼは懐に入れている小型通信機の返答用ボタンを押し、イヤホンの側部に収められているマイクをコードごと引っ張つて口元に近づけると、口を開く。

「聞かれていた。どう生きていたのか、アシュレイ

『いやあ、落とし穴の先が硫酸の池だつたんだが何とかなつたぜ』

死ぬかと思つたけどなー、などと暢氣に囁く彼の声を尻田にレーベは手にした地図に目を通し、「ふむ」と呟くと

「……一応、地下の方からも奥に行けるようだし、お前はそのまま進んでくれ。最奥部に通じる扉の前で落ち合おう」

『はははい、リヨーカイリヨーカイ』

アシュレイのなんとも投げやりな返事にため息をつき、通信機を切る。

同時に長剣の柄に手をかけ、振り返りざまに鞘から抜き放つた。

硬い装甲を叩き切った確かな感触が手に伝わり、今まさに短剣を振り下ろそうとしていた紺色の守護機兵の胴体が横一文字に切断される。

だが最後の足掻きといわんばかりに、それは短剣を握り締めた方の腕を無理やり突き出してきた。

「 ッ！」

咄嗟に体を捻り、それを避ける。

だが左頬に冷たい感触が奔った。頬を浅く斬られたと理解したと同時にレー^{レイオス}ゼは無理な体勢のまま、長剣を下から掬い上げた。

その一撃でその守護機兵は上体部から命とも呼べる顔部に象嵌された宝玉 彩奏珠までを真つ二つに断たれ、完全に機能を停止する。

レー^{レイオス}ゼは重たいものが幾つも石造りの床に落ちる音を聞きながら

長剣を鞘に収めると、頬から流れた血を袖で拭つた。

「『最奥部以外の機兵は全滅させた』はずじゃなかつたのか、メリ
ヴィス……」

先ほどの不意打ちの際に手放し、床に散乱したこの遺跡の資料を
拾い集めながらぼやく。

だが当の本人は遙か遠くのギルド本部だ。帰つたら山ほど文句を
言つてやうと内心誓いつつ最後の資料に手をかけ。

「　これは」

そこに載つっていたのは、恐らく最奥部から撤退する際に撮つたも
のと思われる写真だつた。

淡い青色の光に包まれた巨大な空間の中に凄まじい数の機兵がひ
しめき、腕を伸ばしているその姿は少々引いてしまうほど迫力が
ある。

この最後の資料を見たときは、大して興味もなかつたので軽く見
る程度にしていたのだが、どうやらそれは間違いだつたらしい。

レーゼが注目したのはそこではなく、[写真上部に映る青い結
晶]だった。

まるで霞がかかつたかのようにぼんやりとしていてイマイチ分か
り辛いか、それの中に何かが封じ込められている。

それが何なのか少し気になつたが、これ以上眺めても分からぬ
ので写真から目を離して前を見据えた。

「まあ、どうにかなるだろ?」……

そして、まるで自分の声に聞かれるよう、一歩を踏み出した。

第一話・解放 交わる瞳

アシュレイ・シャイスといつも青年は、ギルドで最もお調子者であると評価されている。

それは普段の行いのせいであり、その言動のせいであり、あまりのノリの良さが原因であると言えるだろう。

だが仕事となると話は違う。やることはキッチリとするし、なつかつ行動や判断が速い。あまりの変貌振りに初めて彼と仕事をした者は大抵驚く。

本人が言つには『ギャップがあつて格好いいだろ?』とのことなのだが、それを言つた瞬間に周囲から冷たい目で見られたのは言つまでもない。

そんな彼は今現在、淡い青の光の中に立っていた。

「こいつあ困った

アシュレイは腕を組み、唸りながらさつさつと前を見据える。

彼の眼前に広がる光景。表現としては『巣穴』が一番だろ?か。深いすり鉢状の形をしており、数メートル下の広場にわらわらと歩き回っている守護機兵の群れが見えた。

「メルヴィイスの野郎……『トタラメ書きやがつたな

ハア、とため息一つと一緒に懐から紙束を取り出して一瞥。
そこにはこの遺跡の調査について書かれていたのだが、確かに、
そりやもうハッキリとこいつ書かれていたのだ。

『最奥部以外の機兵の全滅を確認。最奥部への扉は封印済み。以
降は担当の魔術士が到着するまで』

(これはあれか？ あんちくしょうを強請るチャンスですよってか
？)

にやり、ヒアシュレイはほくそ笑む。
その瞬間遙か遠くにいるはずのギルドマスターがぞくつと体を震
わせたのは別の話である。

「つたぐ、仕方がねえな」

だがここにおいては何もならぬことについては理解している。
故にアシュレイはとも面倒くさいに頭をがりがりと搔き、腰か
らぶら下がつてこむ漆黒の十字架に手をやつて呑くように口を開い
た。

『“黒十字”より变幻せよ “白き闇”』

その言葉は魔術を発動する時と似通つた声色だった。

瞬間、漆黒の十字架が溶けるように形を変えた。

十字を模していたはずのそれは余計な出っ張りを収納し、伸びて一つの形を成したのだ。

アシュレイが『白き闇』と呼ぶ長槍が、彼の手の中にあった。

「そいじゃ、ま……いつちよ派手にやりますか！」

刹那、アシュレイは勢い良く機兵蠶く広場へと飛び込んだ。

田の前に潰れた刃が迫る。

色は赤銅。その上に赤黒い血のようなものをぶちまけた色が混ざり合い、見てているだけで不愉快になつてくる。

そんなことを考えながら、レーゼ・クライスは己の頭部を薙ぎ潰そうとするその一撃を軽いバックステップで避けた。

ブオーン！ と風を切る音と共に田の前を分厚い刃が通り過ぎる。だが彼はそのことをまったく気にした様子もなく、ただ強く床を蹴ると守護機兵『騎士型』^{ナイト}の懷へと飛び込んだ。

「…………せいいッ！」

裂帛の声と一緒に一閃。あまり手ごたえも感じずに機兵の胴体を両断し、返す刃で下から顔面部の彩奏珠^{レイオス}ごと十字に叩き斬る。

その一撃で動力部が破壊されたのか、それはばちばちとスパーク

を弾かせながら動かなくなつた。

そして改めて周囲の気配を窺い、敵意を持ったものがいないことを確認すると手にしたものをお鞘に収めた。

彼が今現在立っている場所は最奥部へと通じる扉の手前である。といつても、広さはそれなりにあり、少なくとも機兵が10体以上たむろしていく、その中で自由に動き回つて戦えるほどだ。

先にここへたどり着いたレーゼを迎えたのは機兵の群れであり、それを今しがた全滅させた、というわけなのだ。

「だが、これは……」

レーゼは足元に転がっている大きな錠の型をして封印の残骸を一瞥し、呟く。

これに施された封印は物質操作魔術マテリアル・マグスの応用による『物体の不変化』だ。

決して曲がらず、壊れず、『変化』することのないそれは、少なくとも機兵に簡単に破壊されるほど柔ではない。

更に、大きな欠片を拾つて軽く表面や破碎面を確認してみると、これは、明らかに……。

「　人の手による破壊、か」

確かに『物体の不変化』は魔術で行使されたものだ。

そのため魔力を多量に用いて魔術の構成に割り込み、破壊することも可能だろう。

だが。。

「こんなことをする必要が、ビーにある?」

少なくとも、こんな辺境にわざわざ出向いて、ギルドがかけた封印魔術を破壊するなど、意味があるはずがないのだ。

一瞬だけ、ギルドに敵対する組織の仕業かと思つたが、こんなみみつちい事をするぐらうならもつと別のことをするだろ?。それが相当阿呆な組織でなければ、の話だが。

「……嫌な予感がするな、まったく」

そう呟き、ため息。

そして思つ。分からぬことが多くある、と。

『誰か』が封印されていた最奥部への扉を開き、その中に詰まつていた守護機兵を解き放つた。だがそこに秘められた理由を知ることはできない。

まともらない思考に本日四度目ため息を吐き出し、幸運が逃げそうだ、などと考えながら壁に瀬を預けて力を抜いた体勢になつた。

だが、そこで地面が唐突に揺れ初め、音が響き渡つた。

「おん、おんと定期的に響くそれはレーザの右側数メートル先の床が発生源らしい。その証拠に、そこには徐々に盛り上がりひびが入り始めている。

レーゼはそれに警戒し、瞬時に壁から背を離して柄に手をかけた。
そして 。

「 どひせーい！」

そんな間抜けな声と共に、床が爆碎した。

砕かれた石床が砂煙となつて辺りを包む。レーゼは咄嗟に口元を覆い、床に生まれた穴から何かが飛び出してくるのを見た。

『それ』は空中でくるくると回転し、彼に背を向けた上体で華麗に着地し 何故かポーズを決めている。

身長ほどもあるうかという槍を手にした右腕を斜め四十五度に掲げ、左手を当てた腰を左に突き出している 見ているとサターナナイトにファイーバーしたくなつてくる、そんなポーズだ。

よく見れば『それ』は見覚えのある槍を手にしていて、見覚えのある服を着ていて、見覚えのある鉢巻を巻いていた。

つまり、アシュレイ・ツアイスその人であった。

「 ……何をしてるんだ？ アシュレイ」

レーゼは痛む頭を片手で包みながら、ファイーバーポーズを決め続けているアシュレイへ呆れた様子で声をかけた。

すると彼はにやり、と笑みを浮かべ、

「いやあ、一度でいいからこいつのポーズを決めてみたかったんだよな、俺」

その得意げな言葉にレーザはなんとなく腹が立つたので、元来た穴へと背中から蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされ、宙に浮いたアシュレイは一瞬何かをこらえるかのように全身を強張らせ、次いでバタバタと平泳ぎのよつた両手両足をばたつかせて空気を引っ搔き回し、何とか落下を阻止せんと必死に努力する。

だがしかし、現実は非情である。彼の努力も空しく、たった一つの言葉を残して青年は穴の中へと落ちていった。

「なあぜだああああああああ……」

ちなみに、彼が再び床の下から這い上がってきたのは落ちた時間から数えてきつかり10分後のことである。

「おいおい、何の冗談だよこいつやあ……」

最奥部へと続く扉を開けてその内部へと突入し、その光景を見た

アシュレイはただ呆然と呟いていた。同じように、レーぜも彼らしからぬ表情で『それ』を視界に捉えている。

一人の眼前。そこには淡く青い光を放つ巨大な湖が存在していた。
たつたそれだけ。そう、たつたそれだけなのだ。そこにあるのは
ただ静かな空間だけである。
驚きで未だ動き出さないアシュレイの横から、レーぜは無意識の
うちに一步前を踏み 。

『
だれ?』

聞き覚えの無い少女の声が だが妙に心に響く声色で レー
ゼの耳に届いた。

反射的に顔を上げ、それが聞こえた方へ向ける。

視界に入つたのは、青い光を放つひし形立方体の巨大な結晶。

そしてその中には、うつすらと瞳を開いてこちらを見下ろし
ている1人の少女がいた。

「つー?」

あまりに幻想的なその光景にレーぜは息を呑み、言葉を失う。

見たところ、年齢は十七、十八ぐらいだろうか。青で構成された

何の装飾も無いローブに身を包み、腰まで届く金の美しい髪は翼のように広がっている。

その澄んだ海のような碧眼は虚ろで、あまりにも整いすぎた顔には愁いを帯びた表情が浮かんでいた。

何だ、あれは。

レー・ゼ・クライスは驚きによつて鈍った頭でそう思ふ。ありえない、とただ否定する。

そう、現実的に考えれば『それ』はあまりにも『普通』からかけ離れていた。

だが頭のどこかで、自分ではない『誰か』がその考えを否定した。

これは ありえないことではない、と。

酷く聞き覚えのある声が頭の中に響く。だがそれは無感情で鷹揚がなく、まるで人ではないかのような声色。

「材質、素材 共に不明だと? どうしてことだよ」

いつの間にか機械じみた眼帯を左耳に装着したアシュレイがそう呻く。

そういひしている内に結晶内の少女が動いた。

虚ろに開いていた目蓋をゆっくりとだが持ち上げ始め、瞳に意識の光が宿る。

その視線は一人を捕らえていただけだったが、のろのろとレー・ゼの方へと向けた。

蒼髪の青年と金髪の少女の視線が交差する。

直後、レーゼの視界が暗転した。

風が耳元を通り過ぎる鋭い音で、レーゼは意識を覚醒させた。

視界に飛び込んできたのは、地平線まで続く壮大な草原。

先ほどまで遺跡の中にいたはずだ。それがどうしてこんな場所に
そう思うが早いか、ざあっと風が草原の海を匂いだ。あまりの
勢いに一瞬目を細め、手を目の前にかざす。だがそこで驚きに息を
止めた。

手が、ない。いや、全身を見渡してみればそこには何も無い
つまり今ここにはレーゼの視覚と聴覚だけが存在しているのだ。

あまりに不可解な現象に眉をひそめるように感覚を動かし、現状
を把握するために視界を動かせるかどうか試してみる。すると、九
十度ほど動いてくれた。

そこに、人影があつた。

漆黒の外套を纏つた、長躯の男である。自分と同じような蒼髪だ
が太陽の逆光のせいで顔の辺りが影になつていてその表情は見えな
い。

彼はただ太陽を背に、じつと田の前の光景を見据えていた。

その視線の先が気になつたレーゼは、体を捻るよつた感覚で視線を彼と同じ方向に向ける。

最初に映つたのは、地平の果てへと伸びている汚れ一つない純白の城壁。そして所々にはためく深紅の旗。

それを見て、レーゼは目を見開いた。

中央には『誇り』の証である金色の獅子を据え、周囲を6つの『英知』を司る小さな円で囲み、獅子の背後に『力』の象徴である剣を描いているその旗は、まさしく太古の昔に滅びたとされる古代王国『シンフォニア』の証。

男はしばらく城壁と旗を睨み続け、不意に草原の遙か彼方へと顔を向けた。

『来たか』

そして、とても聞き覚えのある声で彼は呟く。

その視線の先。そこには。

『魂ぱクノ照合ヲ確ニン。再生機構ノ。・0000000。“リティヴィイヴス零番”の封いん解除シークエンスを開始しマス』

酷くノイズの混じった合成音声が一帯に響き渡る。その声にレーゼは咄嗟に顔を上げた。

どうやら一瞬の間、だけ気を緩めてしまっていたらしい。第一級魔術士からぬ『油断』だが、それほどの衝撃が頭上のそれにはあった。結晶内に閉じ込められた少女。それが目の前の光景を表すのに一番な言葉だった。

「『アーティファクト』の影響で閉じ込められたのか。それとも……」

レーゼは口の疑問を呑みこむようにして口に吐出す。

アーティファクトとは、古代文明が生み出した特殊な力を持つ道具の総称だ。

その大きさは小指大のものもあれば、一軒家が数10個収まるほどの巨大なドーム状のものまで多岐に渡る。

そして秘められている能力は見た目と反している場合も多く、使いつによつては暴走する可能性もあるので『ヴァルハラ』は積極的にそれらを回収し、その力の解明に努めている。

「アシュレイ。彼女を降ろす事は？」

「無理だな。俺の『千里之眼』で無理やり解析してみたが、内部が『魔奏回路』で埋め尽くされてやがる。下手に動かすと何の魔術

が発動するか分からねえぞ」「

ふと思ひ立つて隣の青年に問いかけてみるも、本人はそう言つて左目の眼帯を叩いた。

彼が言つ『魔奏回路』とは、魔奏珠の内部に刻まれている『世界樹』へと至るための回路だ。

絵本などによく見かける魔法の方陣　いわゆる魔方陣のような代物で、魔奏珠が壊された時に活用することもできる。

だがあの結晶体全体にそれが張り巡らされているという。つまりあれはいつでも魔術を発動可能といつわけだ。慎重にながらを得ないだろう。

「ならば、これで　」

仕方がない、といった様子でレーゼはホルスターから一丁の小型銃を取り出す。

それは何の装飾も存在しない無骨な外見で、色は漆黒。左側面には群青色の宝玉がはめ込まれており、アンバランスな銃であつた。

『魔力銃』と名のつけられたそれは鉛ではなく魔力を打ち出す代物だ。

レーゼは照準を空中の結晶へと合わせ、弾丸としての魔力を銃へと送る。

するとそれに呼応するように銃の側面に彫られているエネルギーラインが発光を開始。

だが　。

『…………。解除シーケンス、正常終了。封因結晶体“万理の令晶”を開封。続いて構成術式の組み換えを開始…………成功。再生機構N.O.0000000“リティヴィヴィス零番”・イリス・レミナー』ト開放します

「…………くつ！」

「うおっ！？」

刹那、先ほどとはまったく違つクリアな合成音声が響き渡り
青い光が一人の視界を覆う。

咄嗟にレーゼもアシュレイも腕で目がつぶれそうなほど強烈な光
を防ぎ、収まつた後にそつと上を見据えた。

そして最初に見えた光景は、魔術も使つていらないのに宙に浮
く少女の姿。

先ほどの光はある結晶が消滅した影響だつたのか、彼女の体は外
気に晒されている。

レーゼは改めて少女の顔を見た。

感情を宿しておらず、まるで機兵のような瞳。人形じみた造形美
も相まって、まさしく彼女は本物の『人形』にしか見えなかつた。

「…………む」

そこまで考えていた時だつた。あらゆる変化を終えた少女が空中からゆっくりと足から降り始めた。

まるで偉大な何かが降臨したかのような光景に一人はしばらく言葉を失う。

だが、このままではあの娘が水の中に沈んでしまうと考え、水中に飛び込んで助けるべきか一瞬迷ってしまう。

その一瞬の後に何かが凍る音が広大な空間の中に響き渡った。思考を頭の隅に追いやり、その音が聞こえた方へと顔を向ける。そこには少女がいた。

魔術を使わず、ただ足元の水面を凍らせながら 少女は目を閉じて浮いていた。

再び思考が停止する。

「おいおい、嘘だろ」

アシュレイの咳きも耳に入らない。ただ目の前のあるえない情景に目を奪われる。そしてついに、かすかな冷気を漂わせて氷結は泉の縁で止まつた。

田を凝らし、レーゼは少女の姿を探す。

霧のようなものが発生してよく見えないが、少女は確かにそこに立っていた。

だが刹那、支えを失った人形のようにイリスと呼ばれていた少女は、力が抜けたかのように倒れ込む。

「 ッ！」

咄嗟にレー・ゼが駆け出した。

どうやら泉は奥深くまで凍つていてるらしく、大人が乗ったぐらいでは割れない。その上、氷特有のつかみ所の無い足場ではなく普通の地面のように容易に走れた。

アシュ・レイが背後で何か叫んだが無視し、少女の下へ一目散に駆け寄る。

なぜそこまで必死になるのか自分でもよく分からないが、そうしなければならない気がしたのだ。

それが何の感情かは知らない。ともかくあの娘を無事に保護する事だけが最優先事項だ、と。

氷漬けの泉の中央。そこに横たわっている少女の下へ辿り着いき、膝を突いてその小さな肢体を抱き上げて、意外と軽いことに驚きながらも立ち上がる。

少女　　『イリス・レミナート』と合成声にそう呼ばれた少女は驚くほど整った顔立ちをしていた。

あの結晶体に閉じ込められていた時は遠くにいたのでその輪郭がよく分からなかつたが、改めて見てみるとそう感じてしまう。

肌は透き通るようす由べ、肩より若干長い金の髪に縁取られた顔は小づくりで、その中にある小さな薄紅色の唇は閉じられている。

妙に滑らかな青のローブを着ており、首からは矢じりの形をしたペンダントをぶら下げていた。そのペンダントの真ん中には青の小さな宝玉が埋まっている。

ぐつたりしているが、胸が上下している所を見るとただ気絶しているだけのようだ。

「それにしても……」

少女の無事を確認して安心したのか、レーゼは一人呟く。それは既に彼のクセのようなものだ。考え事をするときはつこうやつて独り言を口にしてしまう。

考える事はただ一つ。この少女は何者か、とこいつことだ。

だが一人で考え込んで仕方がない。少なくとも、あの馬鹿で変人なギルドマスターの知恵を借りなくてはどうしようもない。

この異常現象を信じてくれるか　　それだけが心配だ。

「ワケが分かんねえな。……どうするよ。レーゼ」

いつの間にか隣に来ていたアシュレイはレーゼが抱え込んだ少女の顔を覗き込みながら言った。

「ああ、とりあえずメルヴィスに相談してみるしか

そう言いかけて、少女が苦しそうに体を動かした。レーゼは言葉を止め、問いかける。

「……起きたか？」

その声が届いたのかは知らないが、イリスは瞼を震わせて、目を開いた。

「あ……」

続いて、鈴を転がすような声で何かを言いかける。しかし苦しそうに咳き込むと、ぼんやりとした眼をレーザに向けた。

思わず見つめられた本人もその美しい瞳に吸い込まれるように目を合わせ。

「 に、げて」

少女の声に、我を取り戻した。

「お前、一体何を 」

何を言つているんだ、と言いかける。

だが次の瞬間、それは何か巨大なものが地面に突き刺さるような轟音に阻止された。

それが聞こえた方へと顔を巡らせ、瞬時に表情を凍らせる。隣で静観していたはずのアシュレイも、顔を引きつらせていた。

二人の視線の行き着く先に、『それ』はいた。

タマゴ、と表現すればいいだろうか。アーチを描いた灰色の『そ

れ』は、底辺の横辺りから三角形の足のようなものをぱっくりと生やし、頂上からは円錐状の光る单眼^{モノアイ}を覗かせている。

間違いなく、守護機兵の一種だ。

それも上位の守護機兵の一体である『守護霸者^{グラント}』 通称『アイゼン・リッター』と呼ばれる存在。

その間抜けだが禍々しい姿を見た瞬間、レーゼは最悪だ、と思つた。

アイゼン・リッターは魔術士の中でも最高の称号といわれる第一級に到達した人間が三人束になつてやつと倒せるというほどの戦闘能力を保持しており、しかしその数の少なさからもはや『伝説』としてでしか扱われていなかつた。

それが今日の前にいる。倒せるかどうかも分からぬ化け物が。

「これは、ちょっとヤバイかな……」

冷や汗を垂らしながらアシュレイが呟いた。反射的に槍を強く握つており、既に戦闘体制には言つていい。

だが、その戦意もすぐさま失わることになる。

壁に次々と穴が開き、中からまるで亀の産卵の如くアイゼン・リッターが何体も飛び出きたのだ。そして瞬時に起き上がり、壁を作るかのように左右に展開していく。

がちり、と前足代わりの三角足をぶつけ合わせ、威嚇するよつこにじり寄り、最強の機兵は包囲網を狭めた。

万事休す、か。

レーゼは心の奥底の自分がそう言つたのを確かに聞いた。だが、と思つ。ここで簡単に諦めるわけにも、死ぬわけにもいかない、と。

故に、少女を庇つように抱きかかえ、右手で器用に長剣を引き抜き言った。

「……わて、足搔くぞ。アシュレイ」

「お前は何でやつ氣輕に言えるんだよ」

レーゼの極めて冷静な言葉にアシュレイは「たくつ」と呆れたような顔色で返し、だが次の瞬間には口元に獰猛な笑みを浮かべた。

「しゃーねえな。一思いに暴れるか」

気合を入れるように槍を構え、一人は背中合わせになる。もちろん少女はレーゼが抱えてまだ。

ゆづくづく、緊迫感が増してゆく。
空氣は既に張り詰めており、少しでも揺れれば全てが断ち切られるかのように、誰も、何も動かない。

「……げて」

唐突に、少女が呟いた。

同時にアイゼン・リッターがその研ぎ澄ませた脚部を振り上げ、

飛び掛る。

レーゼは即座に動けるように足に力を込める。

アシュレイが詠唱を開始する。

全ては一瞬の出来事。

「逃げてえええ
！」

少女が叫ぶ。

瞬間、彼女の首にかかっていたペンダントを中心として、閃光が奔った。

その光は一瞬にしてイリスとレーゼ、そしてアシュレイの三人を包み込み。

そこに三人の姿などは、どこにもなかった。

第三話・邂逅 始まる物語

時は既に夕刻。レーゼとアシュレイはギルド内にあるメルヴィスの執務室にいた。

あの妙な光に巻き込まれた三人は気付けば遺跡の入り口に佇んでおり、そのまま氣絶してしまった少女を急いで魔道列車に乗せて大都市ダルムへイツに帰ってきたのだ。

その際、少女のことを駅員に色々と疑われたが銃を突きつけるといつ誠実な交渉のおかげであつたり乗せてくれたのは言ひまでもない。

そして今、少女は一向に田を覚ます事なくソファの一いつを占領している。

「つまりこの子 イリスちゃんを助けたために遅くなつた、と」

一人が今までの出来事を説明し終えると、ギルドマスターであるメルヴィスはうんうんと頷いて、

「青春だねえ……」

「あひー！」と奇声を上げてメルヴィスは鞄を叩きつけた。

「あひー！」と奇声を上げてメルヴィスは避ける。

さりにそれを追撃すべく腰のホルスターから魔力銃を引き抜き照準するが、傍らにイリスが寝ていることを思い出し、引き金から指

を離した。

「こんな狭つ苦しこ場所で血やら脳漿やらを飛び散らせたらそれこそ片づけが面倒くせこという、そんな考えもあるが。

「死ぬかと思つたよ」

ふう、と額の冷や汗をメルヴィイスは袖で拭きつつ座り直す。そしておもむろに口を開いた。

「それで、君たちは彼女をビリしたいんだい？」

「俺たちが聞きたいぐらくなんだが

レーゼが言葉を返すと、

「だよねえ。だからじひじてわざわざ僕に頼りに来たんだろう」

メルヴィイスはふーむ、と顎に手を当へ、ソファーの上で居心地良さそうに眠る少女を眺め、

「……なんか、どこかで見たことがある顔なんだよねえ」

「つこに子供までに手を出さよつとなつたか

その指摘に慌てて青年は手を振り、証明するよつて言った。

「まみは、なに言つてんだかこのお馬鹿をよみ。まみまみまみ
そんなことしたら僕がマイナに殺されまーす

「お前の奥さんって確か『軍神』だったよな……。跡形も残らず消し炭にしてもらえよ」

レーゼの言葉にメルヴィスは笑いながら冷や汗を流していた。

それもそのはず。『軍神』とは言つてしまえば『自然災害』に例えられるほどの、『止めようがない』強力無比な存在だからだ。

九一年前の『統一戦争』でも、別の『軍神』が剣一本、拳一つで単身敵基地に乗り込み、わずか半日で壊滅させたといつ噂さえ存在している。

『軍神』が何故それほど強力な力を持つているのかは、未だに証明されていない。

せいぜい、『軍神』は四十年周期に一人だけが生まれ、初めから規格外の戦闘能力や魔術的な能力を有している、といったことぐらいしか分かつてないのが現状だ。

時折レーゼは思つ。コイツよく結婚できたな、と。

「あ、うん、ごめん。絶対に言わないでくださいお願ひしますっ！」

自分の妻の暴れっぷりを思い出したのか、必死に頭を下げるメルヴィスを見て何となく不憫に思えてきたので話を逸らす。

「まあその話は置いといて、だ。とりあえず、どうするよ?」

「んー。ともかく血の繋がった人を探したいところだけどねえ」

話題を変えると、早速メルヴィスは考え出した。頭だけは無駄い

いのだ、こいつは。

「そもそも『結晶の中にいた』なんていう状態で肉親とか血の繋がつた人間がいるとは思えねえな」

アシュレイの意見にレーぜも同意するように頷く。

その時だ、少女がかすかに身じろぎをしたのだ。
まるで悪夢から逃れるように、苦しそうに何度も寝返りを打つ。

「ん……」

「起きたか」

咳き、レーぜが立ち上がり少女の側まで行く。
ちょうど少女が目を開けたところだった。

二人の目が合つ。

少女が、目を見開いて咳いた。

「？」

聞き取れなかつた『それ』は、誰かの名前。

だがそこには最大限の愛情と悲しみが詰まつており、まるで久し
ぶりに会つ恋人への呼びかけのような。

そこまで考えて、レーぜの意識は激しいノイズと共に闇へと落ち
た。

これは……。

風が優しく草を撫で、過ぎ去つていいく草原の中央にレーザは立つていた。

地面は地平線の果てまで緑で覆われている。

咄嗟に前へ出ようとすると、動けない。足を見てみると、そこで初めて自分が視覚と聴覚だけの存在だと理解した。

そして思い出す。以前に一度だけ、似たような状態になつたことがある、と。

いつたい何なんだ、これは。

答えてくれるものはいない。ただ悠然と風が吹き抜けていくのみ。

『ここにいたのか、』

そこに響いたのは若々しい声だ。以前と同じようにレーザは体を捻るような感覚で視線を動かす。

草原の中央に、青年がいた。

知的で優しげな茶の瞳を持つ青年だ。白色の髪がつばらんと切つており、白衣のような上着を着ている。

研究者だろうが、ヒーローが思考する前に再び違う方向から別の声が聞こえた。

『ルトか、……何かあったか?』

視線をそちらへ向ける。

青年は、ルトと呼ばれていた白衣の青年と同じように草原の真ん中に立っていた。

白衣の青年と相対する彼の顔は見えない。まるで意図的に隠されているかのように。

寝転んでいたせいか肩ほどに伸びた鮮やかな青髪には葉が絡まっており、だが太陽の光を受けて艶を放っている。

白衣の青年はそんな彼に歩み寄りながら口を開いた。

『知らないかい?』

『また逃げたのか? 懲りずにやるものだ』

やれやれ、といった様子でそう言った青髪の青年は苦笑し、ルト

『まあ活潑だからいいじゃない。それにほら、彼女、君に懷いているから』

『懐かれる身にもなつてくれ。遊んで遊んでとひむかくてたまらん』

『あははは、それぐらいがちよつといいんだよ。あの子だつて、一人で寂しかったんだから』

青年は「やれやれ」といつた様子でため息をついた。

『確かにそうだな。……だがあいは、何故か俺がちょうど暇な時に遊んでと迫つてくる。そこが怖い所だ』

堪えきれなくなつたのか、ルトは腹を抱えて笑い出す。それを取り繕つように青年は咳払いをし、

『ともかく、「外」に出てたら大変だ。俺も探すのを手伝ひや』

『そつだね。彼女がいなくなつたらみんな悲しみじやうし。頼むよ』

『ああ。それにあいは、俺たちの』

そこで言葉は途切れた。

何を言つているのかは聞こえない。だが二人の間には友情のよつなものがあるのをレーゼは気付いていた。

青年一人は歩き出す。少女の名を呼びながら。草原の中を。

そしてレーゼの意識は急激に深淵へと落ち、浮上する。

闇から浮上したレーゼの意識は突如として現実へと引き戻された。

まず焦点が戻り、感覚が戻り、そして全てがレーゼの意識下に收まる。

夢のよつな何かを見ていたよつな氣がするが、やはりこれも覚えていない。

やがて、五感が完全に戻った。

そして見えたのは不思議そつにこからを見返してくる少女だ。整つた顔立ちをしており、つぶらな澄んだ碧眼はにわかに焦点が合つていない。

少女 確か合成音声にはイリス・レリナードと呼ばれていたは小さく頭を動かし、しかしひばんやりとした表情で、

「……あ」

そう呟き、首を振つて「」の覚醒を促す。

そして完全に目が覚めたのか、毛布を持つたまま起き上がり振り返り、三人を視界に收め、

「……あなた達は、誰ですか？」

小動物のように首を傾げ、きょとんとした声で聞いてくる。

「その前に、じつちも聞きたい」とあるんだけど

イリスの言葉をメルヴィスが留める。そして彼は続けた。

「うーん、とりあえず君の家の所在地とか親のこととか。ね？」

数秒の間の後、少女は俯きながら口を開いた。

「……わかりません」

「なに？」

思わずレー・ゼは聞き返してしまった。だがイリスの声は止まらない。

「わからないんです。自分が誰だか、ここがどことか……」

寂しげな表情を浮かべ、少女は呟く。

「私は、誰なんですか？」

その問いかけは、空しく霧散した。

「記憶喪失、ねえ」

メルヴィイスは少女のために紅茶を入れた後、自分で入れたコーヒーを飲みながらそつ呟いた。

「実際あるのか？ そんなもん」

「田の前に実例がいるじゃない」

わざと切り返され、アシュレイは「んがつ」と声を詰まらせる。

「あ、さつかり言つちやえば『記憶』を『喪失』しかりつなんてよつぱじの衝撃がない限りはありえないよ。うん」

メリヴィスは自分の言葉に納得したのか、うそうそと頷いた。

「それで……、結晶の中に閉じ込められていた事も、本当に何も思い出せないのか？」

レーゼはそれとなく少女に聞いた。

そう、この少女は一人に会つたあの洞窟内での出来事を何も覚えていないのだ。

さらに言つてしまえば、それは全員が自己紹介した後に分かつた事なのだが、こので田覚める以前の記憶もなくなつているらしい。

イリスは紅茶を一口に入れ、落ち着いたように一息つと答えた。

「はー……」

表情を押し隠すように俯いてしまつ。そして「「」あなたこそ」と呟くよつて言つた。

そんな彼女の態度にレーゼは無意識のつまごを不機嫌そつと曲げる。

「別に謝るじとはない。記憶が無くとも、人は生きてはいけぬ」

やしてやうぶつれひめひと、イリスはせつとしたよつに顔を上げて聞き取りづらこせび小かな声で呟いた。

「 ありがとう」

「 礼を言われるよつな事は何もしていないが?」

とほけるよつにレーザはまそつ答える。そんな彼に少女は小さな笑みを返した。

「 何はともあれ、イリスちゃんの記憶を取り戻さなきゃいけないね」

ぱん! と手を叩いたメルヴィスはいそいそと机の下から巨大な機械を取り出す。

面倒だったので、レーザはそれをどうやって収めていたのか聞かないことにした。

机の上に置かれた『それ』は、実に奇妙な形をした機械だつた。

先端と思われるのは調理用のボウルを逆さにしたような半円形をしており、根本に埋め込まれたホースは赤で彩られたドラム形の本体へと繋がっている。

そのドラム形の本体に見えるのはコンソールとそれの下にある四つのボタンだ。

せりに下にある注意書きには『全部のボタンを一齊に押すと

「ヤバいよヤバいよ」モードになります』と書かれており、妖しく輝く画面には謎の数字がずらりと並んでいます。

「……何だそれは

レーゼが半眼で問うと、得意げな表情でメルヴィイスが言葉を返した。

「ん？」『記憶吸引君・ディ・ガーワ型』だよ。ウチの開発部が最近暇だからっていう理由で作っちゃつたらしね。『世界樹』の『全ての記憶を司る場所』から目的の記憶を引き出す試作機

「どんな使用目的だよ、そりゃあ」

呆れた様子でアシュレイがそう聞く。
確かに、他人の記憶を覗くなどと、使用用途がかなり限られてくるだろう。

「これを被せて、こう、ギュイーンとー、ギュイーンとー、吸っちやうわけだね、その人の記憶を」

そんな疑問をメルヴィイスはさらりと無視し、ボウルを被つて吸っている事を表現するかのように両手を頭に添え、上げ下げした。

駄目だこいつ。いろんな意味で。

いつもより若干暴走気味な彼に、レーゼは痛む頭から逃れようとこめかみを親指と人差し指で揉み解しながら、再度問い合わせる。

「一応聞くが……実験は？」

「じゃないけど？」

「どうあえずお前が吸われている

その返答に、レーゼは即座にコンソールの下に付いていたボタンの一一番左を押した。

下には、『最大出力』斗書かれているが気にしないことにする。

瞬間、ぎゅきゅぎゅいいいいん！ と[冗談抜きでヤバそうな音]が『記憶吸引君・ティ・ガーワ型』から発せられた。

その上、上下左右に振動した拳銃に熱廃棄のための場所からは黒い煙が吐き出される。

「あばばばばばばー！ 吸われてる！ 凄い勢いで吸われてるよ！

あああダメだダメだダメだこれ以上吸われたら何かが変わっちゃうー！」

そして、凄まじい勢いで身をくねつているメルヴィスを見て気持ち悪くなつてきたので『停止』と書かれているボタンを押し込んだ。

軽い振動と共に吸引君が停止。同時にコンソールに何かの映像が映し出される。

「なんだこりゃあ……」

アシュレイはそれを覗き込み、唸る。

そこに映されていたのは何故か爆発から逃げ回つてゐるメルヴィ

スだつた。

紅蓮の炎が辺りを包み、連続的に爆碎する地面を避けて彼は走っている。二人がしばらく見ていると、メルヴィイスが足元の爆発を受け吹っ飛んだところで映像が途切れた。

だが直後、記憶吸引君がガタガタと不穏な音を立てて震え始め、黒煙を上部から噴出し始めた。それを見たレー・ゼの脳裏に嫌な予感が掠める。

そしてその直感に従い、咄嗟に記憶吸引君を掴み上げ、

「そおーらー！」

そんな掛け声と共に、ボウルを装着していたメルヴィイスごと記憶吸引君を窓から外へとぶん投げた。

体内を巡る魔力^{マナ}よつて無理やり強化した腕力によつて虚空へと放り投げられたそれは、眩い光を全体から放射し　刹那、轟音と共に爆碎する。

ズズンッ！　とギルド本部全体がその衝撃で揺れるが、そこで働いていた職員のほぼ全てが三秒後には「ああ、またか」といつた表情で業務へと戻つていった。

ちなみに下の方は既に確認済みで、訓練所であるそこに人影は見えず、実質的な被害はない。

「め、メルヴィイスさーん！？」

「ふう……悪は滅びた」

「メルヴィイス、お前の犠牲は無駄にしないぜ」

メルヴィイスが記憶吸引君と共に散ったのをぽかんとした表情で見ていたイリスはその一人の声を聞いてようやく我を取り戻し、慌てて窓際まで走つていって爆散したギルドマスターの名前を呼ぶ。

だが返事をするものはおりず、まさか、と思つたその次の瞬間。

「 勝手に殺さないでくれるかなあー？」

「ひゃあ！？」

ぐわし、と窓枠を掴んでよじ登つてきたメルヴィイスがそう叫んだ。それに驚いた少女は可愛らしく悲鳴を上げて尻餅をつく。

「生きていたか」

そんな彼女を助け起こしてやりながら、レーゼは舌打ちをしてそう呟いた。

声色には実に残念そうなものが混じつてあり、その言葉が本気であつたことを示している。

「なんで生きてんだよ、お前」

「ふつふつふ、」のヘルメットがなければ即死だつたよ、

そしてこれ見よがしに残念がるアショレイに、白髪の青年はいつの間にか被つていた黒いヘルメットを「ソソソソ」と突き、

「開発部が生み出した試作型衝撃吸収機『衝撃君ファースト』だ。吸収した衝撃はこの籠手に溜め込まれ、ここから射出する」とで若干ながら空も飛べるんだよー？」

誰も頼んでいないのに話を始め、次に血らの腕に装着した黒くゴツい籠手を指差してメルヴィイスはのん気な表情で説明を続ける。

「問題は衝撃を頭で受けて溜めなきゃいけないから、落下中はずつと自分を殴りまくったよ、いやあ辛かった」

そんなゴツいものをどこから取り出したのかは説明されていないが、レーゼはあえて言及せずに先ほどの映像を思い出として呟いた。

「……あれは、奥さんを怒らせたといつといつか。夫婦喧嘩の糸を超えていたな」

「そういうや昨日、都市の外れで原因不明の火災事故と爆発事故あつたよな。……真相はあれだつたわけか」

その言葉を聞いてメルヴィイスはその時の事を思い出したのかビクリと固まり、

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ……」

同じ言葉を永遠と繰り返しながら部屋の隅で「の」の字を書き始めた。

そのあまりの豹変振りに、イリスは反応に困ったのかレーゼの方

を見た。

そんな彼女の視線を受けた青年はふむ、と頷いて、「気にしないほつがいい。ところが気にするな」

「は、はいっ」

その声にイリスは慌てて立ち上がり姿勢を正し、答えた。

「さて、んじゃあ次は俺が頑張ってみますか」

「無駄だとは思うが、一応聞いてみよつか。何をするんだ？」

絶対に阿呆なことを考えていると知りつつも、レーベゼは聞く。するとアシュレイは顎に手を当てて考えるよつこいに唸り、

「記憶が戻るまで頭部を集中的にマウントパンチ。俺の知り合にはこれで治つたぞ?」

直後、ソファーの上からアシュレイの姿が鈍い音と共に消失した。それを見てイリスは躊躇いがちに、

「あの……何でアシュレイさんは床に転がっているんですか?」

「知らん。急に床に寝転びくなつたんだろ」

「その割には随分と痛がつているようですが……」

頭を押されて「ぬおおおおお」と声を上げつゝ床を転がり回つ

てこる緑髪の青年に鼻を鳴らし、レー・ゼは握っていた拳を解く。

そんなやり取りを見ていたイリスはくすくすと笑った。

だがレー・ゼがそちらに視線を向けると、少女はそれに気付いて顔を真っ赤にして俯いてしまった。

一体どうしたのか、とかすかに疑問に思つが、こきなり発せられた言葉にその思考は中断させられた。

「まあそこまで急いで記憶を戻すこともないよね」

いつの間にか復活したメルヴィイスがソファーに座りなおし、微かな笑みを浮かべながらそんなことを言いはじめたのだ。

彼の言葉に若干の戸惑いの表情を浮かべて、イリスは頷く。

「は、はあ」

「それじゃ当面、イリスちゃんが住める場所を探さなきゃね

のんびり暮らせばいいつかは戻るでしょ、と付け加える。

するとイリスは、「ええ！？」と何故か驚きの声を上げた。

しかし自分の声の大きさに気付いたのか、白い肌の頬をさらに紅色に染め、

「え、えーっと……。私、そこまでもお世話になるわけには……」

「でも記憶が無いから住む場所も無いでしょ？」

その言葉にイリスはあつ、と口を閉じてしまった。

「ギルドで預かる事はできないのか？」

「無理だねえ。それにこんなかわいい子を癒し分に飢えた男共の中放り出すなんて気が引けるし」

「確かにそうだな……」

レーゼはメルヴィスの言葉に即座に同意した。

基本的にギルドには男が多い。それは守護機兵と戦うことは危険であり、力自慢が集まるために必然的にそうなってしまうからだ。

そのために女性はほとんど事務業などに回され、前線に出てくるのは小数だ。だからメルヴィスには気が引けたのだろう。あの荒くれどもの中にこの少女を放り込むことを。

「だったら女性職員の誰かに預けるか」

「いや、その必要はないよ」

「なに?」

「最適な案が一つだけあるんだよね、これが」

人差し指を一本立て、メルヴィスは言葉を続ける。

「はい」で多数決に移ります。第一発見者のレーゼ君を保護者とするという方向で賛成の方一

手が三つ上がった。

いつの間にか頭に巨大なタンコブを作つて部屋の隅で氣絶しているアシュレイの腕をメルヴィスが無理やり掴み、掲げているのとその本人が上げているので一つ。

そしてもう一つは。

イリスが控えめに手を上げていた。

なぜそこでお前が上げる、とツツコみたかったがギリギリ抑え込む。「口を落ち着かせるために深くため息をつき、深呼吸。

「……ちよつと待て、そこで氣絶してるのは数えないだろ」

「やあ僕アシュレイ！ 僕はレーゼ君といリスちゃんが住むのに贊成だな！」

白目を剥き、泡を吹いているアシュレイの体をガクガクと震わせ、裏声でメルヴィスが言った。かくんかくんと頭が揺れる姿は凄まじく滑稽である。

「……勝手にしろ」

これは何を言つても聞かないな、と心の底からそう感じたレーゼは諦めにも似た口調で呟いた。

「はい、というわけで決定！」

もはや用なしなつたアシュレイを投げ捨て、メルヴィスは意気揚々とソファーに座る。見事に押し付けられた、という感じだ。

じうせ初めから」いつあるつもつだつたのだらう。じじまでやられるとむしろ清々しい。

「あの……」

「ん？」

「これから、よろしくお願ひします」

嬉しそうに顔を緩め、イリスはぺこりと頭を下げる。首にかかつたネットクレスが光を反射して輝き、金糸を梳いたような美しい髪が、さらりと揺れた。

その光景に表情を和らげながら、レーヤは言葉を返した。

「ああ。よろしく頼む。イリス」

第二話・邂逅 始まる物語（後書き）

「これで第一章の終了です。次回の第二章でお会いしましょう。」

今までの登場人物 Ver.1（前書き）

区切りがいいので、一話から三話まで登場したキャラクターのプロフィールを簡単にまとめてみました。

今までの登場人物 Ver.1

レーゼ・クライス - Lese Cries -

遺跡探索・魔術士ギルド『ヴァルハラ』に所属している魔術士。ギルドの中で最も高いランクである『第一級単独探索許可書』エクステス所持者であり、その実力は折り紙付きである。

容姿は美形といつても過言ではない。

首すじまで伸ばした青の髪を一まとめにしており、鋭い刃のような冷たい碧眼を持つ。

黒いシャツの上に、対魔術の効力を持つ仮想金属を纖維状にして織り込んである青い防刃ジャケットを羽織り、同じように金属纖維を編みこんだズボンを着用している。

使用武器は長剣と魔力銃。

堅実な戦法を得意とし、派手さはないが確実に守護機兵を破壊するように立ち回る。

イリス・レミナート - Iris Leminaut -

古代遺跡『アルバレスタ』の地下において巨大水晶に封印されたところをレーゼらに発見され、保護された謎の少女。

現在は重度の記憶喪失であり、保護される前までのことを名前を除いて一切覚えていない。

見た目は美少女といって差し支えない。

金髪碧眼で、肩甲骨が隠れるくらいの金糸のように美しいロング

ヘア。

アシュレイ・ツアイス - Ashley Zeiss -

遺跡探索・魔術士ギルド『ヴァルハラ』に所属している魔術士。

『第二級単独探索許可書』セイレス・ルード所持者ではあるが、その実力は『エクステス』に匹敵している。

陽気な性格で、誰からも親しまれているが、一度調子に乗るとスマをしやすく、どこか抜けている。

ざつくばらんに切りそろえた銀灰色の髪と緑の瞳を持つ。その容姿はどちらかというと一枚目。

使用武器は十字架から姿を変える長槍。

得意の重力魔術によって派手に動き回りながらブーツやコートに仕込んだ暗器なども使い分けて戦い、トリックキーな戦いが得意。

メルヴィス・セルタレイ - Melvis Seltaray -

『遺跡発掘・魔術士ギルド』が誇る三大ギルドマスターの一人であり、『古の到達者』の二つ名を持つ青年。

『怒る』ということをしない極めて穏やかな性格だが、人を扇動するのが最も得意である。

また既婚者であり、『軍神』である奥さんに尻に敷かれているようだ。

雪のよつこ白い髪で茶の瞳を持つ。容姿はそれなり。

レーゼらには手荒く扱われているが、大部分のギルド職員には慕われている。

だが、どんな時でも心のゆとりを忘れずにはつちやけまくつてい
るせいか、『変人』として見られることもしばしば。

第四話・魔術 記憶のかけら（前書き）

PCの故障で投稿が遅れました、すみません。
第一章のスタートです。

第四話・魔術 記憶のかけら

『「この子が なのか？ なんだ、普通の女の子じゃないか』

それはハジメテのコト。

赤くて蒼くて黄色くて、白くて黒い世界の中で初めて聞いた
優しい音。

『ふむ、言わせてもらひが……。彼女が何であるかと“もの”扱い
はするな。

はただの女の子であり、私たちが守るべき存在だ。それ
以上でも以下でもない。

……うん？ 正氣か、だと？ 阿呆め。お前は彼女が化け物で
も見えるのか？ もしそうならもう一度言つてやろう。 この馬
鹿、阿呆、ドジ、マヌケ、とな』

何も分からなくて、何も知らないで、何も見えない世界でその暖
かい声は確かに この心に染みこんできた。

『む、怒ったか？ ははは、この軟弱な研究者め！ そんな拳で私
を倒せるものか！

…………おい、待て。阿呆だの馬鹿だのと言こすぎたのは私が悪
かつたからそれを仕舞え。

…………なに？ 痛くはしない……？ いやちょっと待て！ それは
痛い以前の問題で ！』

眩しい誰かが怒っている声が、感情がこの心を打つ。

暖かい誰かが慌てている声が、感情がこの心を打つ。

全てを受け入れてくれる誰かが、笑っている声が　この魂を打つ。

『ああ、ああ。反省したよ……。まつたく、お前は怒りっぽいな。
くくく。いやすまない。
十分反省したからその物騒なものを仕舞え。怖くてかなわん。
さて、様子も見たし私はそろそろ行くぞ?』

暖かくて優しい誰かが魂と心を撫でていく。
だけどそれはゆっくりと田の前から消えていった。

『なに、次も暇な時に来てやるわ。それじゃあまたな　　イリス

それは色褪せない原初の記憶。

おわることのない、ゆめのつづき。

イリス・レミナーートの朝は早い。

何せ、人の家の世話になつてゐるのだ。急げていたらバチが当たる、と本人はそう思つてゐる。

「んにゅう……」

眠気を振り切つた彼女は可憐らしい呻き声を上げながら起き上がつた。

かけていた毛布がベッドの上に落ち、美しい金の髪がさらりと揺れる。

くあ、と猫のように欠伸をしてイリスは立ち上がり、ついでに皿蓋を擦つて自身の覚醒を促す。

「朝、ですね」

窓の外から差し込む光を眺めてそう呟くと、「んーー」と体を伸ばして立ち上がつた。

自分を助けてくれた同居人のためにやるべき事はたくさんある、と、イリスは気合を入れるようにガツツポーズをすると部屋を出た。もちろん最低限の身だしなみを整えてから、ではあるが。

少女がレーゼの家　といつても部屋が二つといくつも小さな倉庫代わりの部屋が一つ。そしてリビングとこじんまりしたキッチンで構成された魔術士専用の集合住宅の一つなのだが　にお世話になるようになつてから既に一週間が経つており、その期間でイリスは自分が大体の自分の役割を理解していた。

自分は戦闘には出られない。武器を振るう力などあるはずは無く、それは分かりきつてゐることである。

彼女にとつて出来る事は唯一つだけ。

ギルドや世界政府、そして各方面から持ち込まれる依頼を完遂して帰ってきたこの家の主人のために、精一杯家事をすること。

辛うじて『知識』としての家事のやり方は知っていたのでビックリかなつているが、料理の方はまだまだだ。

本を買って勉強しようにも、自分のものではないお金を使うのは憚られるし、それで上達しなかつたら田も当たられない」と言つのが彼女の心境だった。

「はあ……」

一週間で作り慣れた日玉焼きを一人分焼きながら少女はため息を付く。それは現状の不満に対するものではなく、自分の『能力』のなさに対してだ。

過去に関する全ての記憶を失つてしまつた自分をさりげなく励まし、そして渋々ながらも文句の一つも言わずに迎え入れてくれた彼に対して、自分は何も恩返しを出来ていない。

唯一、恩返しができそつなものであつた魔術もメルヴィイスと呼ばれていた青年に「ありえないぐらい適性が見つからないねえ」なんて言われたら、そりやあ落ち込みたくもなる。

「魔術かあ」

ある程度時間が経つた後にフライパンの上へ水を少量落とし、界

オード

魔力によって動作する「ンロの火を弱めにしつつ蓋をする。

そして皿を並べ終わつたイリスはまだ焼き上がりない田玉焼きを眺めながら、数日前に受けた適性検査のときに聞いた説明を思い出していた。

魔術とは『奇跡の代行』ではなく、定められた一定の事象つまり、森羅万象の一時的な『強制変質・強制操作』こそが本質である。

そう最初に切り出したのは、他ならぬメルヴィス・セルタレイだつた。

「森羅万象、ですか」

「うん。森羅万象というのは、世界に存在するありとあらゆる事象や現象のことだね」

そう言つて白髪の青年は紅茶を口にする。

二人 メルヴィスとイリスが今いるのはギルドの執務室、つまりはギルドマスターの仕事場である。

そこでメルヴィスは、彼女が希望した魔術に関する素質の検査結果が書かれた書類を眺めながら話を続けた。

「物が落下するのは『重力』の事象が存在するから。

雨が降るのは水と風と大気が深く交わりあって『降雨』という現

象が生まれるから。

物が燃えるのはその物体と酸素や熱などその他もろもろが混ざつて『燃える』という現象が発生するから

そこで一息つき、長い話で乾いていた口を紅茶で潤しながら再び言葉を紡ぐ。

「ん……、僕たち魔術士は この世界の根幹であり、世界そのものを構成する『世界樹』^{ワガヤマツル}に『接続』^{アクセス}して、それら森羅万象の一部を引き出し、事象や現象に指向性を与えて操作する人たちのことを指すんだ」

またも聞いたことのない言葉が飛び出してきたのでイリスは首を傾げた。

するとメルヴィイスか彼女の疑問に思っていることにすぐたどり着いたのか、どう教えようかと「つーん」と唸り、

「それじゃあ、まず『世界樹』^{ワガヤマツル}の概念から説明してあげないとね

得意げに立ち上がると、いつの間にか設置されていた小さな黒板に体を向ける。

「 “我々の住む世界は、一本の大樹によつて支えられてい
る” 」

そしてひどく感慨深い表情で、あらゆる魔術を生み出した言葉を口にした。

我々の住む世界は、一本の大樹によつて支えられている。

聖王暦一七七年、そう断言したのは『ユグドラシル・クライン』といふ名の学者だった。

大樹といつても實際、地面の下に木が生えているわけではなく、『世界を構成する要素と根幹、そして存在が確認されている事象や現象は木の根や木の枝のように枝分かれして、それぞれの役割を果たしている』といふ理論を指しているだけに過ぎない。

後に『ユグドラシル理論』と呼ばれ、全ての魔術の基礎となるその理論は、とある事件をもつて裏付けられる事になる

遺跡の『出土』とともに伴う守護機兵の被害。その機兵に対抗しようとして遺跡へ潜り、生還した者たちのよつてもたらされた魔奏珠と魔道書。

それらに刻まれていたのは守護機兵の存在理由であり、そして古の人々が使用していた究極の技術 魔術の存在であった。

また、とある魔道書には世界は大樹によつて支えられている、と。そう記されていた。

それはまさしく『ユグドラシル理論』そのものであった。

なぜ、一介の学者がそれほどまでの理論にたどり着いたのかはい

まだ分かっていない。

なぜならこの理論を発表した当の本人は、その翌年に死亡したのだから。

その遺体は凄惨極まる表情を浮かべていたせいか、ある者は『悪魔と契約してその知識を得たから、代償として魂を刈り取られた』などという荒唐無稽なことを言い、

またある者は『理論の裏づけを取るために、なにかヤバイことに手を出したから、見せしめとして殺されたのでは?』と体を震わせながら呟くなど、どうにも的を射ない噂ばかりが広がっていたという。

だがとにかく、彼の遺した理論と長年の風化や虫食いによつてボロボロになつていتاいくつも魔道書を重ね合わせ、世界に魔術が再び蘇らせることができたのだ。

その点では、人々はユグドラシル・クラインに感謝した。こんな素晴らしい理論を残してくれてありがとう、と。

そうやって生まれた魔術を簡単に説明すると、世界樹へと続く回線の役割を果たす『魔奏珠^{テリオス}』に、大気を漂う『界魔力^{オード}』と血液のように人の体内を循環する『魔力^{マナ}』を融合させた特殊な魔力を通わすことによって、

世界樹の中に存在する『あらゆる現象・事象を司る場所』や『あらゆる法則を司る場所』へと『接続^{アカセス}』し、自然現象を複製してそれを操る事ができる いわば森羅万象を操る力だ。

とても分かりやすい説明だった、とイリスは思う。

『知識』のない自分でもそれなりに理解できたのだから。

けれど、使えないのなら意味がない。

メルヴィス曰く『界魔力と魔力の融合は出来るけど、世界樹に“接続”しようとするとなぜか弾かれるんだよね』とのことである。

そういわれた瞬間、彼女は思わず泣きそうになつた。

これは後に言わしたことだが、目の端に涙を溜めていたことである。

「私って、昔から涙脆かつたのかなあ……？」

まったく思い出せない過去の自分に、イリスはなんとなく問いかけていた。

第五話・予感 依頼と悪寒とわがまま娘と

『ハシショントマスター
古の到達者』

そう呼ばれる称号を持つ人間が、ここ『ヴァルハラ』本部には存在するという。

噂では、指先一つで悪をダウンさせたとか、軍神級魔術士を屈服させて無理やり娶ったとか、その絶対的な力で世界征服を企んでいるだとか。

そんな根も葉もない噂の中心部である『ハシショントマスター古の到達者』であり、普段はギルドマスターとして仕事に精を出しているメルヴィス・セルタレイは、現在進行形でとんでもなく悩んでいた。

恐らくこの悩みは一人では解決することは出来ないだろう、と彼は思う。

何せ色々と一大事なのだ。目を通すべき書類は溜まっているし、このところ守護機兵の被害が多くてその対処に色々と頭を使って、このところ寝不足なのも問題の一つだが。

(どうしようもないよねえ……)

内心愚痴り、メルヴィスは顔を上げる。彼の眼前、そこには腕を組んで睨みつけてくる女性が一人いた。

見事に整えられた腰まで届かんばかりの金髪と、我の強そうな釣り目に深緑の瞳。

その存在を主張するように盛り上がっている豊満な胸元には、緑

色の魔奏珠テリオスがはめ込まれた三田田型のネックレスが吊り下げられている。

そしていかにもお嬢様といった、縁を基調としたドレスのような服を身につけていた。

その女性 セレーネ・シ・ミストノートに睨みつけられながら、メルヴィスは言った。

どちらかといふと、興奮している動物を落ち着かせるような口調で。

「あのさあセレーネちゃん。僕としてはこんなところでの押し問答は……埒が明かない気がするんだけど」

その言葉にセレーネは辺りを見渡した。

二人がいるのはギルド本部のロビーだ。つまり人が多く集まり、なおかつ最も注目されやすい場所である。

勿論、彼女たちはすでに注目されていた。主に『ああ、またか』といった意味で。

だが、それがどうしたことかといった様子で彼女は髪を後ろへと手で流しながら話を続けた。

「ダ・メ・よ。私は急いでるんだから」

「けどさあ、前衛系の仕事が全部取られたっていつもまだ他にも色々あるでしょ？ 商隊護衛とかさ。何も守護機兵を狩るだけが魔術士じゃ……」

「イ・ヤ。『第一級準単独探索許可書』セイジース・ルード持ちの、この私が護衛なんてちんたらした任務やつてられないわ

一息つき、セレーネは続ける。

「手っ取り早く確実に！ それが私のモットーなの。第一護衛任務は時間がかかりすぎるし、時々イヤラシイ目で見てくるのよ。あの成金ども」

「ふん」と不機嫌そうにそう言い切った彼女にメルヴィイスは苦笑し、そして再び悩む。

ひらりの仕事も溜まりっぱなしだし、ビリせ回せる仕事もない。無いものねだりされても困るのである。
というわけで、どうにかして帰るようになって説得したのだが、一人では絶対にどうにもならないぐらい分かる。

だから共犯者が来てくれればなあ、と願つたりするわけだが。
その時だった。メルヴィイスにとって最も扱いややすく、一番の顔見知りが視界の端に飛び込んできたのは。

メルヴィイスはいつもの笑みを取り戻すと、『彼』に向かつて手招きをした。

その日、いつも通りの時間にギルド本部へとついたレーゼは玄関ロビーの隅に不思議な光景を見つけた。

見知った顔が一人、睨み合っていたのだ。

一人は顔を険しくしたメルヴィス。もう一人は数少ない女性の知り合いであるセレーネである。

「……何をやつているんだ、あいつらは」

眩くと同時にメルヴィスの顔が凄まじい勢いでぐりん！ と動き、レーゼを見つめた上で、何故か満面の笑みで手招きしてきた。

嫌な予感というか、すでに直感までに達した彼の感覚は全てを否定することを勧めている。

それに従い、レーゼは凄い勢いで顔を背けた。

（よし、見ないフリ見ないフリ）

心の中で自分に言い聞かせ、足を進める。

だがその直後、ぐいっと、その歩みは強制的に止められた。

誰かの手が、レーゼの肩を力強く掴んでいるせいだ。

もう誰が掴んでいるのかは分かりきっているが、この考えが外れていてほしいと願いつつゆっくりと頭を回し、誰が掴んだかを確認する。

そこには、予想通りメルヴィスが微笑んで立っていた。

なんで自分の願望はこうもことじ」とく外れてくれるんだろう、
とレーゼは微妙な感傷に浸りながら口を開く。

「放せ馬鹿ギルドマスター。略して馬鹿スター」

「……僕は馬鹿の星なのかい？」

「いや、どちらかとこりと愚の骨頂とこつたといひだな。　　とい
うわけで放せ」

「放せないよ。　うふふふふ

地の底から響くような笑い声を上げ、青年は告げる。

その表情を見て『ああ、これは逃げられんな』と心の底から悟つ
たレーゼは、ついに降参するように力を抜いた。

「うんうん、それでよしつと」

「……何か用か？」

うん、と満足そうに頷き、メルヴィイスは先ほどまでいた場所を指
差す。

そこにはセーネが凄まじく不機嫌そうな顔で『王立ちをし、こ
ちらを睨んでいるのが見えた。

それを見て、レーゼは無言で再び歩き出す。先ほどよりも大股で、
なおかつ足早に。

「ちよつ、ちよつー　レーゼ君ー　なに逃げようとしてるのー?」

「放してくれメルヴィイス。俺は向こうに行かなければならない用事
が出来た」

「そつあは出口でしようが！」

ギヤー、ギヤーと押し合いへし合ひ、やがて責任を押し付けあつた。ついで一人はセレーネの前に辿り着く。不審そうな表情で彼女に眺められ、レーゼはアシュレイに睨み付けるような目線を向けた。

(で、どうしたこいつんだ？　お前は)

(この傲慢かつ恐ろしい悪女の暴走を止めて欲しいんだけど。ほら、いつもみたいに)

「ゴシゴシ」と、なるべく聞こえないように小声で問答を繰り返す。

するとその瞬間、セレーネは額に青筋を浮かべて眉を立て、息を吸い、

「悪女で……悪かったわねえええ！」

「何で聞こえてるのおおおおおー？」

同時に咆哮。

そしてスカートなのも気にせず、ヒールの回し蹴りをメルヴィイスのわき腹に叩き込んだ。

骨と肉を打つ鈍い音と「ばぶろおー！」という叫び声が響き渡り、ギルド内で最大権力者のはずのギルドマスターは吹っ飛び。人型の何かが壁に激突する音を聞きつつ、レーゼはセレーネから視線を逸らした。

「何で目を逸らすのよー。」

「いや、生存本能が働いた」

「なお悪いわー！」

その言葉に、ムガー！と大人気なくキレたセレーネが今度は鉄拳を飛ばすが、器用に半身だけ下がつてレーぜはうまくそれを右手で受け止めると、

「セレーネ、まずは落ち着け、深呼吸だ。でないと怪我人が大量に出来るぞ。俺も怪我なんてしたくない」

最後の部分を聞こえないよつこづきながら、まるで犬を諭すよつに冷静に言い聞かせる。

するとその冷静さに当たられたのか、彼女は口の端を引き攣らせながらも目を閉じ、何度か深呼吸を繰り返した。

そしてしばらくして、レーぜは彼女の握りこぶしから力が抜けたことを確認すると手を引き、首をかしげて問いかけた。

「それで、相変わらず下らない文句を言ひ募つてていたのか？」

「違うわよ。正当な権利のしゅ・ぢょ・う」

セレーネはその答えとして鼻を鳴らし、そう言い捨てる。それを聞いてレーぜは、「ああ、またか」と思った。

今までのやり取りで分かるとおり、彼女は自分の主張を無理やりにでも通そうとする我の強いところがあるので。

それは自分の意志を曲げないという美点とも取れるわけなのだが、レーぜにしてみればただの氣の強い女性だという認識しかもつてい

ない。

金髪という点で同居人の少女 イリスに似ているような気もしたが、あちらとこちらでは性格が真逆だと考え、そのくだらない思考を放棄する。

「もう言つ割には物騒だが……」

そしてそれとなくレーゼは首を動かし、視線を己の背後に向け、未だに床の上で大の字にのびてゐるメルヴィイスを見やる。即座に彼のこととは記憶から手を煩くして消去しておき、なだめるよひに言つた。

「ともかく落ち着け。今のお前にはそれが一番必要だ」

「大きなお世話よー それこ……」

「それに?」

「……はあ、もうこいわ。ここから先はあそこで寝てこるのに聞きなさい」

セーネはメルヴィイスを指差し、さつやと外に出て行ってしまった。

ふむ、とレーゼは顎に手をあて、

「と、こうことだそつだ。説明しや」

「……僕を氣遣つとか、そんなことほじてくれないの?」

「生憎、男を気遣う趣味はない」

体中の埃を払いながら半田で見てくるメルヴィスにレーザは冷たく言葉を返す。

足をくの字に折つて泣きまねを始めるが無視して再び口を開いた。

「あいつがあそこまで怒つているなんて　いや、いつも怒つているか……何かあつたのか？」

「うん、『三級探索許可書』^{アルベーレージ} 持ちの魔術士たちが集団で仕事を取つていつてね。しかも守護機兵を狩るものばかり」

その言葉でレーザは全てを理解し、ふむ、と頷く。

『三級探索許可書』^{アルベーレージ} 正式名称『第三級複数探索許可書』とはヴァルハラ《ギルド》が定めた六つある階級のうちの一のことだ。

最強を指す『第一級単独探索許可書』^{エクステス}。

実力者を表す『第二級単独探索許可書』^{セイレス・ルート}。

ある程度の熟練者たちを指す『準一級単独探索許可書』^{セイレス・アーヴ}。

そこそこの実力者を示す『第二級複数探索許可書』^{アルベーレージ}。

初心者から抜け出したことを指す『第四級複数探索許可書』^{ソーティア}。

まったくの戦闘初心者を表す『初級探索許可書』^{ファー・ティス}。

そのどれかを持つていればギルド所属の魔術士であるということを証明でき、各都市の支部においていくつかの恩恵を受けられる。
『第三級複数探索許可書』の魔術士はその恩恵の一つとして、優先的に守護機兵討伐の依頼を受けられるというものがあるのだ。

もちろん限度というものもあるが、『第三級複数探索許可書』^{アルベーレージ} 同

士の魔術士が組めばそれも軽減されるとこいつ」とで、セレー・ネは手つ取り早く稼げるそれらの依頼を根こそぎ田の前で持っていた。といふわけなのだろう。

「以前は『未登録』^{タガ}の魔術士連中が押しかけてきて、セレー・ネが文字通りぶつ飛ばしたとか聞いたが。毎度思うが、あいつにはおしとやかさが足りないと思つ」

「それを言つたらレーゼ君だつて……」

ぼそり、とメルヴィスがそう呟く。

するとそれと耳ざとく聞いたレーゼがドスの効いた声で返した。

「な・に・か・い・つ・た・か?」

「ナンデモナイヨー ホントウダヨー。」

そして同時に若干の殺意をこめて睨み付けると、メルヴィスが顔を真っ青にしながら片言で叫んだ。

誰でも、痛いものは嫌なのである。

それを見て、やれやれとため息をついて呟く。

「それじゃ、今日は俺も休みか……」

そして、「ああ、これはまずいな」とレーゼは思った。

家に帰ればまつたく自己主張をしない接し辛い同居人がいて、何の義務感を持つているのかは知らないが一生懸命に家事をしてくれているのだろうと思つと、ひどく気まずいという気分にさせられる

のだ。

今まで家事も仕事も全てを自分でこなしてきたせいもあってかその気持ちは大きく、一週間経った今でもまともな会話一つもできていないのが現状である。

正直言つて、レーゼはやけに献身的なあの少女のことが苦手であった。

ゆえに、家に帰りたくないのが今の気分なのだ。

しかし、メルヴィイスはそんな彼の考えを遮るように口元に横に首を振り、口を開く。

「ううん、レーゼには別に探索依頼があるんだ。」
「うりきって

「俺に別の？ なんだそれは？」

その言葉に首をかしげながら、レーゼはメルヴィイスが手招きしている玄関ホールの隅へと歩を進めた。

彩珠レヴィオスを取

「簡単さ。機兵の中核であり、知識の根源たる宝玉

つてきてくるだけでいい

「……」
人差し指を突き出して言葉を付け足す。

「『特殊な』『色』だからね。難しそぎて君にしかできないんだよ。『エクステス第一級単独探索許可書』所持者、レーゼ・クライス君？」

メルヴィイスが今先ほどまでとは違う、深い笑みを浮かべる。

その瞬間、レーゼの体を凄まじく嫌な予感と悪寒が同時に通り過ぎていった。

第六話・軍神 彼女と少女が出会うとき（前書き）

主人公よりも強い女性が登場です。

レーゼがミサイルなら、この方は核弾頭レベルでしょうか。
強い女性って、いいよね！

第六話・軍神 彼女と少女が出会いつけ

ダルムヘイツは三つの区域に分かれている。

商業区と住宅区、そしてギルド区、この三つだ。

これらを分けるなら、商業区は南東、住宅区は南西に位置しており、ギルド区はそれら統括するように北に存在している。

それもこれも、ダルムヘイツがギルドの事業で成り立っているからである。

遺跡探索・魔術士ギルド『ヴァルハラ』は民営企業といつても、アスガルド発言力はもはや世界統一政府に匹敵するものであり、各都市には支部が必ずあるほどだ。

その上、ダルムヘイツはリストア大陸の中心部に位置している。そうなれば必然的に各地から様々な品が流れ込み、商業都市に近いという側面も持っていた。

時刻は昼過ぎ。未だにその商業区では人々が行き交い、行商人たちが各地で仕入れた自慢の商品を売ろうと声を張り上げ、値引き交渉の叫びが反響する。

その中を、波に飲まれた木屑のよじてふらふらと歩く少女が一人いた。

金髪碧眼で滑らかな青のローブをまとい、首からは矢じり型の飾りのついたネックレスをぶら下げる少女 イリス・レミナートだ。

彼女はレーゼが出かけた後、食料や生活用常備などを見つけて足りないものをこの商業区へと買出しに来ていた。

だが慣れていないのと背が低いのも相まって、人波に呑まれて何度もぶつかっては謝り、再び歩き出すところを繰り返している。

わざわざ歩きながら、少女は今朝のことと思いつ出していた。

「あんまり、話せなかつたなあ……」

同居人、というより保護者である彼 レーゼとこいつも通りロクに会話もできずに朝食をとり、そしてただ「いってらっしゃい」の一言だけで見送った。

それが既に一週間も続ければ、気が滅入るのも仕方がない。

「それに」

そうほんやりと呟いて、空を見上げる。

「なんだだう。あの人と話せないと

胸の奥が、痛いくらいに締め付けられる。

それは覚えている『記憶』の中でも体験したことのない、妙な感覚だ。

少女は思考する。じつは彼のことを考えると、なにでこんなに胸の奥が痛くなるのだろうか、と。

だが答えは出ない。ただ、空回りした思考がぐるぐると頭の中で

回り続けるだけである。

そう考え込んでいると、イリスはどんづ、と急に立ち止まつた前の人にはぶつかつてしまつた。

「あ、ごめんなさい」

咄嗟に謝罪をし、再び歩き出さうとする。

だが。

「まじや、オイ」

彼女の肩に荒々しく手がかかり、頭上からなんともドスの利いた声が降り注いだ。

思わず振り返り、そして後悔。

そこには顔の半分に刺青をいれ目を血走らせてこちらを睨みつけてくる男と、その後ろに腰巾着らしき男一人が自分をニタニタとした笑みを浮かべて眺めていた。

「あ、あの」

「あーん？ てめえ、よくもぶつかつてくれたなあー。おかげで俺の腕が折れちまつたじゃねえかああああ！」

大音量の怒り声にイリスは「ひつ」と息をしゃくりあげ、思わず男の手を振り払つて一步下がる。

じわりと瞳が熱くなり、目の前の光景が涙で歪む。

しかし、逃がさないとばかりに男の手が伸びてきて 。

「あ、アーチィ。」こいつ、レーザの野郎の所で暮らし始めたやつですか？『剣聖』の女に手を出すのはやばいんじゃないんですかい？」

「あーん？ 奏無しの野郎の女だよ？」

腰巾着の男の一人の言葉にいぶかしげな表情で振り返り、不愉快そうにその「ツイ」顔を歪ませた。
そして「けつ」と脇に唾を吐きその顔をイリスに向けると、

「おにガキ、てめえ、マジで奏無しの野郎の女なのか？ ああ？」

顔を近づけてそう問い合わせてくる男に若干引きながら、イリスは首をかしげる。

何しろ、彼のことにはさっぱり分からぬのだ。
せいぜい、魔術士であり、表情をあまり表に出さず、トマトが少し苦手であることがぐらいしか知らない。

だが、この田の前の男は色々と『知つていろ』ただ、と、そういう判断したがゆえに聞き返した。

「え、っと、その、奏無しつて、レーザさんのことですか？」

「おいおい知らねえのかよ」

彼女の疑問に男は嘲るような笑みを浮かべ、『骨折』したはずの

腕の肩を「キ」回しながら言葉を続ける。

「あの野郎はな、まともに魔術が使えねえのさ。だから奏無（フタナ）しなんて呼ばれてやがる。ギルドの面汚しだぜ？」

その言葉に、後ろの腰巾着一人がゲラゲラと笑い始めた。

そんなあからさまに馬鹿にするようなその声色と笑い声にイリスは震わせていた体を止めて、ゆっくりと顔を男に向ける。

そして胸の内に湧き上るのは、同居人が馬鹿にされたという純粋な怒りだ。
自分を救ってくれた人に対する侮辱が、彼女の胸の内の感情に火をつけたのだ。

「　に、しないでください」

イリスはぽつりと、自然と出てきた言葉を口にする。
だがその呟きが聞こえなかつたのか、男は訝しげな表情で聞き返した。

「ああ？　なんだあ、ガキイ」

「　馬鹿に、しないでください！」

刹那、大通りに響き渡ったのはイリスの叫びだった。

そして彼女は目には怒りの輝きを宿し、自らよりも大きいはずの

男を下から見上げるように睨みすえて言葉を続ける。

「レーゼさんは、あなたたちに馬鹿にされるような そんな人じやないです！」

確かに彼は レーゼ・クライスはとても無愛想で、あまり話もしてくれなくて、トマトが苦手なのかもしれない。

だが彼は、恩人なのだ。

記憶を失い、頼るものがなかつた自分に『居場所』をくれた人なのだ。

だから、と、さらりと怒りを込めて、

「だから、馬鹿にしないでください。レーゼさんはあなたたちが思う以上に、凄い人なんです」

一步も引かない姿勢で、イリスはそう言った。

その気迫に思わず男たちは後ずさり、周囲の様子を伺っていた人々も感心したような声を漏らす。

だが数秒後、男は返された言葉に怒りを感じ、顔を真っ赤に染めてイリスに腕を伸ばしてきた。

「このクソガキが、下手にでりや調子に乗りやがって

ドスの籠つた声にイリスは思わず後ずさりし、しかし、すぐに男を睨み付ける。

それは『負けない』と言外に表しているかのようで、その態度に

男は苛立ちを覚えると、次の瞬間にやうじい笑みを浮かべた。

「おまえはいの『折れた』腕の落とし前をたつぱりとしてもうわなきやあなる」

やうじて動かすのは、どう見ても健康にしか見えない左腕だ。

あまりにあからさまな言葉にイリスが反論しようとする。
だがそれよりも早く、男の左手がイリスの首を掴もうとしている。

「ほんちつー？」

直後、視認できない速度で横合いから飛んできた何かがその男の側面を直撃し、奇妙な声を上げて横へ吹っ飛んだ。

そして後ろで控えていた腰巾着の男たちも、残像を残して飛來した何かに吹っ飛ばされる。

その光景はさながら透明な誰かに強烈な一撃を加えられたかのよう、驚きで「ざわり」と人々がざわめいた。

「あらあら、『めんなさい』。あまりにやうじてこる事が馬鹿らしかったから、思わず投げちやつた」

くすくす、と通り一帯に澄んだ笑い声が響き渡る。

それは凛と張った、しかし他人をからかっているようなそんな響きを持った声だ。

慌てて起き上がった男達は声がした方へと顔を向ける。イリスも反射的にそれに倣つた。

そこに立っていたのは 右腕に買い物籠を引つさげ、左手には泥の付いたジャガイモを持ち、悠然と微笑んでいる女性だった。真上にある太陽が彼女の陶器のように白い肌を照らし出し、薄紫の長髪に形取られた小さな顔には勝氣そうな釣りあがつた群青の瞳。

整った唇に不敵な笑みを浮かべている。

イリスはその綺麗な女性をぽかんと見つめた。

すると彼女は視線に気付いたのか、につこりと笑みを返す。それは安心感が体中に湧いてくる、そんな笑みだ。

「こんな可愛い女の子にぶつかって散々なことを言つて、拳句の果てには『骨が折れた』？ うふふ、なんとも軟弱な野郎どもねえ」

そんな彼女は、とても愉快そうに だがまつたく笑つていない 田つきで男たちを睨み据えた。

それは背後に黒いオーラ的な何かを幻視してしまつほどいの黒い笑みである。

すると男たちは顔を真つ赤にして怒声とともに立ち上がり、即座に彼女へと突っ込んでいった。

「このアマ－ 犯めんじゃねえぞおつ－」

「死んどけや－」

走る男たちの手の平に大小さまざまな色の小さな帯が円の形を取り、瞬時に消滅する。

すると、その手はまるで初めてからそこにあつたかのようの一振りのナイフが握られていた。

(ま、魔術だ!)

イリスは内心で驚きの声を上げた。

記憶を失つてこちりで目覚めて、今という日まで「魔術『らしい』魔術を見たことがなかつたのだから仕方がないことなのだが、普通の人から見て、この程度で驚きの表情を見せるのは珍しいことである。

だからだろうか、ナイフを持った男たちに迫られる女性はそんなイリスの表情を見て微笑ましいものを見るような目で微笑み、

「ふふ、坊やたちは物質操作系魔術士かしら? けど残念。そんな豆腐よりも柔な代物じゃ、私を殺せないわよ?」

ゆつくつと右手を前に突き出して、

『
ターミネイタ
“強制終了”』

まるで謳うように告げられたたつたそれ一言だけで、全員が手にしていたナイフが文字通り『崩壊』した。

ぱりぱり、と塵まで還元されたナイフ『だつたもの』が風に乗つて掻き消える。

「なあつー？」

「あらあら、こんなことで驚いちゃつた？『世界樹』側からナイフの構成術式に割り込んで無効化しただけなのに」

セイレス・アーク マテリアルマスター
準一級の物質操作系魔術士が一年をかけてやつと余得できる技術をさも当然、といった様子でこなした女性はそう告げる。

だが男達はその言葉の意味に気づいていないのか啞然とするばかりである。それを眺めた彼女はさもおかしそうに口元に人差し指を当てる。

「構成から見て、あなたたちは『第四級』ってところかしら？」

まるで何かを確認するかのように首をかしげて男達にそう問う。

だが彼らは田の前の出来事が理解できていなかつたのか未だに呆然としたままだ。

当然、イリスもそれに含まれていた。

その様子に彼女は満足したように頷き、

「このマイナ・セルタレイを殺したいのなら　アイゼンリッターを百体は持つべきなさい」

そして自信たっぷりに、そう言い放った。

瞬間、男達の表情が一変した。

怒りで血が上り赤くなっていた顔が、一気に真っ青へと。

「……マイナ・セルタレイ？…………ま、まさか、『軍神』……？」

魔術士を志すものならば一度は聞いたことのある名前を口にして、息を呑む。

その様子にマイナは口元にかすかな笑みを浮かべ、ポキポキと指の骨を鳴らしながら言った。

「それで、骨を折っちゃった軟弱君はだあれ？ 私が徹底的に『直して』あげるわよ？」

「いえいえいえいえ『軍神』様！ あれはただの言葉の『あや』ってやつでして！ へへへ……」

男のうちの一人 イリスにいちやもんをつけていた男だが慌てた表情で揉み手をしつつ、ゆっくりと距離をとる。

『軍神』はその名のとおり、存在そのものが『兵器』なのだ。それに逆らおう者など、火薬がたっぷり詰まった部屋の中で火遊びに興じる輩レベルで存在しないだろ？

ゆえに、彼に倣つように他の一人もすり足で下がり始めていた。ちなみに当たり前だが、その顔は真っ青に染まっている。

「あらあら、そうなの？ じゃあ怪我人いないのね？ それじゃあ

」

そしてその言葉を待っていた、と言わんばかりに彼女は何も持っていない左手を振り上げ、

「 とつあえず、人生やり直してきなさい」

「逃げるおおおおお！」

全速力で逃げ出した男どもめがけ、いつの間にか握っていたジャガイモを全力で投球した。

「ぶべらあー？」

「 「アーキー！」」

「俺にかまうな！ 行けえ！」

マイナが投擲したジャガイモが男の一人に直撃してぶつ倒れる。だが彼は顔に闘志を浮かべて他の二人に叫んだ。

「 なあに愉快な喜劇を繰り広げているのかしら？」

その上から、マイナは頭を踏んづけた。

「 ぐえ」という声を無視し、汚物を見るような目で男を見下しながらぐりぐりと何度も頭部を足で踏み付け抉る。

すると男は何やら幸せそうな顔で雄たけびを上げた。

「 もつとー もつと踏んでくださいー。」

「死んでお星様になりなさいー。」

刹那、彼女は残像を残す速度で足を振るつた。『ガガーンッ！』と人が出してはいけない音を響かせて男が宙に浮く。

そしてマイナはそれめがけて全力の回し蹴りを見舞つた。

「これで終わつたと思つなよおおおおお……」

典型的な悪役の言葉を残して空の彼方へと消えた男を見送つて満足げに頷くと、彼女は今までのやり取りをぽかんとした顔で見ていたイリスの背後から近づき、首を傾げて聞いた。

「大丈夫？ 怪我はない？」

ふえ？ と可愛らしい声を上げて少女は振り向く。
そこには母親のような優しい微笑を浮かべた『軍神』たる女性が、手を差し伸べていた。

第七話・ナウ 求めるものは（前書き）

魔術以外の要素、登場の回です。
もう少し詳しい説明は、次の回あたりで。

第七話・苦惱 求めるものは

「ん、イリスちゃんつていうのね？ 知つていると思ひナビ、私はマイナ・セルタレイ。よろしくね？」

そう言つて彼女はケーキを口に運び、幸せそつと皿を締める。

その後、イリスを助けたこの女性は何故か『一緒に何か食べない？』と誘い、少女自身も断りきれずに気付けば広場の外れにある喫茶店のテラスに座っていたのだ。

はあ、とイリスはあこまいまいな返事を返し、思い出したように顔を上げる。

「あ、あの。もしかして、メルヴィイスさんの……」

「ええ、そうよ。よく知つているわねえ。……あら？ もしかして貴女がメルの話していた噂の子？」

マイナは一気に言葉を紡ぐと、優雅に紅茶に口をつけた。
その一つ一つの動作が完璧に見えて、イリスは同姓なのに思わず見惚れてしまつ。

「……メル？」

「私の夫、メルヴィイス・セルタレイよ。長いからメルって略しているの」

可愛い呼び名でしょ？ と聞いてきたマイナにイリスは苦笑しながら頷いた。

「ふふっ、それにしても、わたくしの啖呵はす」かつたわね？」

「へ？」

イリスは『ぱちくじ』という擬音が似合つたばかりのまゝたきをして、彼女の言葉に首をかしげる。

その小動物にも似た仕草にマイナはくすくすと笑って、

「馬鹿にしないで、って、レーゼ君のこと」

「あ、あれは、その、思わず……」

彼女の言葉でその時のことを思い出したのか、えへへへ、と恥ずかしそうにイリスが朱に染まった頬を搔いた。

実のところ、己があれほどまでに男たちに強く出れたことにイリスも驚いていたのだ。

保護者であるレー・ゼのことを馬鹿にされたのがよほど腹に据えかねたのかしら、と、ぽんやりとそつマイナは思考する。

「それで」

そして空氣が若干和んできたといひで、マイナが唐突に話を切り出した。

「イリスちゃん。貴方、何か悩んでいるでしょ？」

「ほへ？」

「やーねえ、惚けなくともいいのよ？ お姉さんには何だつてお見通しなんだから」

相変わらずな気の抜けた返事を返したイリスにマイナは手の平をぶんぶんと振りながら言葉を返した。

「うわ、ずいぶんとはっちゃけた性格のようだ、と、流石は『あの『メルヴィスのお嫁さん』ことだけはある、と、そうイリスは彼女に対する認識を改めつつ、真剣な表情となつて口を開く。

「……えっと、その、こうこう」と、本当に相談してもいいのかわかりませんけど

そして、そつ言葉を切り出した。

「メルヴィスの大将。なんか俺担当の書類が増えているんですが

「ははっ、氣のせいだよりユカリオ君。それは君が見た幻影だ」

ダルムヘイツの脇下がり。魔術士ギルド『ヴァルハラ』本部の最上階に存在する唯一の執務室では今現在、数多くの書類との格闘が行われていた。

書類に立ち向かうのは『古の到達者』^{エンシェントマスター}ことメルヴィスと、リュカ

リオと呼ばれた青年　『第四階層情報部』所属の魔術士、リュカリオ・ヘルゼリオスである。

茶髪金眼で、ギルド指定の青い制服に身を包んだ細身の外見を持つ青年だ。

顎にはこゝに数日多忙なお陰で無精ヒゲが生えており、精悍そうな顔には若干の疲労が浮かんんでいる。

彼は普通の魔術士とは違う、いわゆる『特別な訓練を施された魔術士』だ。その本領は戦闘ではなく裏で動くための技術　暗部における仕事において初めて発揮される。

ゆえに、普段は情報収集や要注意対象の監視などをしているければならないのだが　『いつも通り』ボロボロになつて倒れていたメルヴィスの横を通り過ぎていこうとした時に捕まり、無理やり書類整理をさせられているという状況に陥つてしまっていた。

「ジーしてこいつなつたー！」などと頭の中の何かが叫んでいるが、ギルドマスター命令なので簡単に拒否するわけにもいかず、黙々と作業をこなしてくる。

(レーザの皿那みたく、腕力で拒否するわけにもいかないからなあ)
内心ため息をつきながらそう独りごちり、リュカリオは増えている書類一山分を押し返して口を開いた。

「……ほー。夢幻つてやつですかい。それじゃあこいつは存在しないものとして大将にお預けします。俺には荷が重いような気がするので」

「つれないねえ、リュカリオ君。そこは『ハハハハ！ メルヴィス！ そいつはトムさあ！』ぐらいの勢いでつつこんでくれなきや」

「……アンタは暗部の人間に何求めてんですかい」

彼が半眼になつて聞いてみる。

すると問い合わせられたメルヴィスは両腕をバツ！ と振り上げ、まつたくもつて似合つていらないポーズを決めながら言った。

「ユーモアってヤツだね！」

「そうはしゃぐのは構いませんが、外でやつてくれませんかい？ 鬱陶しいんで」

「ひざいなー死んでくれないかなー、などとリュカリオは物騒な祈り もとい呪詛を心の中で生産しながら、何故だかとんでもなく テンションが高いメルヴィスを尻目に淡々と書類を片付ける。

「この五年で、この人とどう接すればいいのか大体理解しているが ゆえに出来る芸当といつやつだ。

「ああもうまつたぐ、もつと僕を構つてくれる人はいないものか…。これじゃあ仕事がはからないじゃないか」

ギルドを預かる身として常識的にありえない言動を口にして、メルヴィスは机の上で何故かポーズを決める。

同時に彼の周囲がキラキラと光り始めた。

その様子を見て、『また』技術部の連中作つたくだらない装置の効果だと結論付けたリュカリオは「なに言つてんだコイツ」といつ

た視線を向けるが、慣れた様子で視線を外し再び書類に目を落とす。

ポーズを決める青年とそれに目を向けることなく山積みになつた書類を次々と処理していく青年という中々力オスな状況が出来上がり執務室だが、数分の後にそれは破られた。

「メル！ あんたの知恵とコネを貸しなさいー！」

「む！ 何やつべぶおー！？」

声と同時に飛び込んできた影にいち早く反応したメルヴィイスだが、机の上に足をつくという不安定なポーズのまま動こうとしてそのまま床に落ちる。

そして部屋に飛び込んだものの勢い余った『誰か』は机と衝突し、何故かとんでもなく重いはずの机の方がひっくり返った。

「重いい……」

「メ、メルヴィイスさんが机の下敷きにーー！」

息も絶え絶えに執務室へ足を踏み入れたイリスが目の前の惨事を見てそう叫ぶ。

そんな彼女に『誰か』ことマイナ・セルタレイは机にぶつかったのにもかかわらず、まったく痛がる様子も見せず胸を張つて口を開いた。

「大丈夫よ。仮にも私の夫なんだからこれの十倍は耐えられるわー！」

「す、すごいです！ さすがメルヴィイスさんー！」

「いやそこ本気でしちゃ駄目だから。あと誰か助けてくださいお願
いします……」

マイナのあまりにも無茶な言葉に驚き感動しているイリスに対し
てメルヴィイスがつっこむ。

そんな様子を部屋の隅に退避して見ていたリュカリオは最後の書
類に目を通しサインをすると立ち上がり、

「では大将。俺はこれで」

「逃げる気かい!? リュカリオ君!」

机の下でメルヴィイスが悲鳴を上げる。だがその目は「テメー逃げ
んのか」「ノヤロー」と言わんばかりに燃えていた。
だがそれを華麗に無視した彼は告げる。

「いえ、俺の分は終わったので」

後は大将の認証待ちしかありませんよ、と言い残しリュカリオは
音と気配を殺してこの惨劇の場から立ち去つていった。

その光景を見てメルヴィイスは押し潰された状態で器用にガクリと
肩を落とす。

「部下に見捨てられたよへへへ……。減給してやうつかなあ

「馬鹿なこと言つてないで手伝いなさい、メル

豪快に私怨全開な青年の呟きを無視してマイナは片腕一つで机を
持ち上げ定位位置に戻して命令するよう言つ。するとメルヴィイスはゆつくりと立ち上がり、体中の骨をほきほき

と鳴らしながら聞き返した。

「……えーっと、それで僕は何をすればいいのかな？ マイナ」

「うふふ、流石は私の夫。聞き分けがよくて助かるわ」

「いやあ、マイナって一度言つ出したら止まらないからねえ」

それだったら何も言わずにつづつが樂なんだよねー、と達觀した表情で白髪の青年は付け足す。

そんな彼の表情にイリスは「そ、そうなんですか……」と何かを悟つたかのように呟いた。

「……さて、僕は何をすればいいんだい？」

重い机をマイナが片手で直し、それに座りなおしたメルヴィイスは表情を引き締め、改めて聞いた。だが服装は先ほどの転倒で乱れに乱れ、まったくといって良いほどに威儀が見当たらない。

そんな彼にマイナはふふん、と勝気に微笑むと、

「イリスちゃんのね、『^{パー}特化能力』を開眼させてあげてほしいの」

「……えー？」

その言葉に半眼になつたメルヴィイスが疑問の声を上げる。

そして彼女の隣に座っているイリスに顔を向けて問つた。

「イリスちゃんは構わないのかい？」

「えっと……」

その問いかけに少女は首を傾げて少し逡巡し、

「特化能力って何ですか？」

メルヴィイスはズドン！と大きな音を立てて机の上に頭を打ちつけた。

「マイナ！ もしかしてだけど… ゼンツゼン！ 説明しないよね！？」

勢い良く起き上がりつて聞いてきた口の夫に、マイナは額に手を当てる「ええ」と頷き、「

「この子が『力が欲しいんです』って言い始めたから、ついついノリで」

「その後、いきなりマイナさん『欲しいならくれてやるー』って叫んで、ここまでおぶられて連れて来られたんですね」

すごい早さでしたー、などとイリスその時の感想をのほほんと呟いていた。

そんな二人をメルヴィイスは呆れた様子で眺め、ため息と共に口を

開く。

「まったく……。それじゃあイリスちゃん、とりあえず特化能力について説明するね?」

そう言ひと少女は頷き、ギルドマスターの青年は眼鏡をかけて机の下から黒板を取り出して壁に引っ掛けると、懐からチョークを引き抜いて指先でつまむように持つた。

「毎度思うんだけど……。メル、貴方どこからそんなものを取り出してるの?」

「フフフ、企業秘密だよ」

マイナの素朴な疑問の声に怪しい笑い声で答え、メルヴィスは黒板に向き直った。

「さて、まずは“特化能力とは何か”について話すよ?」

カツカツ、と黒板に小さな丸を描き、その周りに炎のようなものを纏わせると言葉を続けた。

「特化能力を簡単に言い表すなら、『最も強い欲望を物質化する』^{コード}能力^{チカラ}ってところだね。

『最も強い欲望』ってのは、その人の魂が心の底 魂の深遠から無意識の中に望んでいるものって言つたほうが良いのかな?」

焰を纏つた円に矢印をつけ『魂』と書き込み、横にデフォルメされた人の絵を描く。

「例えば、その人が魂の底から『あらゆる物質を切り裂きたい』と願っていたとする。もちろん、この願いは無意識だ。普段からそんなことを考えていたらただの変態だからねえ。

で、この『最も強い欲望』^{コード}を特化能力として現実世界へと物質化させると、生み出されたそれ 例として、剣の形をしていたとしたら は『剣形状の切断特化能力』といつものになるんだ」

その説明にイリスはほへー、と気の抜けた返事を返した。
だが、あれ？ と首を傾げて、

「欲望を物質化するって……。できるんですか？ そんなこと」

「これが出来るんだよ。はるか昔の人たちが使っていた魔術の力を宿した道具 『アーティファクト』を使わなきゃ無理だけね」

そう少女の疑問にメルヴィイスは答えながら、だけど、と言葉を続けた。

「特化能力を開花させるには使うアーティファクトの性質上、心の内の全てを晒す必要がある。つまり、自らの醜い部分さえも相手に見せることになってしまふんだ。それでも……」

君はこの能力を望むかい？^{チカラ}

ただ、静かにメルヴィイス・セルタレイは問いかける。

投げかけられたその言葉に、イリスはただゆっくりと 。

『魔奏都市』ダルムヘイツより南東部 大陸横断列車に乗つて四時間少々のところにその都市は存在する。

見渡す限りの白堊、と表現すればいいだらうか。少なくとも正反対の色である黒は存在せず、他の色もあまり見当たらない。

ありとあらゆる建物が白く塗装されており、そのいくつもの建造物の天辺には青い十字が見えた。

その光景やこの都市自体の『役割』にちなんで『白癒都市』イザークという名称を持つている。

そんな白い都市の中を、レーザはギルド支部へ向けて歩いていた。

彼の周囲では人々がせわしなく行き交い、その大半が白衣に身を包んでいる。

彼らはいわゆる『医術士』と呼ばれる存在だ。

胸に吊り下されたプレートを見るだけでも内科・外科・耳鼻科・皮膚科・産婦人科などなど、驚くほど多種多様な医術士が近くの力フェテラスでは意見を交わしている。

さらにある者はガラスケースにべつたりと張り付いて、中に飾られている最新鋭の医療器具を物欲しそうに眺めていたり、こけて怪我をした少年をその場で治療したりしていた。

この都市の役割は周囲を見れば分かるよつて、たつた一つのことである。

それは、医術の発展だ。

魔術では個人の体の奥深くまで『治療』することが出来ない。出来るのは皮膚表面と少しだけだ。

その上、『世界樹』^{コガドラシル}側から見た人体構成情報は異常といつていいほど密度で構成されており、手出しができなくなっているほどなのである。

それため、本格的な怪我や病気の治療のためには外科技術や内科技術を発展させる必要があつた。

その考え方の下、生まれたのがこのイザークというわけである。医術士を志すものならば絶対に来なくてはならないと言われているほどだ。

事実、ここには登竜門のような存在である。

「 はあ」

レーゼは町の中を歩きながらため息をついた。今朝のことを見い出したからだ。

「 まったく、俺という奴は……」

そう呟き、空を見上げる。

思い出すのは、朝の出来事。

起きれば同居人である少女が食事を用意して待つており、自分はそれを食べて軽く言葉を交わして家を出たというなんとも冷たいやり取りだ。

「……うん、最悪だな」

朝の自分の態度を整理して、そつぱく。
保護者として、あのような態度はいかがなものか、ヒ。

(だがなあ)

あの少女の顔を見ると、なぜか言葉が霧散するのだ。

育つた場所のお陰で子供と接するには慣れているつもりである。だが、向き合おうとする、心のどこかでそれを拒絶しようとしない。

「……度し難い、な

冷静に[口]の心情を分析し、そつ結論付けると歩みを速める。

そして数分後、たどり着いたそこには巨大な建物がとてつもない存在感をかもし出しながら鎮座していた。

地上三階建てのその巨大な建物の外壁は都市と同様に純白に染め上げられており、太陽の光が反射して眩しく見えてしまったのである。

「こつ見ても、白いな……

何かを確認するかのようにそれを見上げ、一言。
落書きでもしてやるうかと思うこともあるが、この都市の『王』
に文句を言われるのは嫌なのでやめておく。

『都市の王』いや、ギルドマスターがこの都市にはいる。

流石にメルヴィイスほどにぶつ飛んだ性格はしていないが。

(十分、おかしいとは思つがな)

そう思いつつ、両開きで木製の古びたギルド正面入り口の両扉を押し開く。

「ぬう？」

唐突な声に思考から意識を上げると　そこには肉の壁があつた。

「つおわつー?」

思わず悲鳴に近い声を上げたレーゼは慌ててあとずさる。
そこには筋肉の塊　もとい、巨大な筋肉男が立っていた。

鋭い、というか睨んだだけで人を射殺せそうなほどに凶悪な面構えの男である。頭はつるりと禿げ上がったスキンヘッドで、なぜか上半身は裸のままだ。

そして極めつけに、まるで自分の肉体を皿戻するかのようなポーズをとつてゐる。

傍から見たら変態　いや、確実に変質者だ。

少なくとも、胸板の盛り上がった筋肉をピクピクと動かしながらポーズを決めているこの男を見て『紳士』だとか思う輩はないだろ?。

だが近くを歩いていたものはそれを見ても「あー、またか」といつた表情で通り過ぎていくだけだ。

セルセロス・ハルガー。それがこの男の名前である。

そしてこの男こそがギルドマスターの一人、『破碎紳士』^{ジントーラマン}の一つ名を冠する男であった。

「……何をしているんだ？ セルセロス」

ギルド支部の入り口扉真正面で腕の筋肉を誇るポーズをとつているギルドマスターにレーゼが思わず問いかける。

「うむ。実は近日『筋肉自慢コンテスト』^{マッスル}があるらしいくな。それの調整だ」

低い声でセルセロスが言い、同時に今度は胸板を強調するかのようにポーズを取った。

筋肉が盛り上がり、なんとも形容し難い光景がそこに広がる。

見ての通り、セルセロス・ハルガーはつまるところ、こんな性格をしていた。

普段はまさに『紳士』といった言動や行動をしているのだが、筋肉のことになると性格が変わる。

簡単に言えば、『自分の世界』に入ってしまうのだ。それも、いくら周りが呼びかけても答えないほど真剣に。

街の通りの中央でそれが始まった時は、既に災害といつていいほどの被害を巻き起こしたぐらいだ。

やがて災害という名のポーズに飽きてきたのか、セルセロスは上着をさつと着込むと、

「それで、今日は何をしにきたのだ？」

「仕事だ、仕事」

問つてきたセルセロスに、レーゼは投げやりに言葉を返した。

「ふむ……。 むう、あれか。 メルヴィスから先ほど聞いたぞ」

納得したように大男は頷き、中へと入るように視線で促す。
言われるまでもなく、さつさと足を動かしてギルド支部のロビーへと入った。

中はギルド本部と比べ物にならないくらいじんまりとした空間だ。

小さな長机には一人の受付嬢が眠たそうに半眼で舟を漕いでおり、なんとも平和そうな光景が見える。

「……相変わらず、繁盛していないな。ここだけは」

「仕方があるまい。ここらは遺跡も少なく、平和そのものだからな」

だが、平和はいいことだ、とセルセロスは満足そうに頷き、上着のポケットから丁寧に折りたたまれた紙一枚を取り出した。

仕事の内容が書かれた紙なのか、セルセロスはござつい手をこれまでごつい顎に当てながら唸る。

「ふーむ、『追文』^{ヤガシナダ}の注文か。確かに、この近くの遺跡 アルテム遺跡でそれを持った機兵を見た、という報告はあったが……調査では見つからなかつたぞ?」

『追文』^{ヤカニンズ}とは、簡単に言つてしまえば通常の彩奏珠^{レヴァイオス}の上位互換である。

世界の根幹たる『世界樹』^{ワールド・ツリー}への接続権限はもうろんのこと、守護機兵が装着すれば知能も桁違いに跳ね上がる。

だからこそ、普通の魔術士はこれを持った守護機兵に戦いは挑まない。リスクがあまりにも大きすぎるからだ。

そもそも、『第三級』の魔術士が百人束になつてやつと対等に戦える化け物に戦いを挑む馬鹿など、この世界ではほんの一握りしかいない。

その馬鹿の一人が『第一級』の力を持つ魔術士、レーゼ・クライスその本人なわけなのだが、本人は大して気にした様子もなく、

「分かつていいさ。それに、見つかならなかつたら見つかならなかつたで、別の遺跡を探す」

「ここが発見報告の中でも一番近いから来たんだよ」と付け足す。すると巨漢なギルドマスターは納得したように唸り、言った。

「あい分かつた。では遺跡探索許可印だ。好きなだけ暴れてくるがいい」

「暴れたらマズイだろ?」といつより、ギルドマスターのお前が言つなよ

呆れた様子でレーゼが呟くと、差し出された書類を受け取り、中身を確認する。

それら全てが遺跡の内部構造や存在する機兵の種類と数などが書

き込まれた重要書類だ。

それを斜め読みして、数値がいくつか増えている」とて眞付いてレーゼは声を上げる。

「……ずいぶんと、増えているな」

「うむ。まったく、どこから湧いて出でてくるのや。困ったものだ」

彼らが言つてゐるのは守護機兵の数だ。
最近計つたものらしく、過去のデータと見比べても不自然と言つていいほど増えている。

レーゼはやりきれない様子で言つた。

「最近の説では『パレード』から魔術的に転送されてゐる、といつのが主流らしいが」

「その『パレード』も、製造ラインは全て潰されてゐる各地には機兵が増え続けているのだがな。十中八九、発見されていない製造ラインがあるのだ」

「だらうな……。さて、俺は行くぜ」

資料に載つていた全ての内容を頭に収めたレーゼはそれを差し出すよつに返す。

「『追文』など、せいぜい世界政府の天候予測演算装置ぐらいにしか使わんのになあ。一体どこからの依頼やら」

やれやれ、といった表情でセルセロスが首を振り、返された資料を懷にしまいながら、

「ともかく、氣を付けるがいい。お主は一応『第一級^{エクステス}』だが、『追^{セガ}文』は強いからな」

「ああ。死なない程度にやる。さすがに俺だつて命ぐらことは惜しい」

〔冗談半分で言葉を返し、青年は歩き出す。

「武運を祈る」

そんな低い声を背に、支柱を出た。
ふと思いつつ、空を見上げる。

そこには、眩しいほど^{ほど}の蒼天だけが広がっていた。

ぱたり、と何かが舞う音がヴァルハラ本部の執務室の中^{なか}で響いた。

「……これは、驚いたね」

「とも綺麗……」

『それ』を見て、メルヴィスとマイナは驚嘆の声を吐く。

少女は『』の背にある『もの』を驚いた様子で眺め、

「これが、私の特化能力……ですか？」^{【一】}

「うん。 そうだよ。 まさか、初めから能力に目覚めていたとは思わなかつたけどね」

驚きの感情から抜け出したメルヴィイスはそう答え、咳くよつし言葉を付け足す。

何故、こうなつたのを説明するには、数十分ほど時間を遡らなければならぬ。

メルヴィイスが特化能力に目覚めさせるための『アーティファクト』^{【リバースソウル】}『顕現心器』をギルドマスター権限で普段納めている場所から持ち出し、決意を固めたイリスに使つたのが一十分前。

そしてその五分後、結果として出たのは『能力：既に有り』の1文だけ。

それを疑問に思つたメルヴィイスは試しに顕現心器のもう一つの力を発動させ^{【二】}。

「良い言葉だつたねえ」

少女が『それ』を背に生やす要因となつた言葉を思い出し、うんうんと納得したように頷く。

それを聞いた少女は首をかしげ、自らの特化能力を興味津々といった様子で動かしながら聞いた。

「ええと、契約解放文……でしたつけ？」

その言葉にメルヴィイスは全長三十㌢ほどの中身をばしばしと叩きながら答えた。

「特化能力を顕現化させるための詠唱だね。いやあ、顕現心器に解放文が分かる機能があつてよかつたよ」

その言葉にイリスは苦笑しながら頷く。そしてもう一度翼を動かし、

「これで、レーゼさんの役に立つ事ができるんですね」

そう、感慨深く呟いた。

それを聞いたメルヴィイスは首をかしげ、問いかけを投げかけた。

「……そういうば、なんでイリスちゃんはそこまでしてレーゼ君にこだわるんだい？」

「私はあの人役に立ちたいんです」

私を助けてくれた人ですから、と愁いの表情で少女が言葉を返す。そして「それに」と言い、

「何故かは分からぬけど、あの人もしかしたら

私の知っている人なんじゃないかと、思つんです。

そう口にしかけて、

「 え？」

突如として、目の前の光景が変わった。

それは漆黒の空間。何も見えない、闇に包まれた場所だ。

いや、違う。イリスは瞬時にそう悟った。

元は明るい場所だったであろうそこは、何か巨大な影が光を遮っているためだ、と。

なんでそんなものが見えるのだろうか、と混乱する。

そこで、視界が再び切り替わった。

あ、とイリスはそれを見て声を上げる。

なぜなら、彼女の視界の目の前には 周囲の光を遮るほどの大な何かを目の前に、額から血を流しながら膝を付き、今にも倒れそうなレーゼ・クライスの姿が見えたからだ。

それを理解したその次の瞬間、これまた唐突に視界が元に戻る。

驚きの連続で息を詰まらせていた少女はそれに目をぱちくりさせて頭を振った。

そして不思議そうにこちらを見ているメルヴィイスとマイナを視界に納めると、

「「みんなさい！」

行くところが、出来ました！」

そう謝りながら叫ぶや否や、窓を押し開いて、

「え、あ、ちよ　！」

「えーい！」

メルヴィイスの制止の声も振り切つて少女は氣合の声を上げると共に、特化能力を動かして蒼い虚空へと飛び立つていった。

ぱさり、ぱさりと瞬く間に虚空の彼方へと飛んでいった少女を呆然とした表情で見送った二人は窓の外を眺める。

そしてメルヴィイスが額に手を当て、言った。

「……まさか、本当に飛んで行っちゃうとはねえ」

「確かに特化能力は特化しているものとは別に、その形の役割を再現するけど……」

マイナも呆れた様子でため息を付き、そう口にする。

彼女の言う通り、特化能力は長剣ならば長剣としての機能を果たしつつ能力を体現する。

つまり長剣の持つ『斬る』や『相手の攻撃を受け止める』という機能を保つたまま、力を使えるのだ。

だが能力に特化しすぎるが故に、必要最低限の機能以外の事例えは長剣のそれを『投擲』などしてしまえば、特化能力 자체が消滅し、使用者には精神的なダメージがファイードバックされてしまう

ところが、メリットが存在する。

(イリスちゃんのは　だから……。飛ぶことも可能ってわけだね)
そこまで考へて、メルヴィスは疑問の声を上げた。

「わしごえば、イリスちゃんはどう向かったんだろ?」

「……あの方向は」

彼の言葉に、マイナが思ひ出したようになづく。

「メル。私も行くところが出来たわ」

「へ?」

そして鋭く眼を細め、

「あの子が向かったのは　」

少女が向かつた先に視線を向けて、ただ一言、言葉を続けた。

「　多分、レーゼ君のところよ」

第九話・対峙 単眼の巨神

その遺跡は、イザークよりさりに南に一時間ほど歩いた先にある草原の上、林の近くに存在する。

九十年前より始まつた『遺跡災害』の最初期に『出土』したその遺跡は、今もなお長大な門を地上に晒しており、周囲には破壊されて風化した守護機兵^{ガーディアン}の残骸が散らばつていた。

遺跡の『門』^{ゲート}　　その外見としては、円を四分の一に分割したかのような僅かな湾曲の分厚い壁である。

元は純白であつたであろうそれはあらゆる場所が土で汚れており、あちこちにはひび割れや欠損があつた。まるで古代都市の城壁の一部のようだ。

そしてそれの下部の真ん中辺りには、標準的な大人が五人横に並んで入れそうなほど大きさを持つ正方形の入り口がぽつかりと開いており、まるで中へと誘つているようにも思えた。

今その内部で、何かが争つような音が響いていた。

轟、と遺跡内部特有のよどんで停滞した空気を引き裂きながら、鋭い槍の切つ先がレーゼの顔に迫る。

それをレーゼは身を捻つて回避すると、深い溝が刻まれた長剣をその腕の下に滑り込ませ、瞬時に掬い上げた。

「は……ああっ！」

裂ぱぐの声と共に澄んだ音が響き、固い装甲を誇るまほすの腕は滑らかな切断面を見せ、中から火花と色とりどりのロードと歯車を臓腑がぶちまけられるように地面へと落ちる。

すると槍を持っていた守護機兵は、口の武器を腕」と失つて動搖したのか明らかに動きを鈍くした。

その隙を見逃すレーザーもなく、そのまま旋廻するように体を捻りその手の剣を加速させ、守護機兵の胴を横一文字に叩き斬る。

昔の冒険活劇に出でくるような甲冑に身を包んだ守護機兵『騎槍兵』は制御系が上半身にあつたのか、残つた下半身はひざを付くよつとしてその動きを停止させた。

それを一瞥し、油断なく辺りを見渡す。

そしてこれが最後の相手と言つ事を確認し、ゆるゆると息を吐きながら長剣を鞘に収めた。

彼の周りには、合計十体の『騎槍兵』が同じように胴体や頭部などを切斷され、転がっていた。

「……いかんな。少し油断したか」

レーゼはそう呟き、額の汗をぬぐう。

始めは、口まで派手に戦う気はなかつた。

元々、この遺跡に来た目的は『追文』の彩奏珠セカンドレイオスを手に入れるためだ。

各地で定期的に行われる守護機兵掃討作戦のようこ、遺跡内部の守護機兵コーレムが全滅するまで戦ついたら数日は掛かるだらう。

ゆえに、巡回している守護機兵をつまみやり過ぎしながら進んでいたのだが、遺跡を六割ほど踏破したところで騎槍兵の集団とじばり出くわしてしまったのだ。

そこからなし崩しに戦闘に入り、そして今先ほどようやく十体の騎槍兵ランサーを倒しきったのである。

「集中力が切れているな。これが師匠にばれたら、色々と大変なことに……」

過去の仕打ちを思い出してかすかに顔を青くしながら、レーゼは頭を振つてその悪夢を追い出し、再び歩き出す。

戦闘の音を聞きつけた他の守護機兵ランサーがいつ来るのかは分からないので、早くそこから離れることに越したことはないのだ、とどこか言い訳をしながら。

そして数十分後、戦闘した場所から十分に離れたと判断したレーゼは頭の中に叩き込んできた資料の内容を今一度思い出す。

この遺跡の守護機兵の構成は騎槍兵ランサーと魔術士型キャスターのみとなつており、比較的大陸の中心に近いのにもかかわらず守りにおいて他の遺跡とあまり変わらない。

だからこそ、あまり戦闘に向かない『医術士』たちが集つ『白癒都市』という大都市を近くに立てることができたのだが。

「それにしても、本当に『追文』持ちの守護機兵はいるのか？」

レーゼはぼやく様に呟いた。

『追文』^{セカンド}は彩奏珠の上位互換である。そのせいが希少であり、それを装着している守護機兵^{ガーディアン}は珍しいいわばレアな存在となっている。

今回のこの依頼とて、こここの遺跡で『見かけた』という未確定情報のみなのにはじからともなく『入手依頼』が届くほどだといえば、その希少性が分かりやすいだろう。

無論、こここの遺跡で見つけられなかつたらここ周辺一体を探索してでも見つけ出さなければならぬだろ？、とレーゼは思考する。

ギルドは信頼が第一なのだ。そう簡単に「見つかりませんでした」では済まされないのである。

「……我ながら、厄介なものを引き受けてしまったな

その依頼を引き受ける原因を作つた『口の上司』^{マルヴィス}ことを思い出し、眉間に寄つた皺を揉み解した。

そして一時間後、無難に守護機兵たちをやり過^{ミス}しながらレーゼが辿り着いたのは、お椀をひっくり返したような形をしてるデーム状の大広間だった。

天井に走る幾重もの継ぎ目と汚れ具合、隅につづく高く積もつた埃が来訪者がいないことを表している。

「確か、ここは大広間だったな……」

ここの一時間で『追文』の彩奏珠を見つけられたかったことから、

若干の苛立ちを浮かべたレーゼは地図を脳内で展開しながら囁く。

その時だった。ズンッ、と床が空間ごと揺れたのは。

腹の底に響くような音が鳴り、ぐらつとレーゼの体が傾ぐ。

「へうー..?」

慌てて踏ん張り、何とか体勢を立て直し、

「何が

何が起こった。そう言いかけて、直後に言葉を失った。
大広間の中心部。その地面が、盛り上がっていたのだ。

そいつ、まるで何かが姿を現そうとしているかのようだ。

そして次の瞬間、足を掬うような大轟音がレーゼを襲った。
思わず耳を塞ぎ、出口近くまで飛び退く。

前を見れば、盛り上がっていったはずの地面には大穴が開いており、
それを覆い隠さんばかりの巨大な『何か』が立っているのがレーゼ
の瞳に映る。

長剣の柄に手を伸ばしながら、レーゼは『それ』を見上げた。

『それ』は守護機兵だった。

ただし、全てが三倍増しの、ではあるが。

見上げんばかりの巨体は鋼色ではなく艶のある漆黒で、騎士型の鎧兜にも似た頭部には角のようなものが装飾されている。

両手には刃の分厚い剣が一振り。

バスターード・ソードと称されているそれには血らしき赤錆がこびりつき、今まで殺した数を物語っている。

そしてその顔のど真ん中に、濃青色の宝玉がきらりと光っていた。

「なぜ『单眼巨神型』が……！？」

そのレーゼの驚愕の声に答えるように、^{ギガース}单眼巨神型と呼ばれた守護機兵は緩慢な動きでバスターード・ソードを掲げ 無造作に振り下ろした。

レーゼは咄嗟に横へ跳び、回避する。

目標を失つて地面に直撃した刃 といつより、もはや鈍器だは、土砂を跳ね上げて再びその姿を晒した。

『侵入者を発見。直チに排除します』

^{ギガース}单眼巨神型のみが持つ特性、『音の操作』によつて放たれたノイズ混じりの無機質な声がレーゼの耳朵を打つ。

「いひこつ相手は、苦手なんだがな……！」

苦々しい表情で青年は呟く。

レーゼは魔術士でありながら魔術が扱えない。

いや、その表現は正しくないだろう。

正しくは、たった『一つだけ』の魔術が使える。

そのうちの一つが魔術の初歩中の初歩である、魔力を用いた『身体能力の瞬間強化』と、なかなか微妙なものだが。

『身体能力の瞬間強化』。この魔術はその名のとおり瞬間に強化するものであって、永続的に脚力や腕力を強化するわけではない。

だからこそ、レーゼはこの手の巨大な敵は苦手であった。

それは単純に、攻撃が通りづらいという理由のためだ。

何せ相手は巨大で、なおかつ分厚い装甲を持っているのである。魔力を刃に被せることによって切れ味を強化させているとはいえ、敵の装甲や動力を貫けば意味が無い。

だがしかし、レーゼが巨大な敵をもつとも苦手とする最大の理由は。

「ぐつ！？」

薙ぎ払われるよう迫るのは鈍色の刃。

それは单眼巨神型が左手に握った剣から繰り出された一撃だ。

レーゼは苦しそうな声を上げながら『身体能力の瞬間強化』を使い、脚力を瞬間に強化。

そして背後に跳ぶことで、地面スレスレで迫る『死』から回避する。

田の前を巨大な刃が横切り、それから生まれた突風が彼の肌を這い回る蛇ように撫でていく。

「まったくもって、この攻撃範囲は嫌になるな……！」

ぜい、と息を少し切らしながらレーぜは長剣を構えた。

そのあまりの攻撃範囲ゆえに『身体能力の瞬間強化』を用いた回避がとても難しい、というものだった。

ゆえに、彼にとつてこの現状はとても好ましくないものであった。

普段単眼巨神型や巨人型を狩る時は、アシュレイなどといった遠距離からの援護ができる魔術士と共に行動していたのだからなおさらである。

しかし。

「 やるしかない、か」

彼は己の焦りをぐだらない物のように吐き捨て、苦笑を浮かべた。

レーぜにも『第一級単独探索許可書所有者』としての自負があり、矜持がある。

そして何より、家で待ってくれているはずの少女のためにも、負けるわけにはいかなかつた。

レーゼは目の前の单眼巨神型ギガースがゆっくりと動き出したのを確認しながら、思考する。

あの子は孤独だ、と。

正体不明の結晶に閉じ込められ、目を覚ませば記憶を失つており、自分が何者かさえも思い出せない。

全てを失つてしまつという『絶望感』を、レーゼは誰よりも知っていた。だからこそ、彼女を本当の意味で『一人』にはできない。

自ら避けていた自分がそう思うのもなんだが、と、内心でそう咳くと、レーゼは思考を切り替えた。

田つきが一瞬で鋭くなり、感覚が研ぎ澄ませられてゆく。

脳裏によぎるのは、今までの守護機兵との戦いの記憶。^{パーク}そして培つてきた技術の全て。

その中から使える動きや作戦のみを選択し、確実に『勝てる』レベルにまで戦術を組み上げてゆく。

かかつた時間はたつたの一秒。それは『身体能力の瞬間強化』とは異なる、十年にも及ぶ自己鍛錬によって会得したものだ。

「さて」

やがて、青年は涼しい顔で告げる。

今もなお、『侵入者』を叩き潰さんために両手の刃を振り上げて

いる巨大な守護機兵に向かつて。

「
往くぞ」

そして次の瞬間、地を蹴つた。

第十話・切札　　目覚める剣

戦いは、レーゼが想定していたものよりも順調であった。

单眼^{ギガース}巨神型^{ギガース}が縦に片方の剣を振るえば、脚部に『身体能力^{クイックブースト}の瞬間強化^{ストップ}』をかけて横に跳ぶことでそれを回避し、目標を失つて床に突き立つた刃を足場にして装甲へと到達し、長剣を振るつて硬い表面を削る。

あわよくば、副兵装^{サイドアーム}である魔力銃で頭部の彩奏珠^{レヴァイオス}を狙い撃ち、一撃必殺を狙う。

いわゆる典型的な一撃離脱戦法^{ピットアンドアウェイ}だ。

だがその単純さゆえに、この手の守護機兵^{ゴーレム}には絶大な効果を發揮する。

確かに守護機兵^{ゴーレム}は『魔術士^{ゴーレム}』と戦えるほどの知能を持つている。しかし逆に言えば、それだけなのだ。

魔術士とは一般的に、森羅万象^{クイックブースト}を操るものたちのことを指す。巨大な守護機兵はそれを軽々と防ぐほどの防御力を持つ、いわば『盾^{ウォーリア}』の役割に近い局地戦用の存在だ。

確かにレーゼは魔術士ではあるが、森羅万象^{クイックブースト}を操れるわけではない。むしろ『身体能力^{クイックブースト}の瞬間強化^{ストップ}』と経験と知識を生かして戦うところから、『戦士^{ギガース}』に近い。

だからこそ、单眼^{ギガース}巨神型の『盾^{ウォーリア}』としての役割は、レーゼにとってただの『壁^{ウォール}』でしかなかった。

『壁』は分厚い。だが決して壊れないわけではない。

レーゼは深い溝の刻まれた剣を振るつ。その『壁』を切り崩すためだ。

「はあっ！」

裂ぱくの声と同時に、本田三十一度田の斬撃が单眼^{ギガース}神型の装甲を切り刻む。

それと同時に、まるで切り分けられたホールケーキのように装甲の一部が剥がれ落ちた。

ガラガラと、瓦礫のごとく地面へと叩きつけられた元・装甲が粉砕される。

その音を真下に聞きながら、レーゼは出現したときよりもこじまこになつた表面装甲を足場に、脚部の『身体能力^{クイックブースト}の瞬間強化』を重ねがけしてからさりに跳ぶ。

目指す場所は頭部。^{ゴケヅラシル}世界樹^{ゴーレム}から守護機兵に知性と知識を提供する

知能ユニット

彩奏珠^{レディオス}

「見えた……！」

やがてレーゼの瞳に濃青色の宝玉が写つた。
思わず咳き、長剣を掴む手に力が入る。

しかし、あと数秒で到達するといったところで、唐突に声が響いた。

『危険感知。緊急作動機構、発動します』

それは単眼^{ギガース}巨神型の彩奏珠^{レヴィオース}から放たれたもの。そしてその声が意味するものは。

「 がつ！？」

理解するよりも早く、レーぜの頭が弾けた。いや、弾けたとそう勘違いするほど、痛みが、レーぜの頭を襲つたのだ。

まるで脳を針でめつた刺されるような鋭い頭痛が断続的に起こり、視界に無数の靄がかかる。

『ケイおティック・のイズ、発射二成功』

何だこれは、と、考える暇もなく、狂いそうなほど、痛みが脳みそをかき回す。

言つてゐることがよく分からぬ。体が言つ事を利かない。目が回る。吐き気がする。おかしくなる。自分の頭の中の『何か』がかしこくなる。おかしくなるおかしくなるおかしくなるオカシクナル！

『迎撃成功。続いて、対象の殲滅二移りマす』

かひゅ、と擦れた吐息がレーぜの耳朶を打つた。

それを聞いて、彼は思考する。

いつたい誰のものだ、と。

もう思考してから、ようやくレーゼは『理解』した。今のは、己の発したものである、と。

『理解』してしまえば後は簡単であった。いつの間にかぼやけていた視界はようやく元に戻り始め、そこでの己の体が倒れている事に気付く。

どうやら彩奏珠セイサイオズに到達間近で落ちてしまつたらしく、と状況を整理しながら、未だ鈍痛が響く頭部を押さえてのろのろと立ち上がった。

直後、頭上から風切り音。

それは空氣を引きちぎるものに近い異音だ。

その音が聞こえた瞬間、レーゼは頭が動くよりも早く体が回避の動作へと入つていた。

「ぐつー！」

落下時のダメージが残っているためか、無意識のうちの回避行動に全身の骨がぎしぎしと軋む。

しかしそれを無理やり無視して、レーゼの肢体は左方向へと全力で跳んだ。

瞬間、轟音。

遺跡全体を揺るがすほどの衝撃と音が、それなりに大きいこの広場に響き渡ったのだ。

そしてそれは、レーゼを狙つた单眼巨神型の剣が床に叩きつけられたせいである。

「さうそう休ませてはくれんか……！」

うめき声を上げながら、レーゼは傍から拾い上げた長剣を構える。その鋭い瞳は次の攻撃に移らんとしている单眼巨神型へと向けられていた。

「しかし、さっきの攻撃は一体 ツー？」

どう対処すべきか、と青年は鈍痛の残る頭をフル回転させようとするが即座に口をつぐんだ。

单眼巨神型の彩奏珠ギガースから声が響いたからだ。

『けイオティック・ノイズ、再度発射開始』

「……」

頭の中がかき回されたような激痛が、再びレーゼを襲う。しかもそれは先ほどのものよりも強烈で、一瞬にしてレーゼの意識を混濁させるには十分なものだった。

ぐらり、と青年の体が揺れる。その様子から、もはや意識はないも同然である。

だが倒れようとした寸前に、レーゼの腕が動いた。

動いたのは、右腕。ずっと昔から共にあつた、柄元から切つ先にかけて深い溝の入った愛剣を握った腕だ。

ガシュツ！ と、硬質な音が響く。

それは長剣の刃を石造りの床へと突き立たせた音。

その音に、ギガース 単眼巨神型は彩奏珠レヴィオス の機能の一つである視覚を動かし、音源へと向けた。

そこには、体をぐらつかせながらも立ち続けている　ただ一人の男がいた。

レーゼは消えかかっていた意識をどうにか取り戻していた。

一度食らつたものである。『来る』と分かれれば、簡単な魔力による防御ぐらいは思いつく。それがレーゼという男であった。

だからこそ白濁した思考の中でも、レーゼは『考える』。自らを襲つた敵の攻撃とは何か、ど

た。
ギガース 単眼巨神型はそれを『ケイオティック・ノイズ』と呼んでいた。

ノイズとは雑音のことだ。それぐらいは分かる。

だが、たかが雑音で『ここまで』の威力を出せるわけがない。音を操る『準二級魔術士』の知り合いなら一人かいが、そんな彼で

もこれほどの一撃を訓練で放つことはなかった。

そもそもダメージの方向性が違いますぎるのだ。

『肉体表面』ではなく『頭の中』のみに絞った一撃など、まさしく空間そのものを操る『空間系魔術士』でも出来ようもない。

ならばいつたい『何を使つた』攻撃か、と、そこまで思考したとき、はたとレーザは気づいた。

『何を使つた』。確かに単眼^{ギガース}神型は『何か』を使つた。それは音ではない『何か』だ。

ああ、と、彼は思考の中で首を縦に振る。表面だけの言葉に惑わされてどうする、とい。

「なるほど、な……」

今までの思考をたつた『一秒』で終わらせたレーザは、けほつ、と痛む頭を片手で抑えながら呟く。

「ノイズは、古代語では『雜音』ではなく、『乱れ』を意味する。つまり奴の攻撃は、界魔力^{オード}そのものを限定的に乱すもの、といふわけか」

世界には魔力の波長と呼べるものが存在する。それは界魔力^{オード}によって構成された、一種の『波』だ。

それは時に激しく、時に緩やかに、まるで母なる海にたゆたつている波のように、常に変化しながら魔力を宿す全てのものへと干渉してきた。

血肉をもつて生きる存在にはすべからく魔力^{マナ}が宿っている。そしてその中でも人間という種族は、とびぬけてその保有量が多くかった。だからこそ、人々は古より界魔力^{オード}の波に干渉されて、それを当たり前のように享受しながらこれまで生きてきた。

界魔力^{オード}の波が激しく揺れれば、敏感な人間ならば気分が悪くなるし、たいていの人間は魔術や体調の調子がよろしくなくなる。逆に、界魔力^{オード}の波が緩やかならば、多くの人々は調子がよくなる。

だが、それはもはや氣分が悪くなる程度ではすまないほどの高威力なものだった。

レーゼ自身がその威力を体感しているからこそ分かる。もう一度『アレ』を食らえば、本当に頭が弾けるかもしねり、と。

ゆえに、レーゼは『奥の手』を使うために長剣を構えた。
『ケイオティック・ノイズ』が放たれるよりも早く、单眼巨神型を破壊するために。

そんな彼の気配を感じ取ったのか、单眼巨神型は両手の剣をゆっくりと振り上げ。

「つー？」

側面より唐突に飛来した大人一人分ほどもある火球を避けるために、思い切り後ろへと跳んだ。

「こいつは……！」

レーゼの目の前を、膨大な熱量を内包した赤い砲弾がぎりぎりのところで通り過ぎてゆく。

それを横目で追いながら、着地したレーゼはうめき声を上げつつも顔をそれが飛んできたほうへと向けた。

この広大な広場へと通じるもう一つの通路。そこから、古い絵本に出てくる魔法使いのよつたな姿をした一体のゴーレムが、全身を晒していた。

『それ』の頭部はとんがり帽子をあしらつたような兜が被さつており、体は簡素な灰色の装甲に覆われている。そして頭部と思われる場所に位置する、橈円の中心部には、真ん中に空色の縦線が引かれた親指大の青い宝玉が装着されている守護機兵だ。

「追文付きの、魔術士型……！」

最悪のタイミングで現れたそれを見て、レーゼは苦々しく呟いた。そう、まさしく『最悪のタイミング』だったのだ。勝利の天秤がどちらに傾くのかさえ分からなかつたこの場において、少なくともレーゼには天秤を己のほうへと傾けるだけの『奥の手』があつた。

だが、それは单眼巨神型ギガースと一対一の時だった場合『のみ』だ。そこに別の存在　守護機兵が入ってくるのなら話は別である。

それは単純な戦力差の話だ。

一対一の場合、レーゼは単眼巨神型の動作や拳動から次の攻撃を予測し、『奥の手』^{キヤスター}を使つタイミングを的確に決められる。しかし魔術士型、しかも追文付きがそこに加わると、注意しなければならないものが二つに増えまる。

つまり、『奥の手』を使うタイミングが計りきれず、追い詰められていると云つてもいい状態であった。

どうする。魔術士型を先に破壊して追文を回収するか、あるいは怪我を負うこととを承知で『奥の手』を使つか……！

ギリリッ、と高速思考を繰り返しながら歯を食いしばる。
一者択一の選択肢。どちらを選んだとしても、手痛い反撃が襲つてくるだらうといふことだけはレーゼには分かつていた。

ゆえに 。

「 起きろ『アルゼス』！」

レーゼは選択した。傷を負つてでも、田の前の単眼巨神型を破壊することを。

瞬間、魔術士型の長杖から紅蓮の球弾が放たれる。

それはそこら辺の岩石さえも軽々と燃やし尽くしてしまつほど熱を秘めた魔力の塊だ。

レー^{ギガース}ゼは無理やり体を捻つてそれを避けようとする。だが意識を单眼巨神型に向けていたため、反応が極端に遅れた。

だから必然的に狙い澄まされたその炎の玉は、レー^{ギガース}ゼのわき腹へと直撃する。

「……ぐッ！」

まるでハンマーを叩きつけられたかのような衝撃に足がぐらつき、全てを焼き尽くさんとする紅蓮の炎が襲つた。

だがその直後、まず外套に燃え広がろうとしていた炎が水をかけられたかのように焼き消えた。

対魔術の効力を持つ仮想金属^{マギダイト}を纖維状にして織りこんだ彼の外套が、その役割を見事に果たし魔術的な炎を消し去ったのだ。
だがあくまで消し去ったのは炎のみ。自然発生した熱だけは吸收しきれず、レー^{ギガース}ゼのわき腹に中度の火傷を残す。

しかし、その痛みを無理やり意識から外し、レー^{ギガース}ゼは己の体内の魔力^{マナ}を操作する。

全ては『奥の手』を使うために、青年はまるで湯水のように魔力^{マナ}を『アルゼス』と呼んだ長剣へと注いだ。

『音声認識確認。輝奏剣四型・アルゼス、起動します』

そしてその直後、かすかに雑音の混じった女性のようでしかし無機質な声が、レー^{ギガース}ゼが握っていた長剣の柄元に象嵌された蒼天色の宝玉から響いた。

第十一話・顕現 最強の盾の少女

『音声認識確認。輝奏剣四型・アルゼス、起動します』

女性のような、少年のような、そんな甲高い　しかしかすかに
雑音が混じった声が響く。

それはレーぜが手にしていた剣の柄元に象嵌された、蒼天色の宝
玉から放たれたものだ。

己を『輝奏剣四型・アルゼス』と名乗つたそれは宝玉全体に細か
い光の筋を走らせ、まるで次の指示を待つ執事のように沈黙する。

「……っ。アルゼス、術式解凍！」

レーぜはわき腹のじぐじくとした痛みをあえて無視しながら、そ
う長剣の宝玉へと命令する。

それは彼が保有する『力』を解放するための言葉。全てを破壊す
る時のみに放つ、唯一の言の葉。

『命令確認。術式解凍、開始します』

するとそれに『アルゼス』は淡々と答えた。
まるで長年連れ添つてきた相棒のように、しかしひどく機械的な
声色で。

だが、その言葉と同時に、レーぜの足元に細長い影。

「ちつー！」

それは単眼巨神型^{ギガース}が振るつた長剣による一撃だ。

風を引き裂き、ひき肉にせんと迫る刃をレーゼは舌打ちをしながらサイドステップで避ける。

そしてその瞬間、レーゼの体を雷撃が貫いた。

「が、あつーー？」

それを放つたのはもちろん追文付きの魔術士型^{セカンド}だ。

いくら対魔術の仮想金属^{マギダイト}を織り込んだ外套であっても、全身を這い回る電撃を全て散らせるわけではない。

ゆえに、いくらかの雷撃がレーゼの肉体を焼き、全体の筋肉を硬直させた。

あと少しとこりとこりんで……！

レーゼは片膝を突きながら内心でそう呻く。

そう、あと少しで『奥の手』が発動できるのだ。放てば確実に『勝てる』ほどの威力を持つた『奥の手』が。

だが先ほどの雷撃によって全身の筋肉は完全に硬直しており、立つことすら叶わない。

しかしレーゼは歯を食いしばって、体を動かそうと全身に力を入れる。

彼の目に宿っているのは強い意思だった。

それは『生き物』としているものの、強い意思。ただそれ一つだけ。

レーゼは知っている。現実はいつだって無常だ。奇跡は起こらなければないことを。

だからこそ、自らで動き、生きるために抗わなければならない。それは単なる、生にしがみつく醜い『足搔き』などではない。奇跡ではないが、奇跡に近い『何か』を起こすための行動だ。

ミシリ、と硬直していた筋肉が弛緩しはじめる。だが直後にレーゼの税新を駆け巡ったのは身を焼かれるような痛み。

「ぐっ、くっ、ぬううう……！」

みしみしと、動かない体を無理やり動かす痛みに耐えながらも、青年はゆっくりと立ち上がる。

そんな彼の行動を警戒するように眺めていた一體の守護機兵は再び動き出した。

今度こそ、完全に『敵』を抹殺するために。

魔術士型（ワイザード）が杖（ギガース）を振り上げ、不可解な文字が挟まれた茶色の帯を中

に展開し、单眼巨神型（ギガース）がもう片方の剣を振り上げる。

一方のレーゼは思いのほか深く突き刺してしまった『アルゼス』を力の入らない腕で何とか引き抜こうとしていた。

だが、動くのは守護機兵たちのほうが早かった。
魔術士型（ワイザード）はとどめの雷撃を杖の先から放ち、单眼巨神型（ギガース）が残像を

残す勢いで剣を振り下ろしたのだ。

「！」、まで、か……！」

刹那、自らの敗北と死を悟ったレー・ゼは咳き、迫る刃を睨みつけた。

彼の脳裏に浮かび上るのは今までの思い出　いわゆる走馬灯だ　が駆け巡ってゆく。

そしてその記憶の最後を飾っていたのは、最近保護した一人の少女の笑顔。

すまない、イリス。

レー・ゼは心の中で謝った。ただ家で待っているであろう少女に向かつて。
一人にしてしまつといふこと。元々してやれなかつたといふこと。

「ダメええええええええ！」

直後、一人の少女の叫び声が、波打つたよつた静寂の空間に響き渡つた。

「……なぜはつくりと皿を開いた。

皿の前に広がっていたのは、ただ白く、一切の穢れのない純白の壁があるというものがだ。
そこでふと疑問に思う。

なぜ俺は死んでいないのか、と。

そしてはたと気づいた。体へ意識を傾けると、引きつるような痛みがいまだに残っている。

『感覚』があるといつゝとせ、生きているといつゝ証拠だ。
どうして、トレーゼは強く。少なくとも、あの一つの攻撃に耐えられるほど、己の体は化け物じみていない、と。

「よかつた、間に合つたあ

とても聞き覚えのある声が、背後から響いた。
とつさにトレーゼは振り返り、その姿を認めて呻くよう『彼女』へ問いかける。

「……なぜここにいる、イリス」

その言葉に、自宅で帰りを待っていたはずの少女

イリス・レ

ミナートはにこりと微笑むと、

「私は、レーゼさんに助けられました。だから、今度は私が助ける番です」

そう言つて、彼女はレーゼを覆つていた『もの』をゆっくりと動かした。

それは田^たく大きな翼だ。純田の、汚れ一つない、まるで天使のような。

それがイリスの背から衣服を貫通するように生え、レーゼを囲つていたのである。

「これは……」

イリスは周囲から翼を退かし、背中で折りたたむ。

その光景はこの世のものとは思えないほど幻想的で、レーゼは思わずそう呟いていた。

「^{プロテクトバー}防御特化能力、リヒトクラール。そういう名前、らしいです」

えへへ、どうれしあうにはにかんだ彼女の言葉に、青年は理解する。

「^{プロテクトバー}防御特化能力。つまりは守護に特化した『最強の盾』というわけか。

それ以前に、どういう成り行きでそんな能力を得たのかは気になつたが、ひとまづその疑問は心の奥へとしまってこんだ。

「まったく、家で待つていろと言つたはずなんだがな

その代わりに、まったく、といった表情でレーゼが言った。だが声色は責めるようなものではなく、どちらかといえば呆れているものに近い。

だがイリスはその言葉を生真面目に受け取ってしまったようで、顔に反省の色を浮かべ、

「あ、あいつ。えっと、その……迷惑、でしたか？」

そのまま、上田遣いでレーゼに聞いた。

それは『その手』の趣味の人間ならばまともに見れなくなるほど、可愛らしい動作だ。だがレーゼはその時、イリスの出現によつて動きを固めている守護機兵に意識の大半を飛ばしていたため、あまり気にした様子もなく首を振つた。

「いいや

「ふにゅつ」

そしてレーゼは、くしゃり、とその金糸のような美しい髪をひとつ撫^{コーレム}でして、久しぶりに穏やかな表情を浮かべて言つた。

「助かった。ありがとう」

「あ……、はいっ！」

礼を言われるとは思つていなかつたのか、その言葉と表情にイリスは一瞬だけ惚けるが、すぐに元気な声で答えた。
その顔に、太陽のような満面の笑みを浮かべて。

それを見て、レーぜも胸の内側が少しばかり暖かくなるのを感じていた。

そして思わず頬が緩むが、見られたくないと感じた彼は顔を背けて巨大な守護機兵へと向けながら、イリスへ告げる。

「さて、一仕事と行こうか。イリス、すまないが手伝ってくれ

「わかりました！ 精一杯、譲らせていただきます！」

グッ、とガツツポーズをして気合を入れるイリスに、レーぜはかすかな苦笑をもらした。

男が少女に護られるというその状況に、なんともいえない情けなれどこそばゆさを感じたからだ。

だが、それでもレーぜはその言葉を拒まない。

それが彼女に対する今までの無愛想な対応への謝罪だと理解していたがゆえに。

「『アルゼス』、命令入力」

『確認。命令をどうぞ』

対象の認識を終えた守護機兵が、ゆっくりと動き出す。

だがレーぜはそれに構うことなく、ただ静かに、淡々と『アルゼス』と言葉を交わした。

『任せた』からだ。あの少女に、この身を譲つてもいいことを。なぜかは彼自身にも『わからない』。しかし、まるで初めから知っていたかのように、『彼女になら任せても大丈夫だ』と、心のそ

「から納得できたのだ。

ゆえにレーゼは、己が握る長剣『アルゼス』に告げる。

それは『奥の手』を解放するための言葉。

それはすべからく立ち塞がる敵を殲滅するためだけに存在する『力』を解き放つ文章。

それははるか古より存在し、いまや知るものはほとんどない、たつた一つの奏。

「神聖なる四つ文字の契約にて、ここに解放す　“テトラス・テュクス・グラマトン”」

『パスコード解放文章確認。殲滅魔術式　　AIN・SOF・OWL、アンロック』

そして彼の言葉に、『アルゼス』は応えた。

返答はその声と一つの動作。バシュツ！　という鋭い音と共に、刀身を端から端へと刻まれていた深い溝から左右に開き、その内側を晒したのだ。

その内部の様子を表すとすれば、『複雑精緻』というのが正しいだろうか。

まるで音叉のようにみじんと半分に割れた滑らかな刀身の内側には、直線と直角線のみが複雑に絡み合つた『回路』が刻まれていた。

それは魔術に詳しくない人間ならば、ただの線の集合体にしか見えないだろう。

だが魔奏珠^{テリオス}や彩奏珠^{レヴィオス}に詳しい専門家ならば、それを見た瞬間^{ヒヤウ}に違いない。

それは魔奏珠^{テリオス}内部に刻まれている『魔奏回路^{サーキット}』そのものではないか、と。

しかしそれを指摘する者はいの場におらず、ただ状況は進展してゆく。

一体の守護機兵^{ゴーレム}は、再び攻撃の準備を整えつつあった。

第十一話・決着

最強の糸の青年（前書き）

遅くなりました。もう少しひで一章も終わりです。

第十一話・決着 最強の矛の青年

時は、イリスがレー^ジの元にたどり着くより数時間ほどかかるのぼる。

イリスが何かに突き動かされるようにアルテム遺跡へたどり着いたのは、『ヴァルハラ』本部から飛び出してから1時間後のことだった。

本来ならば大陸横断列車で四時間半はかかる距離を、直線に『飛ぶ』ことによって一気に短縮したのである。

まさしく驚異的なスピード。人ではありえないそれを成したのは、彼女の保有する『特化能力』によるものだ。

「うー、かな？」

イリスはそう咳き、首をかしげて遺跡の『門』を見上げた。

『門』を見るのはこれが初めてである。話だけは聞いていたが、これほど大きいものとは思わなかつた。

そう思考しながら、ぽつかりと開いた入り口に顔を向ける。

イリスがここまできたのは、ただの直感に近い。

メルヴィイスの執務室内でレー^ジが今にも倒れそうになっていた白昼夢を見た直後に、脳裏に浮かんだのだ。それもこの地点が明確に、である。

それを直感と呼ばずになんと呼ぼうか。少なくとも、イリス・レミナー^トにとって、それは『直感』であつたのだ。

彼女は過去を知らない。過去を持たない。ゆえに、己の意思で確信する。これこそが『直感』である、と。

だからこそ、イリスはここまできた。恩人の制止を振り切り、新たに得た『能力』の力を使って。

そしてもう一度だけ、少女は『門』を見上げた。

最初に見たときよりも強い意思を、その瞳に込めて。

「レーゼさん、いま、助けに行きますからね……！」

彼女が『門』内部へと足を踏み入れたのは、その数分後だった。

カツン、カツン、とイリスの足音が、石造りである遺跡の通路に響き渡る。

彼女が今歩いているのは、そんな通路の中でもひときわ大きなものである。壁には一定間隔で水に浸されると光る鉱石
アクリアダイヤモンドが
収められた容器が配置されており、明かりには困らない。

それを見て、ここは人の手が入っているのだということをイリスは理解していた。

『出土』した遺跡を調べる際、踏破した場所には必ず水光石
アクアサイト入りの容器を設置する。これは遺跡調査の基本だ。

さらに言うなら、この光は守護機兵をある程度遠ざける効果を持っているという。つまり、これが設置されているということは、あ

る程度安全な場所ということになるのだ。

「ん……。たぶん、こっち、かな？」

遺跡内部へと足を踏み入れてから早十五分。イリスはメルヴィスに習つたことを思い出しながら、何の武器を持つこともなく、テクテクと水光石^{アクアダイヤ}が放つ光の中を歩いていた。

だが別に、明確な目的地を目指して歩いているというわけではない。

彼女はただ、己の『直感』にしたがつて進んでいた。

「そっち……いや、こっち……」

そこに確かに『論理』や『理性』は存在していない。

感情の赴くままに、といったほうがいいだろうか。イリスは『この先は右に曲がらなければならぬ』などという脳裏に閃く『直感』によつて、守護機兵に出会うこともなく、何かに道部かれるようにただひらすら歩いていた。

だがそれもやがて終わりのときが来る。

曲がりくねつた細い通路を抜け、曲線のアーチを抜けると、突然視界が開けたのだ。

「あ」

そして彼女の視界に映つたのは、巨大な石像^{ギガース}が大剣を今まさに振り下ろさんとしているところである。

「ダメええええええええ

！」

刹那、イリスは悲鳴をあげた。まさしくそれは悲痛の叫び。大切なものが失われることへの恐怖。その感情のみが集約した、あまりにも痛々しい悲鳴。

そして少女は無意識のうちに前へと飛び出していた。

間に合わない？ そんなことは知らない。無謀だ？ そんなことは分かりきっている。守れはしない？ 守る。いや、守つてみせる。今度こそ。

脳裏を掠める自問自答さえも押しのけ、ただ『守りたい』といつ願いを胸に秘め、イリスは叫ぶ。『己が力』^{ヒーラー}を解き放つために。

「今ここに、命司^{おこし}る翼を受けたまえ　　“大いなる福音”！」^{ヒトクラール}

瞬間、少女の背中から純白の双翼^{ヒカル}がうねるよつに生まれた。その姿も相まって、イリスは誰がどう見てもまさしく天使のようである。

そしてイリスは『飛ぶ』。レーゼと共に、彼我の距離を一瞬にして詰めるために。

距離にして数十メートル。走れば数秒かかる距離だ。だが全力で『飛べば』、数秒すらもかからぬ距離。

巨大的^{ギガース}な石像^{ワイザード}が大剣を振り下ろし、レーゼの陰に隠れて見えなかつたところが帽子の石像が雷撃を撃ち放つ。

「 ッ！」

あと数秒でその二つの攻撃はレーゼへと直撃し、彼を物言わぬ肉塊へと返るだろう。

だがそれよりも早く、イリスはレーゼの背後へとたどり着き、絶対的な防御力を持つ双翼を展開。穢れひとつないそれによつて全てを包み込んだ。

そしてその直後、翼に伝わってきたのは柔らかな感触。予想していたよりも小さな衝撃だった。

それを感じて、やつとイリスは一息ついた。

「 よかった、間に合つたあ」

レーゼが驚きの表情で振り返る。そんな彼にイリスは微笑みを向ける。

その瞬間から、二人の『道』は白翼の元に交差した。

時は戻つて現在。

状況は確実に動いていた。

「神聖なる四つ文字の契約にて、ここに解放す　　“テトラス・テ
ユクス・グラマトン”」

『^{バスクード}解放文章確認。絶対殲滅魔術式　　アイン・ソフ・オウル、アン
ロック』

レーゼの声と共に『アルゼス』は剣の刃部分を音叉のよう^に割り、
その間にイリスを脅威と見た单眼^{ギガース}巨神型が両の大剣を振り上げ、二
人もうとも叩き潰そうとしてきたのだ。

だがそれはさせないと、イリスはまるでもう一本の腕があるかの
よに己の意思のままに動く純白の双翼^{プロテクトード}　防御特化能力、リヒト
クラールを振るい、その場から一步も動かずレーゼを包み込む。

瞬間、单眼^{ギガース}巨神型による剛の一撃が白翼にぶつかり　　しかし何
の音を立てることもなく、一振りの剣は『停止』した。

そう、『停止』したのだ。弾くわけでもなく、無理やり受け止め
たわけでもなく、ただ翼に触れさせただけ。

たったそれだけで、全てを碎くほどの威力を持つ单眼^{ギガース}巨神型の攻
撃は無効化されていた。

「レーゼさんには、指一本触れさせません」

これこそがイリス・レミナートの特化能力^{コード}　防御特化能力、リ
ヒトクラールの力だ。

運動量、熱量、質量、エトセトラ、エトセトラ。それらありとあ
らゆる『ベクトル』を無効化し、どんな攻撃だろうと『ゼロ』にす
る。

ベクトル操作ではなく、ベクトル消滅。その力はまさしく『無敵』

。防衛といつものを極限まで『特化』させたがゆえの力である。

「イリス、あと十秒だけでいい 耐えてくれ」

そんな彼女の活躍に、かすかな笑みを浮かべながらレーゼはそう告げた。

頼もしいと、そう思つたからだ。

そしてレーゼがイメージするのは、鎧びつき、穴空きだらけでまともにかみ合はず、まったく動かない『歯車^{ギア}』の大群。

そこに己自身を歯車としてはめ込み、イメージ内の完成した『歯^{ギヤ}車^{アーム}』をゆっくりと動かし始める。

回れ、廻れ、永久に、永遠に^{トワ}。

イメージの中に投じるのは一つの眩き。

回れ、と鎧だらけのそれに告げ、廻れ、と金切り音を上げるそれに命令する。

直後、レーゼの足元から莫大な蒼色の光があふれ出した。

それは彼自身が保有する魔力を視覚化したものだ。すなわち、レーゼが魔術士であるという明確な証拠である。

「さて」

彼が言葉を放つと同時に、足元から湯水のごとく溢れ出していた蒼色の魔力が一瞬にして、長剣『アルゼス』に象嵌されている蒼天色の宝玉へと集束し始める。

瞬間、きちり、と何かが軋む音が響き渡った。

否、違う。ぎしり、ぎしり、と音を立てながら、空間が、『世界』そのものが『軋んでいた』のだ。

それはレーゼの持つ『アルゼス』からではない。レーゼ自身を中心として、『軋んで』いるのである。

「今までのお返しだ。ありがたく受け取れ」

そしてその青年の咳きと同時に、構える。

それは切つ先を地面に向け、刃を水平に寝かした、いわばなぎ払うための構えだ。

その動作と同時に音叉の「」^{ゴーレム}とく割れた刃と刃の狭間に、レーゼと同様の魔力光が満ち始めた。

人が扱うにはあまりに『あすぎる』その魔力量に何か危険を感じ取つたのか、二体の守護機兵の攻撃が激しくなる。

しかし 。

「譲つて、リヒトクラール！」

凛とした声が響く。少女の声と共に、翼が動く。

彼は絶対的な盾に包まれている。その盾の前に、あらゆる攻撃は通用しない。

だから、レーゼはひたすらに集中することに意識を傾けた。

意識とこう名の水面がいつさいの波紋さえなくなるほど、凄ま

じい集中。そうでもなければ、今から解放しようとしている『魔術』は御しきれないのだ。

そう、『魔術』。レーゼが放とうとしているのは紛れもない魔術だ。

確かに、レーゼは魔術を扱えない。『奏無し^{うたな}』と呼ばれてしまつほどに。

だがそれは、『通常の魔術』の場合である。

今、この場で解放されつつあるその『魔術』は、魔術士が扱う森羅万象操るような『それ』ではなく、レーゼだけが扱える、特別にして絶対の魔術。

魔力制御が少しでも乱れれば、己を滅ぼしかねない諸刃の魔術^{チカラ}。

その名を、『アイン・ソフ・オウル』といった。

「我、ここに『最強の矛』を解放せん　全てを貫き、滅ぼしつくせ！」

レーゼが最後の詠唱を終えたその瞬間、刃の狭間に閉じ込められていた蒼の光が爆発的な閃光を放ち、多大な魔力の発生によつて生まれた暴風と共に広場を満たしてゆく。

そしてその中で、レーゼは全身を襲う倦怠感に絶えながら仕上げの術式制御を行つていた。

全身の血を残らず吸い取られていくかのような感覚に、思わず後ろへ倒れこみそうになるが気力を振り絞つて耐える。

魔力は第一の血液^{マナ}といつても過言ではないため、その表現は正しいと言えるだう。

(何度、使っても……この感覚だけは、慣れんな……！)

術式制御の合間にできた余裕のあるコンマ一秒、それを消費してレーゼは心の中でそう呻く。

それは苦痛を表す咳きではなく、単なるぼやきだ。

だがその呻きの直後、背中に暖かい感覚が生まれた。

レーゼは振り向かずとも、その暖かい感覚が何なのかを『理解』する。

イリスの小さな手のひらが、レーゼの背を支えているのだ、と。

そつと背後を振り返り、レーゼは己を支える少女の顔を見た。

美しく整ったその顔に浮かぶのは『心配』、ただその一つだけだ。

それを見た瞬間、レーゼは苦笑をもらした。どうやら先ほどの『ぼやき』を彼女はどうやってか感じ取っていたらしい。

不思議な少女だ、と青年は思考する。だが、不思議と別段それを奇妙だとは思わなかつた。

だからこそ、レーゼは少女へと頷きを返す。込めた意味は『大丈夫』。

ひどく簡素だが、力強さがこめられたそれを見て、イリスが微笑を浮かべる。

互いの心が通じ合つ。それはひびく心地よく、心のどこかが暖かくなつたのをレーゼは感じていた。

そして閃光は急速に刃へ集束し、一種の静寂が訪れ。

「放つ　あまねく万象滅^{ソフ}ぼす極^{オウル}光！」

イリスが最高のタイミングで翼をじけると同時に、レーゼは刃を横薙ぎに振るつ。

そして、光の濁流が生まれた。

「　つ！？」

その光景に、イリスは声にならない叫び声を上げる。
それほどまでに、『それ』は壮絶な光景だったからだ。

彼女の目に映つたのは、まさしく『濁流』だ。まるで川の水が海へと下るように、アルゼスから放たれた極光はうねることすらせず、全てを飲み干さんばかりの勢いで巨漢^{ギガース}の守護機兵へと直撃する。

その瞬間、バガーン！という、まるで鉄槌が金属そのものを碎いた

ような衝撃音と共に、表面装甲が光の粒子となつて『消滅』した。

そう、『消滅』のだ。なんの抵抗もなく極光はその分厚い装甲を『光の粒子』へと分解させたのである。

そして極光の勢いはまだ止まらない。

それは表面装甲を消し飛ばすとそのまま内部機関を無作為に破壊しながら、背中を装甲ごとぶち抜いて天井へと達していた。

生半可な攻撃では傷一つすら付かないはずのその『遺跡』の天井も、じりじりと直撃している部分が消滅していくことから『アイン・ソフ・オウル』の威力が分かるだろ？

そして、ぐらり、とそのあまりに凄まじい攻撃と衝撃に、ギガ単眼巨神型の巨体が後ろへ傾く。

『しシしシシシステムえラあアアアアアー。魔術にヨル、ノ、ニ、ノウ撃を確ニン。メイんシステムにそん、そんそんそんソソソソウあり。システムダウン。復旧不可能。復旧ふかの……』

やがて_{ギガース}单眼巨神型は未練がましくザリザリと不愉快な雜音が混じつた無機質な言葉を吐き続け、唐突にブツンとう音とともに動作を停止させた。

「『アルゼス』！ 術式、停止……！」

『了解。アイン・ソフ・オウル、ロック』

レーゼはそれを見届けた瞬間、息を乱しながらも『アルゼス』への魔力供給をカットしてそう命令した。

『アルゼス』はその言葉に従い、『アイン・ソフ・オウル』の術

式そのものを停止させ、封印する。

それと同時に、ガシュッ！ という音と共に首叉のようになぎ割れていた『アルゼス』の刃が再び一つに戻った。

『アルゼス』の切つ先から極光がゆるやかに收まり、元の明るさを取り戻した広場に残っていたのは、胴体に大穴を明けて完全に機能停止している单眼^{ギガース}巨神型と、目の前で起こったことを処理しきれずには動作を停止させている魔術士^{ワイザード}型と、『アイン・ソフ・オウル』に根こそぎ魔力を持つていかれ荒く息をついているレーゼ、そしてぱちくりと目を瞬かせているイリスだけだった。

第十二話・開演

奏くウタゝわなに青年と奏翼ゝソウヨクゝの少女（前書き）

お待たせしました、ついで第一章完結です。

次の第三章では、やうやく世界が広がり、明確な『敵』も登場します
ので、お楽しみに！

「す……す」のです！ レーザさん！」

『アイン・ソフ・オウル』の極光。その一撃によつて訪れた静寂を最初に打ち破つたのは、イリスのそんな感銘の声だつた。それを聞いたレーぜは氣恥ずかしさを誤魔化すように頬を搔き、

「俺はこの『力』をす」こと選つたことはないが……」「

額の汗を腕でぬぐつと、言葉を続ける。

「イリス。改めて、ありがと。君がここに来てくれなかつたら、俺は

死んでいた。

ゆえにレーぜはそう心からの感謝の言葉を告げ、金糸のように美しい髪の上へとぽふんと手を乗せた。

「はうひ。…………あ、え、うう……」

対してイリスは恥ずかしに頬を桜色に染めて言葉を詰まらせていた。

それは彼女にとって、『記憶』のある限り初めての、心の底からの感謝の言葉だったからだ。

「えつと、その、あの……」

そしてイリスはまだ桜色に染まつてゐる頬に両手を当て、じり返

せばこいのか分からずにただ困惑の声を上げた。

しかしそれは仕方のないことだった。何せ少女は『記憶』という名の過去を『喪失』しているのである。
どの言葉に対しどの言葉で返せばよいか、それを意識的に行えなどと、無理があるだろ？

レーゼはそんな彼女の様子を見て、まるで子供を見守る父親のような笑みを口元にかすかに浮かべた。

「イリス」

「ひや、ひやい！？」

そして顔が少女と同じ位置になるように片膝を突くと、
イリス

「せうこいつ時は、『どひこたしました』、だな」

しつかつと、澄んだ碧眼を見つめながら。

「あ……」

彼の言葉にイリスが目を見開き、やがてはにかむような笑みを浮かべて、元気な声で言った。

「どひこたしました」

そんな彼女の言葉にレーゼは頭を軽く撫でることでこたえると、立ち上がりのある方向へと顔を向けた。

彼の視線の先。そこにほゅつくりと動きだしている追文付きの魔術士型^{ヤスター}がいた。

それを見据えながら、レーゼは『アルゼス』を握る手に力を込める。

单眼巨神型^{ギガース}を撃ち倒したことにより、戦いの山場はもはや越えていく。あとは本来の『仕事』を済ませるのみ。

そう思考し、魔術士型^{ヤスター}へと一步踏み出した。

だが、その直後、目の前で起こった出来事にレーゼは足を止めた。いや、止めざるを得なかつた。

魔術士型^{ヤスター}の背後にある通路の暗がりからぬつと現われた、陶器のように白い両手が、その後頭部と右肩部をがつちりとホールドしたからだ。

「……は？」

「ふえ？」

レーゼの呆然とした声にイリスも反応し、そちらへと顔を向ける。同時に魔術士型^{ヤスター}は己の後頭部と右肩部の拘束を振りほどこうとするが、押さえつける力が大きすぎるのか、動けずにいた。

その光景はまさしく非現実的なものであつた。

確かに魔術士型キャスターは守護機兵の中ではもつとも非力であるが、それを腕力のみで押さえて動けなくするなど、ありえないことである。魔力や魔術があるからこそ守護機兵ゴーレムに対抗できるのであって、腕力のみでは傷一つつけられることすら出来ないはず、なのだ。

だがその『非現実』を成している白い両手の指は魔術士型キャスターの薄い装甲にゅつくりと食い込み、やがてメキ、メキ、と、硬質なものがひび割れるような音が響き始め、その装甲に亀裂キレが入り始める。そして数秒の後、耳の奥に響く破碎音と共に、ついに魔術士型キャスターの首が、まるで人形の首を千切るように簡単に引きちぎられた。

「じゃなのに手こずるなんて、珍しいじゃない？ レーゼ君」

肩を掴んでいた白い片手が開かれ、制御系を失つた守護機兵ゴーレムだつた『もの』が甲高い音を立てて崩れ落ちる。

それと同時に聞こえてきたのは、レーゼにとっても、イリスにとつても、とても聞き覚えのある声だった。

「マイナさん？」

「ええ、ちょうど一時間ぶりねえ。イリスちゃん」

イリスの呼びかけに優しい声色で答えるながら暗がりから一人の女性が姿を現す。

陶器のように白い肌と、薄紫の長髪に縁取られた小さな顔には釣りあがった群青の瞳があるが、今は柔らかい表情を浮かべていた。

ただし、片手は引きちぎつた魔術士型の頭部を驚づかみにしており、それを成したことこそ彼女マイナ・セルタレイが軍神であることを示していた。

軍神とは『規格外』の塊だ。常人が出来ぬことを彼らはたやすく実行し、成してしまつ。

ゆえに、魔力でのみダメージを『えられるはずの守護機兵の装甲』を引きちぎるぐらい、容易なのだろう。

「こきなり飛び出していくから、慌てて追いかけてきたのよ？」

「……やはり、ここまで走つてきたんですか？」

マイナの言葉にレーぜは疲れた様子で問いかける。
その話を横で聞いていたイリスは首をかしげ、疑問の声を上げた。

「走つて……？」

「ええ。時間が惜しかつたから、一直線にここまで来ちゃつたわ」

「へ？ えつと……、えー？」

ふつふーん、となぜか誇らしげに胸を張つてゐるマイナの言葉を理解しきれないのか、イリスはただ小鳥のように首をかしげる。
隣に立つていたレーぜは彼女の様子を見て、鞘に『アルゼス』を收めながらフォローするように口を開いた。

「イリス。この人を『普通』と思わないほうがいい。マイナ女史は全てにおいて『規格外』だからな」

「はあ……」

彼の言葉に納得したのかしてないのか、イリスは曖昧な表情のままで頷いた。

レーゼはその様子に苦笑しながら、ぽんぽん、と少女の頭に軽く手を乗せる。

マイナはそんな二人の様子を見ながら、口元にかすかな笑みを浮かべた。

どうやら田の前の少女の悩みは取り除かれたようだ、と、そう思考しながら。

「さあて、一人とも無事なようだし、私は帰るわね？」

この追文ナカシナは私が変わりに報告しておいてあげるわ。

そして用事を済ませたマイナはそう言い残し、片手に魔術士型の頭部を齧ヤブり込みにしたまま、再び通路の暗がりの中へと消えていった。

「……行つちやいましたね」

「まつたく、あの人は……」

ぽつん、と取り残されたイリスが呟くように言った。

それに同意するようにレーゼは頷き、しわの寄った眉間に親指と人差し指で揉み解す。

やがて静寂が再び遺跡内を満たし始めたころ、唐突に蒼髪の青年は出口へ向けて歩き出す。

同時に驚いた表情をしているイリスへ顔を向けると、片手を差し伸べて口を開いた。

「さあ、イリス。帰ろつか。俺たちの家に

「あ　はい！」

そして、そんな元気な声と共に、少女は青年の後を追つた。

ざりざりと、耳を澄ませなければ聞こえないほどの、かすかな雑音がダルムヘイツのギルドマスターの執務室に響いていた。その不愉快な音を発しているのは、執務机の中央に置かれている全長30cmほどの薄く黒い長方形の物体　アーティファクト『リバースソウル顕現心器』である。

「……どうなつていいんだ？」

『リバースソウル顕現心器』が虚空に映し出している、手のひらに収まる程度の大きさを持っている薄く透明な正方形な板　『情報投影板』を指先で操りながら、『古の統率者』にして、ギルドマスターたるメルヴィス・セルタレイは、顎に手をあてながら、一人そう呟いた。
顔は普段のような柔軟なものではなく若干の陥が混じつており、

それが彼の感情を物語つてゐる。

リバースソウル
メルヴィスが行っているのは『顕現心器』の力を利用した、特化コ^ト能^イ力^ノ『情報検索』である。

「**顕現心器**」はアーティファクトとしては珍しく、複数の力
を有している。

一つ目は無論、特化能力を開花させるための力。二つ目は特化能
力を解放するための『^二契約解放文』を伝える力。そして三つ目は、
今まで開花させた特化能力の情報を検索する力だ。

メルヴィスはその三つ目の力を使い、イリスの特化能力について調べていたのだ。

別に大それた理由などない。

スソウル 心器『 ただ、彼女の記憶の糸口が見つかればいい。 そんな考へで『顯現 の検索機能を実行したのである。

だか

「ない」

顎に手をやり、メルヴィスが疑問の声を咳く。

そう無いのだ。

「防御特化能」という条件で絞りうとも、全体を見直しても、『顕現心器』内に登録されていなかつた。

ると同時にその能力^{アビリティ}その他もろもろが自動的に登録されるようになつてゐる。

これは世界統一政府側にも設置されている、兄弟機であるもう一つの『^{アスガルド}リバースソウル』顕現心器も同様であり、この二つは情報を共有しているのだ。

つまり、特化能力を有するものは必ず『顕現心器』に登録されていふはずであり、情報の検索などたやすいはずなのが。

「うーん、やっぱり無いなあ」

メルヴィスはポチポチと横に長い透明な板に、手馴れた手つきで指を滑らせながら、条件をより深く、今までとは違うキーワードで検索してゆく。

検索結果：0件。契約解放文：1件。その他の情報：0件。

ポチポチ、パチパチ、と、ただひたすらに。

検索結果：0件。検索結果：0件。検索結果：0件。検索結果：0件。
果：0件。

何かに取り付かれたかのように、一心不乱に。

検索結果：0件。検索結果：0件。検索結果：0件。検索結果：0件。
果：0件。検索結果：0件。検索結果：0件。検索結果：0件。検
索結果：0件。検索結果：0件。

それはまるで壊れてしまつた機械のことへ、同じことを繰り返す。

検索結果：0件。検索結果：0件。検索結果：0件。検索結果：0件。検索結果：0件。
果：0件。検索結果：0件。検索結果：0件。検索結果：0件。検索結果：0件。検
索結果：0件。検索結果：0件。検索結果：0件。検索結果：0件。検索結果：0件。
検
索結果：0件。検索結果：0件。検索結果：0件。検索結果：0件。検索結果：0件。
検索結果：0件。検索結果：0件。検索結果：0件。検索結果：0件。検索結果：0件。
件。検索結果：0件。

「 メルヴィスの大将？」

「……んんー？」

唐突に頭上から響いた訝しげな声に、メルヴィスは手を止めた。
そして顔を上げ、声の主を確認する。

「何をやつてんですか？」『顯現心器』なんか持ち出して

執務机の前に気づかぬうちに立っていたのは、片手に書類の束を持った『第四階層情報部』のリュカリオ・ヘルゼリオスだった。

そんな彼の言葉にメルヴィスは我を取り戻したかのか、いつの間にか攀りそうなほど酷使していた指から力を抜き、まるで抜け殻のように力の抜けた体を椅子にもたれさせながら氣の抜けた声で返す。

「あ……、ああ、ちょっと、ね。……『調べモノ』ってやつかな」

「はあ、それは構わないんですが。追加の仕事です。ここからここまで、認証のサイン、お願いします」

リュカリオはメルヴィスの様子を対して気にすることも無く

普段の行いがアレすぎるためであるが
ばさりと執務机の上に置いた。

その量はざつと50枚程度。普段メルヴィイスが処理している量からすれば10分の一にも満たないだろう。

だがその内容は、普段のものよりも10倍は濃かつた。
正確に表すのなら、書き込まれている文字が小さすぎて、虫眼鏡でなければ読むことすら困難なレベルなのだ。

「…………。マジで？」

「ええ、本気と書いてマジです。あなたの奥さんが『踏み台』にしたモノの損害リストですかね。とっととお願ひします」

それを見て、メルヴィイスは呆然とした声を上げた。

今から一時間ほど前、彼の妻 軍神マイナ・セルタレイが、この部屋から『飛び』出していつたとある少女を追うために『跳んで』いつたのだが、その際に彼女が『足場』にしたもののがことごとく被害を受けたらしく、この書類全てにそいつた『実情』が記されていた。

田を凝らしてよく読めば、『北区の民間建造物の屋上にて軍神の『跳躍』を確認。飛び散った衝撃波により周囲に被害発生。破損ガラス枚数254枚』や『着地時の衝撃により大陸横断列車用の大型線路が一部破損』、さらには『軍神の高速移動によって発生した轟音による騒音被害発生』などなど、とんでもないものばかりである。

そんな報告書を読めば読むほど、その被害がメルヴィイスの頭の中で再現されてゆく。

まさしく人間台風 いや、『人災』と呼ぶべきだろうか。

手にしていた書類の束を

「あ、あはははー。…………はあ」

後々の処理のことを考え、白髪の青年はただ渴いた笑い声を上げた。

谷に響ひ、もひどいにもなれ、といった状態である。

リュカリオは口から魂が抜けかかっているメルヴィイスに心の中でひそかに黙祷をささげると、即座に 物音すら立てずに、執務室を後にした。

残つていれば確実に地獄デスマーチの書類処理に巻き込まれると、直感が告げていたからである。

そして執務室は再びメルヴィイス一人だけとなり、静寂が満ちる。その中で青年は少しだけ気合を入れるように両手でガツツポーズをすると、羽ペンに手を伸ばした。

だが、そこでふと思い出したよつこ『顯現心器』リバースソウルへ顔を向け、独りごちる。

「…………しかしこれは、どうこうことなんだろうねえ」

脳裏によぎるのは『検索結果・0件』ヒンカンゼンの一文のみ。

あまりに簡素なその文。存在そのものを否定するかのような文字列に、思わず体が一瞬だけ震えた。

ゆえに青年は咳く。それを否定するためではなく、ジョークのように言い換えるために。

これじゃあまるで 。

「 初めから、この世に存在していないみたいだ」

しかし、そんなメルヴィスの言葉は、蒼く晴れ渡っている空へと
吸い込まれるようにして消えただけだった。

今までの登場人物 Ver・2（前書き）

今までの登場人物です。

前回よりも情報量が増えてきたので、色々と書き足します。

今までの登場人物 Ver.2

レーゼ・クライス - Lese Creis -

『最強の矛』を持つ青年。

あり、『剣帝』の一つ名を持つ。

何事にも動搖せず、冷静な性格の持ち主。本心を簡単には曝け出さず、自分の優先順位が異常なほど低い。

ギルドの中で最も高いランクである『第一級単独探索許可書』工クステス所持者であり、その実力は折り紙付きである。

いり。

容姿は美形といつても過言ではない。首すじまで伸ばした青の髪を一まとめにしており、鋭い刃のよくな冷たい碧眼を持つ。

黒いシャツの上に、対魔術の効力を持つ仮想金属を纖維状にして織り込んである青い防刃ジャケットを羽織り、同じように金属纖維を編みこんだズボンを着用している。

使用武器は長剣と魔力銃。

堅実な戦法を得意とし、派手さはないが確実に守護機兵を破壊するように立ち回る。

また、使用可能魔術は現在二つ。
クイックブースト

『身体能力の瞬間強化』

『絶対殲滅魔術式 アイン・ソフ・オウル』
の一つのみである。

イリス・レミナーント - Iris Lemnarl -

『最強の盾』を持つ少女。

古代遺跡『アルバレスタ』の地下において巨大水晶に封印されたところをレーゼラに発見され、保護された謎の少女。現在は重度の記憶喪失であり、保護される前までのことと名前を除いて一切覚えていない。

見た目は美少女といつて差し支えない。

金髪碧眼で、肩甲骨が隠れるくらいの金糸のよう^{フロックコード}に美しいロングヘア。

『双翼』形状の防御特化能力・リヒトクラールを操る。
契約解放文は『今ここに、命司^{みこと}る翼を受けたまえ』

アシュレイ・ツァイス - Ashley Zeiss -

遺跡探索・魔術士ギルド『ヴァルハラ』に所属している魔術士。
『第一級単独探索許可書』セイレス・ルード所持者ではあるが、
その実力は『エクステス』に匹敵している。

陽気な性格で、誰からも親しまれているが、一度調子に乗るとへマをしやすく、どこか抜けている。

ざつくばらんに切りそろえた銀灰色の髪と緑の瞳を持つ。

その容姿はどちらかといつと一枚目。

使用武器は十字架から姿を変えるアーティファクトの長槍。得意の重力魔術によって派手に動き回りながらブーツやコートに仕込んだ暗器なども使い分けて戦い、トリックキーな戦いが得意。

セレーネ・C・ミストノート - Selene C Myster
au ght -

遺跡探索・魔術士ギルド『ヴァルハラ』に所属している魔術士。『第一級単独探索許可書』セイレス・ルード所持者であり、そのことを誇りとしている。

その本質は高飛車なお嬢様に近く、無駄にプライドが高い。空間を支配する魔術を扱う、空間系魔術師である。

メルヴィス・セルタレイ - Melvis Seltarray -

『遺跡発掘・魔術士ギルド』が誇る三大ギルドマスターの一人であり、『古の到達者』の二つ名を持つ青年。

『怒る』ということをしない極めて穏やかな性格だが、人を扇動するのが最も得意である。

また既婚者であり、『軍神』である奥さんに尻に敷かれているようだ。

雪のよつこ白い髪で茶の瞳を持つ。容姿はそれなり。

レーゼらには手荒く扱われているが、大部分のギルド職員には慕

われている。

だが、どんな時でも心のゆとりを忘れずにはつけまくつてい
るせいか、『変人』として見られることもしばしば。

しかし、使用する魔術や特化能力共に不明であり、謎に包まれて
いる。

マイナ・セルタレイ - Maina Seltaray -
メルヴィス・セルタレイの妻であり、この世に一人しか現存しな
い『軍神』の内の一人。

その攻撃力は圧倒的で、魔力込みの攻撃で無ければ破壊できない
守護機兵を素手で破壊するほど。

世間一般において『美人』として通じる容姿の持ち主だが、本人
の性格は極めて陽気であり、そのことを自慢することをあまりしな
い。

リュカリオ・ヘルゼリオス - Ryuかりオ ヘルゼ
rios -

遺跡探索・魔術士ギルド『ヴァルハラ』の中でも極めて特殊な部
署、『第四階層情報部』に所属している『裏』側の青年。

よくメルヴィスの書類仕事に巻き込まれている可哀想な人でもあ
る。

無精ひげがよく似合うナイスガイだが、20代な本人はそのこと
を気にしている。

第十四話・遊楽 大陸横断列車にて（前書き）

第三章スタートです。ここから、徐々に『敵』が姿を表し始めますよー。

第十四話：遊楽 大陸横断列車にて

見渡す限り果てのない大草原を、ただ風が吹き渡つていく。

風を受けた草木は海のような波を作り、幻想的な雰囲気を一時だけ作り出す。

そして、つかの間に現れた射風は、気まぐれに草の大平原を撫で上げて去つていった。

その大草原という名の大自然の景色の中に、そぐわないものが一つ。

それは、巨大な鉄製のレールであった。

よく手入れのなされたそれは、今でも現役なことを物語つてゐる。

しかし唐突に、そのレールが揺れた。

最初は微かに。しかし、次第にその揺れは大きくなつていき、同時に穏やかな風を乱す巨大な音が響き渡る。

瞬間、野原の上を影が覆いつくした。

それを成したのは巨大な『鉄の箱』である。

ただし、底には車輪をはじめ込み、側面には窓が付いていた。尖がつた『箱』だが。

その『箱』 大陸横断列車『ブラウアーエンツィアン一號』は空気中の魔力を取り込んで燃料とし、いくつもの車両と車輪、そしてレールを軋ませながら草原の海の中をひた走る。

大陸横断列車はその名の通り、リストア大陸の端から端を縦横無尽に走り回り、『物資』や『人』、さらには『情報』などといった不確定なものすら迅速に目的地へ届ける、世界統一政府に管理されている最重要交通機関の一つだ。

長大な車両はそれぞれ、特等車両、一級車両、二級車両、三級車両、四級車両の五つから構成され、下にいけばいくほどチケットの値段も安くなる。だが、座り心地は最悪なので一般人は三級車両を利用する事が多い。

「わあ！ 見てください！ セツキのお山がもつあんなどころに！」

そんな三級車両の中央、窓に程近い座席に四つの人影が座っていた。

その一人は窓際に腰掛け、ガラス窓に手のひらを当ててわあわあと騒いでいる少女だつた。

金糸のように美しく輝く金色の長髪で幼い顔を縁取つており、普段来ている蒼色のローブではなくかわいらしいフリルの付いたブラウスとスカートを身にまとつてゐる。

また、澄んだ碧眼は初めて見るものだらけなのか、めいっぱい見開かれており、白い肌 特に頬は興奮でかすかに桜色に染まつていた。

「イリス。あまりはしゃぐと落ちるぞ？」

その向かい側で彼女 イリスに静かな声をかけたのは、蒼髪の

青年、レーゼ・クライスだ。

鍛え上げた長躯を漆黒のシャツとズボンで包んでおり、象徴たる青い防刃製外套を今は脱いでいる。

そして溝の刻まれた長剣『アルゼス』は、鞘に納まつた状態で脇に立てかけていた。

「元に僅かながらの苦笑を浮かべた彼はしかし、まるで父親が子を見守るような眼差しでイリスを見守っている。

「は、はいっ。でも、こんなに遠いお出かけは初めてでっ」

そんな彼女は窓から身を離し、わたわたと両手を上下に振りながら興奮気味に話し始めた。

頬は相変わらず桜色のままであり、レーゼとのツーショットで見ると、まさしく親子の微笑ましい会話そのものであった。

「しつかしまあ、メルヴィスの野郎も粋な計らいをするなあ

と、そこに割り込むように口を開いたのはレーゼの隣、廊下側に座つている一人の青年である。

ざつくばらんに切りそろえたのかあまり整っていない銀灰色の髪はあちこちに飛び出しており、緑の瞳は氣だるげに細められている。

「それによ……くあ……んぐっ。折角の休日だし、楽しまないと損つてやつだぜ。なあ、レーゼ？」

欠伸をかみ殺した彼 アシュレイはその言葉の直後に黒い笑みを浮かべ、懷から一枚のカラフルな色合いのチケットらしき紙片を取り出して、ヒラヒラとそれを振つた。

そのチケットには『遊楽都市アダリア・娯楽施設』『優待チケット』

などとテカテカと書かれており、その文字の周りをカラフルな星や様々なキグルミのキャラクターたちが飾っている。

「 それにしても……『遊楽都市』を選ぶなんて、メルヴィスも思い切ったこと考えたわよねえ」

「つおつ。何しやがる、セレーネっ」

そこへ、ピッ、と掠め取るようにアシュレイのチケットを細く白い手が奪い取る。

それを成したのはアシュレイに向かい側に座っていた、イリスと同じく金色の髪を持つた一人の少女だ。

170cmほどある細いその体を、縁を基調としたワンピースで包み、深緑の瞳は我が強いことを表しているのか釣り上がっているその少女、セレーネ・C・ミストノートの行動にアシュレイは抗議の声を上げる。

だが当然のように彼女はそれを無視し、奪い取ったチケットを指先でつまんで揺らしながら、呆れ交じりの声色を発した。

「出資者が運営する施設への優待チケットをくれるなんて、気が利きすぎじゃないかしら？」

「いいじゃねえ、かつ。『アダリア』と、くりやあつ、遊楽地として、最、大、規模つて、話だしさつ。こりやあ、楽しみだぜ、つと！」

「おほほほ、捕まえて御覧なさい」

アシュレイがセレーネに奪われたチケットを取り返そうと躍起に

なりながら会話している様子を見ながら、イリスは首をかしげた。

「……あ、そういうば

「どうした？ イリス」

「レーゼさん。これから行くところへ、どんなところなんですか？」

その問いにレーゼはふむ、と呟いてありに手をやり、答えるために口を開く。

『遊楽都市』アダリア。大陸北部にあるその都市は、名前の通り『遊ぶため』に作られた街だ。

世界統一戦争終戦後、アスガルド世界統一政府が計画した『拝命都市』計画。これは各都市に名と役割を与えることによって、各地を効率よく支配しようとした計画である。に乗った、ギルドの出資者である大富豪の一人が、元々は小さく何の特徴も無い『名無し』の都市を買い上げ、己の趣味一色に作りえたのが始まりだと聞く。

最初は誰もが興味本位だけで行っていたが、魔奏珠を用いた絶対の安全性をかね揃えた数々のアトラクションや、大人が遊ぶためのカジノなどが用意されるようになり、今では大陸一、人が集まっている場所だ。

それが『遊楽都市』アダリアの『遊楽』たる証である。

通称は『樂園』なのだが、どうも安い名だと思つてるのはレーゼだけではないはずだろ？

「まあ、要約すれば、金持ちの道楽で出来た都市だな

レーゼの解説に「ふへー」と、イリスは氣の抜けた声を上げた。
そんな彼女の「ひ」がこつもと違う様子に青年は首をかしげ、問いか返す。

「どうした？」

「あ、いえ。その……」

その言葉にイリスは「えへへ」と満面の笑みを浮かべながら頬に手をやり、本当にうれしそうな声色で言った。

「楽しみですね」

「……ああ。そうだな」

ふつ、と口元を緩め、レーゼは返事を返すと同時に、窓の外の見事に青く晴れ渡った空へと顔を向ける。

そして、なぜ『遊楽都市』アダリアへと行くことになつたのかを思い出していった。

「レーゼさん、お願いがあります

イリスが真剣な顔で申し出たのは、遺跡での『単眼巨神型』との戦いから三日ほど経った日の朝のことだった。

あの後、『白癒都市』イザークのギルド支部で傷を癒し、本部に戻つてことのあらましを説明して『あつはつはつは！』『単眼巨神型』^{ギガース}がいたこと、伝えるの忘れてたよ！ いやーごめんねー！ あーはつはつはつは！』などと爆笑した挙句にその場の勢いで全てを誤魔化そうとしたメルヴィスを全力でぶつ飛ばしたついでに窓から叩き落したのだが、やはりしぶとく生きていたのは言つまでもない。

しかし、その事件の影響か、一人のわだかまりは溶け、今は普通に違和感を覚えることもなく暮らしている。

レーゼは少女の言葉を聞き、今日の朝食であるハムエッグを口に放り込んで咀嚼した後に、

「ん、今日のも悪くない

その言葉にイリスは頬を桜色に染め、頬に手を当ててから「えへへー」と嬉しそう笑うと、に自分も食べようとフォークを動かした。そして何度もハムエッグを租借して飲み込んだ後、気合を入れるよびに頷いてから口を開いた。

「それでですね、レーゼさん。お願いが……」

「イリス、胡椒を取つてくれ

「あ、はい」

だが遮るようなレーゼの注文に素直に頷き、台所へ「とてとて

と走つていき、戻つてきたら言われた通りに胡椒を差し出す。

それをレーゼはハムエッグに少量ふりかけ、また食べ始めた。穏やかな時間の中、二人は無言で食べる事に専念する。

「えーっとですね、レーゼさん。私からお願ひが……」
レーゼに言った。

「えーっとですな、レーゼさん。私からお願ひが……」

「イリスは牛乳でいいか?」

「え? あ、はい。お願ひします」

いつの間にか青年は簡易魔奏珠によつて動く冷蔵器の中から牛乳を取り出し、聞いてきた。

それに思わず答えてしまつたイリスは「あれ?」と首をかしげ、しばらく何かを考えるかのように腕を組んで「うーん」と唸つた。

そして今度は慎重に、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「レーゼさん、あの、お願ひがあるんですけど……」

「……ああ、今日はいい天氣だな」

「あからさまに話題を逸らさないでくださいーー」

だが、そのあまりの話題逸らしに、ついにイリスは怒つた。
机を両手の平で叩き、ついでにその痛みに机の下でうずくまる。

「それにこりいち答えているイリスもイリスだがな」

レーゼの呆れ返ったような声色の言葉に、少女の頬が桜色に染まる。

そして両手を押さえながら机の下から這い出てきたイリスは、両手の平がいまだに痛むのか、田の端に涙を貯めながら恨めしそうにレーゼを見た。

もちろんそんな表情を向けられて怖がるようなレーゼではない。むしろ、小動物が威嚇するような、そんな少女の表情に口元を軽く緩めているだけだ。

対するイリスは、普段あまり表情を表に出さないレーゼの顔にかすかな微笑が浮かんだのを見て、思わず胸の中心が温かくなるのを感じた。

だがそれではだめだ、と顔をブンブンと振ると、

「私はレーゼさんの仕事を手伝いたいんです！」

ついに言いたいことが言えたのか、椅子に座りなおした少女は満足そうな顔をする。

「ちょっとまって……。あー、イリス、俺の仕事が何たるかを理解しているか？」

何か嫌な予感がして、聞かずにはいられなかつたレーゼは口を開いた。
なぜか、彼女の背後に「己の上司であるあんちくしょ」の姿が見えたからだ。

「はい、機械の兵士さん達と戦つて優越感を得るとか

「……とつあえず聞け。その知識、誰からだ?」

「メルヴィスさんですけど?」

「あいつは……。後で覚えていろ……」

頭を抱えながらレー^ゼは恨めしげに呟いた。

メルヴィスは『冗談』が好きである。そしてそれを他人によく言つた。だ。

さも、その『冗談』が『本当』であるかのように聞き手に認識させてしまひ。ゆえに彼が語ることは嘘か真か、判断が付きづらい。

もつとも、長い付き合いのレー^ゼにしてみれば、どれが『冗談』でどれが本当なのか、それぐらいの判断は付く。

だがイリスは、あんちくしょ^{メルヴィス}うとで会つてまだ一月も経つていな
い。彼の『冗談』を見破れ、というほうが無茶だろう。

それにこの少女は良くも悪くも純粹だった。人を疑うことがあま
りしないということは、それだけメルヴィスに騙されやすいという
ことだ。

レー^ゼは思わず、イリスの将来が心配になつた。

そんな青年の様子を知つてか知らずか、元気にイリスが聞いてく
る。

「いいですよね? 私だつてお役に立てますし!」

彼女の言葉に、頭を抱えていたレー^ゼは顔を上げ、しぶしぶと頷

いた。

確かに役には立つた。三日前の『单眼巨神型』と『追文』持ちの守護機兵との死闘で文字通り死にかけたレー^{ギガース}ゼはこの少女に救われたのだ。

『双翼』形態の防御特化能力『リヒトクラール』。絶対的な防御の力。それが、イリスの取り戻した記憶の一つだった。

それ以外はやはり思い出せずに少々落ち込んでいたが、どうやら立ち直りは早いらしい。今では前向きに色々と頑張っている。

「ダメだ。却下だ。大反対だ」

しかし、レー^{ギガース}ゼは難しい表情で首を振り、否定を二連発する。それは彼女を想つてのことだったのだが、それでも諦めていないのか、頬を膨らませてなおもイリスは食い下がってきた。

「私だって嫌です。お世話になつていてる以上、何かの役に立ちたいんです！」

朝・夜の食事と掃除、そして洗濯をしてくれている時点で助かっているんだがなあ、と言いかけ、これでは引き下がらないだろうと直感した。

嫌な勘だけはよくある。それがレー^{ギガース}ゼのジンクスである。

ゆえに、レー^{ギガース}ゼは別の方へあきらめさせることにした。すなわち、現実の厳しさを教えることにしたのだ。

「俺だつてあんな大物とよつちゅう戦つているわけじゃない。大半は遺跡の中をただ歩いて、弱くて少ない敵を狩るだけだ」

地味な作業だ、といリスに説明しながらレーゼは思考する。だが事実でもあった。

魔術士の仕事は、『出土』した遺跡のマッピング、『はぐれ』守護機兵の殲滅、各方面への護衛、魔奏珠テリオスの確保、この四つに大別される。

その中でも特にマッピングは『地味』であり『苦痛』なのだ。遺跡はどれも半端なく広い。その上、地下に続いているものも存在するので、その作業量はもはや拷問ともいえるレベルだらう。しかも仕掛けの一つも見逃そるものなら減給の対象となるので、誰もがマッピング作業を嫌っている。

かくいうレーゼも、あまり進んでやりたくない仕事である。

そういうことを含めて説明し、ついでにメルヴィスの言ったことは嘘であるということを教えて、念を押すように「だから、お前が来る必要はない」と続ける。

しかし、イリスはそれでも引き下がらなかつた。

腰に手を当て、レーゼを見上げる形で胸を張り、顔全体を「不機嫌です」と言いたげな表情にして言葉を返したのだ。

「だったら、この前みたいに後から勝手に行きますよ?」

その言葉に今度はレーゼが言葉を詰まらせた。

一応撒くことはできる。だがその後で道に迷われたり、複数の守護機兵に囮まれたりでもしたら、この少女がどのような被害をこうむるか。そう考えるだけでも、ひどく『嫌』だつた。

自分がこれほどまでに他人を気遣うことが出来たのか、と口の思考に若干驚きながらも、どうにか彼女が戦いの場でないよう説得すべきか、と考える。

だが、出てこなかつた。直感が、なにをひとつ説得しても無駄である、と告げているからだ。

そしてついに諦めたかのよつたため息を付き、レーゼは呟いた。

「……メルヴィスの許可が出たら、いいだろ？」

「はい！ ありがとうございます！」

それを聞いた瞬間、イリスは嬉しそうに声を上げた
その顔に、満面の笑みを浮かべて。

第十五話・行先 災厄を呼ぶチケット

「……メルヴィスの許可が出たら、いいだろ？」

「はい！ ありがとうございます！」

その言葉がレーゼから漏れた途端、イリスはうれしさのあまり大きな声を上げていた。

何せ、よつやく得た『力』を役立たせることが出来るのだ。

今まで何のお礼も出来なかつた、この生真面目で少し無表情な青年の役に立つことが出来るのだ、と、そう思つと、イリスは自分の胸のうちが何か暖かいもので満たされるのを感じていた。

そして思つ。頑張り、と。この純白の双翼に恥じないよつな働きをしよう、と。

胸のうちに宿つた暖かい『何か』の正体に気づかえせずに、そういう心の中で少女は誓つた。

漆黒色の外壁で構成されているギルド本部に着いたのは、暁が回る前だつた。

レーゼは溜まつた報告書の処理、イリスは掃除と食器洗いをしていたために遅くなつたのだ。

自動ドアが開き、中に入る。少女は何が珍しいのか、きょときょると辺りを見渡している。

まるで小動物のような彼女の顔の動きにあわせて、レーゼも視線を真正面に向ける。すると受付の前に見知った顔を見つけた。

生意氣を現してじるつりあがつた田を持ち、肩まで届く金髪が際立つその少女は、セーネである。

今日は一柄台の子供が着ていそうなフリフリの白レースが付いたスカートをはいており、それを揺らしながら受付の女性と楽しそうにおしゃべりをしていた。

少しば歳を考えると突っ込みたかったが、そんなことをすればおそらく『血祭りの刑』だらうと直感が告げているので口を開じておく。

「そ、イリス。行こうか」

「はい」

そしてセーネは無視してさつぞと歩き出しつつ、 。

「あら、レーゼじゃないの」

歩き出しつとしたといひで、気付かれた。

「ん、ああ。……ちょっと用事があつてな」

適当に返事を返し、そのままイリスを連れてメルヴィイスの執務室へ行こうとする。

だがその行き先を遮るように彼女が前に立ちふさがり、ちらりとレーゼの背後にいるイリスを見やつて口を開いた。

「レーゼ、その子は？」

その言葉を聞いたイリスはびくりと身をすくめ、レーゼの陰に隠れてしまった。

まるで小動物のようなその仕草に青年は苦笑を浮かべる。

だがそう悠長に思考している暇はない。

今の状況はどう見ても、大の大人が似ても似つかない子供、しかもやけに幼い少女を連れているという、ある意味ギルドへの通報レベルのものだからだ。

ここに来るまでそのことに気がついていなかつた時点で色々とアウトなような気がするが、というより、一緒に住んでいる時点でもはや犯罪者レベルのような気もするが、気にしないことにする。その思考は脇にどけて、何か良い言い訳はないかとにかく頭をフル回転させる。

「ああ、その子が例の……」

だがセーラーは、レーゼの言訳を聞く前になぜか納得しようと頷いた。

あまりにあっけなく追及の手を収めたそんな彼女の行動にレーゼは呆気にとられ、改めて聞き返す。

「あー、イリスのことを知っているのか？」

「ええ。今、ギルド中の噂よ

「……は？」

「あの朴念仁、レーゼに隠し子か？」つて

あつけらかんにセレー・ネが答える。その言葉に『レーゼは』の耳を疑つた。

そして『』の胸のうちがゆづくつと冷めていくのを感じつつ、しかし表面はきわめて冷静なままで口を開いた。

「……その噂は誰が流した？」

「メルヴィイスだけだ……。つて、あんた！ なんで剣なんか抜いてるのよ！？」

「レ、レーゼさん！ 早まつては駄目です！」

直後、セーネとイリスの一人が慌てて止めに入ってきた。レーゼは無意識の内に『アルゼス』の柄に手を当てていたからだ。

皆を誤解させるような噂を振り撒いた上司に対する理不尽な怒りがそうさせたのだろうだが、もう彼にどつては我慢の限界だった。

「悪いが離せ、二人とも。俺は敵バカを斬りにいくだけだ」

「て、敵、ですか？」

「ああ、名前はメルヴィイスといつてな」

「それは味方でしょ！……多分」

「なんだか騒がしいねー。何かあつたの？」

と、そこへ騒ぎの元凶^{メルヴィイス}が奥の廊下から顔を出した。
その声と姿を感知した瞬間、反射的にレーゼは長剣を引き抜き、
思い切りブン投げた。

深い溝の刻まれた白銀の刃がメルヴィイスの頬のすぐ傍を通り過ぎ、
その背後にあつた壁へと直撃。乾いた音と共に建築材の欠片が飛び
散る。

「うひやあー？」

その瞬間、間抜けた声を上げながら廊下の向こう側へメルヴィイス
が引っ込んだ。

だが、逃がさんといわんばかりにレーゼが一步を踏み出す。

「逃げなさい、メルヴィイス！ あたし達じや抑え切れないわ！ こ
いつあんたを本氣で殺すつもりよ！」

そこへ、セーネが必死にレーゼの右腕を押さえながら叫んだ。

「レ、レーゼさん、落ち着いてください！」

そこへイリスも左腕を掴み、必死になつて止める。

しかしそれすらも無意味であり、一人の少女を引きずつてレーゼ
は全ての元凶^{メルヴィイス}へ向かつて歩き始めた。

「動くなよ？ この、大馬鹿者が……！」

「へ、『やああああああー！？』」

そして青年の静かな怒りの声と少女の悲鳴に近い声が、ギルド本部中に響き渡った。

「ほんとー！」、すみませんでした」

執務室の中、あちらこちらに焼け焦げがある服を着たまま、メリヴィスは頭を下げていた。

「分かれば、よひじこ」

彼の言葉に不機嫌そうに鼻を鳴らすレーゼ。

二人の立場から常識的に考えるとありえない光景だが、普段から『『ひへ』であるためか、それを咎める者はいない。

「……レーゼさんがあんなに怒ったの、初めて見ました」

そんな一人を見ながら、イリスは田をばばばばと瞬かせて咳くようになっていた。

彼女の言葉を隣で聞いていたセーネは苦笑し、

「確かに、あんたってあんまり怒らないものね。そんなに腹立つたの？」

「ああ。あそこまで怒りを覚えたのは久しぶりだ」「いやー、ほんの悪戯心だつたんだけどねえ」

反省した色を見せていないメルヴィイスは残念そうに唸つた。

「そのくだらん悪戯心とやらで、この子の立場を悪くするような噂を広げるな、この阿呆」

そんな彼に咎めるような口調でレーゼが返す。

彼は心配していたのだ。イリスの立場が悪くなることを。

『ヴァルハラ』における彼女の立場は依然微妙なままである。どこで生まれ、どこから来たのかすら分かっていない『謎』に満ちた少女。それがイリスの全てだ。

ゆえに、人々はその謎を補完すべく噂話を始める。

やれ、彼女は『ああ』なのではないか。やれ、彼女は『こいつ』なのではないか。そんな小さな憶測や噂が重なつていき、いつしかそれは広がっていくだろう。

例えそれが悪意のないものとしても、そつやつて生まれた偽りの『事実』 자체が人々の共通認識となつてしまえば、もはや改める術などなくなつてしまつに等しい。

だからこそ、レーゼは過敏に反応したのだ。

全ては幼い少女の未来を想つての行動と発言である。

それを隣で聞いていたイリスは、思わず両頬が熱くなるのを感じた。

それと同時に胸の中が暖かいもので満たされてゆく。

だがその感情を少女は理解できず、ただ恥ずかしげに俯くだけだつた。

それに『氣づかぬレーゼは冷たい目線をメルヴィスに向けると、

「次、同じことをしたら……三枚に下ろすぞ？」

「あはは……。えっとね、うん、悪かったと思つてるよ？　だけどや、あのせ、一応ここでは僕が一番偉いんだから、そういうことを面と向かって言つのはやめようよ。ね？」

「さうやらレーゼの本氣を感じたのか、かすかに冷や汗をたらしながら弁解する。

そんな二人を見ながら、セレーネはやれやれといった様子で手を振り、

「やうなつたら外でやりなさい。あんただちの追いかけっこは、本当に本部が崩壊するかと思つたわよ」

「セレーネちゃんが暴れた方がそりなりそりだけど　つて、セレーネちゃん！　頭、頭あ！」

メルヴィスが思つたことを口にした次の瞬間、にこにことした不気味の笑みを浮かべたセレーネは彼の頭を驚愕んで引きずるようにして部屋の外に連れていいく。

そして扉が閉まると同時に、肉と骨を思い切りぶん殴る音と、拳を振り上げたときに発せられる特有のフルスイング音、「ぐへつー・

などとこいつのめき声が扉の外から響いてきたが、それを無視してレーゼは「コーヒーを口にする。

その隣でじうに反応していいか分からないイリスは、「あ、あはは」と曖昧に笑った。

やがて数分後、戻ってきたメルヴィイスはなぜか燃え尽きたように真っ白で、セレー・ネは満足そうな顔をしていたのはいつまでもない。

「……今日は厄日だなあ」

「自業自得だ」

自身の扱いにメルヴィイスは嘆くが即座に咎められ、「よよよ」と妙な女座りで泣き始める。

当然それは演技だということが分かつてていたので、レーゼはため息をついて立ち上がった。

「……帰るか」

「え、お仕事はいいんですね？」

「あいつの様子じゃ、今日はまともなのがなさそうだからな

付き合つてられるか、と言わんばかりに出口へ歩き出す。イリスは不思議そうな顔のまま彼に従おうとして。

「へへへへへへへ……」

背後から、不気味な笑い声が、聞こえた。

レー・ゼはそれを聞いたことがある。

大抵はメルヴィイスが色々と悪巧みを考えたときに発する鳴き声の
ようなものであり、その対象はほとんどと言つていいほど周りにい
た人間　つまりはレー・ゼやアシュレイだった。

予感というより、もはや生存本能的な何かがレー・ゼの中で働き、
早急にこの部屋から出なければならないと心が警鐘を鳴らす。

しかしイリスは立ち上がったばかりだ。面倒を避けるために彼女
を置いていくわけにもいかず、葛藤が彼の頭の中で繰り広げられる。
そしてそれが、仇となつた。

「レー・ゼくぅーん」

不気味な、そして低い聞きなれた声が耳を打つ。
それを聞いてしまつたが最後。蜘蛛の巣に引っかかつてしまつた
獲物のことく、逃げることは不可能となる。

それを理解しているがために、レー・ゼは「もうどうにでもなれ」と覺悟を決めて、固まつた首を無理やり動かし振り向いた。

そこには、いつの間にか立ち上がりて小型端末を手にし、満面の
笑みを顔に張り付かせたメルヴィイスと、額に手を当てて呆れ顔を浮
かべているセレーネがいた。

すぐ目の前では引きつた顔をしているあわうつレー・ゼを見上げ
て首をかしげているイリスが立つている。

不気味な声を発したメルヴィイスは端末を覗き込んで数秒の後、口

を開いた。

「ねえ、レーぜ君。今日は仕事ないから、どこかに出かけてみない?
?」

「は?」

予想外の提案に、レーぜは思わず間抜けた声で聞き返した。

『出かけてみない?』と言つたのだ、メルヴィスは。

『……』一んなはた迷惑で面倒な仕事を受けてみない?などといった『ふざけた』モノではないのだ。聞き返すのも無理はない。

「……うん、決定! あ、列車のチケットはもう取っちゃったから、さつわと準備してね」

そんな彼を余所に、メルヴィスは小型端末を操作しつつ言い放つた。

レーぜは色々とツッコみたかったが、とりあえず彼の凶行を止めるために口を開く。

「おい、ちょっと待て」

「つーん、部下に休暇を与えるなんて、僕は何て良い上司なんだろ
うなあ!」

「人の話を聞け!」

自己完結して一人でうんうんと満足そうに頷いているギルドマスターへ力の限り叫び、そして疲れたようになぐつたりとうなだれる。

目の前ではいまいち事態を理解していないイリスがレーゼにどう声をかけようかとあたふたしており、その後ろではセレーネが哀れみの視線で彼を見て一言。

「あらあら、可哀想に」

「あ、セレーネちゃんも一緒に行く事になつてるから」

「はあー？」

しかし、彼女も次の瞬間怒りの声を上げ、メルヴィイスの胸倉に掴みかかった。

「どおーいうことかしらあ？ メルヴィイスう？」

「……く、苦しい。苦しいよセレーネちゃんつ」

落ち着いて落ち着いて死んじゅうよ死んじゅうから、と矢継ぎ早に、そして苦しげにギルドマスターが言つて、深呼吸をしたセレーネはやっと手を離す。

だが彼女は目の前の青年を睨みつけ、その視線だけで理由を説明しろと伝えていた。

メルヴィイスは肩を上げて「仕方がないなあ……」と呟くと、

「ひ・み・つ」

ワインクをして、茶田の気全開でそつ口にした。

瞬間、レーゼが残像を残す勢いで青年の前に踏み込むと同時に、横薙ぎに鞆付きのアルゼスを振るつ。

しかし「ひつひょうー？」とメルヴィスは奇妙な声を上げて、当たれば骨折間違い無しのその一撃をしゃがんで難なく避ける。

「一度死ねば、この性格も治るかもしけんな」

「同意よ。」いつのせいかと転生させて性格を矯正するのが手っ取り早いわ」

ぼそっと呟いたレーゼの言葉にセーネも頷き、いつの間にか手にした鋼鉄の灰皿をポンポンと叩いた。

ちなみに両者共に口元は笑っているが、田は笑っていない。

「ちよつちよつとー、痴たら、なに恐ろしいこと言つてゐのー?」

「お前がまともに理由を教えれば、いつはならなかつたんだが……。俺は悲しいぞ、お前を始末しなきやならないなんてなあ。残念だ、実に残念だ。ははははは」

「ええ、悲しいわねえ。こんな形で別れになるなんてねえ。断じて嬉しいとか、そんなことは思つてないわよ。うふふふふ

「嘘だ！ そんな棒読みで言われても嘘にしか感じられない！ あー、分かりましたよー！ 教える！ 教えるから勘弁してくれださいつー！」

「レー・ゼさんたちって、結構アグレッシブなんですねえ……」

あからさますぎる一人の脅しに、ついにメルヴィイスが折れた。同じく、イリスも若干引き気味で呟く。

そしてメルヴィイスは肩を落とし、「もう、からかいがないの人たちだなあ」と残念そうに呟いて、口を開いた。

「イリスちゃんとのさ、親睦会つてやつだよ」

「私の、ですか？」

驚きの声をイリスが上げる。

「まさか自分のために」、そんな言葉が似合いそうな表情をした彼女は、目をぱちくりと瞬かせながらメルヴィイスを見た。対するメルヴィイスはそんな彼女にウインクで返すと、レー・ゼたちに向き直って言葉を続ける。

「イリスちゃんも『特化能力』に目覚めたり、これからレー・ゼ君と一緒に仕事を始めるつもりなんでしょう？　だったら、レー・ゼ君とよく組む人たちと仲良くなっていた方がいいかなーって思ってね」

イリスは彼の気遣いに涙が出そうになつた。胸の内からは、レー・ゼと一緒にいるときはまた違う『暖かさ』が溢れてくる。それを感じながら、彼女は勢いよく頭を下げる。

「　ありがとうございます！」

そして頬を朱色に染めて嬉しそうな表情を浮かべると、レー・ゼに「用意をしてきます！」と元気に告げて走り去つていった。

「そら、お一人さん。ギルドマスター命令ですよ。さっさと行ってあげなさい！」

それを見送ったメルヴィスは「かかった」といわんばかりの表情に一瞬だけなると、二人に細長い紙袋を手渡して「しつし」と追い出すようなしぐさをする。

思わず袋を受け取ってしまったレーゼとセーネは仕方がなく心中はあんちくしようの行動と発言に対する不信感でいっぱいのままではあるが、扉を開けて廊下に出た。

「あ、そうそう。もう一人、一緒に行く事になつていいから。ようしくねー」

そんな声を背に、一人はお互に顔を見合わせた。その数秒後、どちらともなく苦笑し、

「……ま、構わないか。イリスも喜んでいたし」

「ええ、私もよ。それに、今日は仕事もなかつたらしいし、ね」

「ま、何も起こらないことを祈るわ」と、別れ際にセーネはやう言ひ、レーゼも「そうだな」と返事をして背を向ける。

そして帰路の最中に、「そういうえば」とレーゼは思い出す。メルヴィスの言つていた残りの一人とは、一体全体誰のことなのだろうか、と。

だが、その疑問は、数秒後に耳元の小型通信機が振動した事により解かれた。

『おーう、俺だ、アシュレイだ。何かよお、つこさつきメルヴィス

に妙なチケットを手渡されたんだが……お前らもか?』

こうして、四人は列車に乗ることになったのだ。

そのチケットが、新たな災厄を呼び込むとは知らずに。

第十六話・襲撃 全て見つめるもの

大陸横断列車『ブラウアーエンツィアン一号』はひた走る。風をなぎ払い、界魔力を喰らいながら、ただひたすらに前へ、前へと。

その様子を、線路のほど遠くに存在する閉鎖された遺跡の『門』の上から眺めている者がいた。

それは少年だった。

ど二かの組織のものだろうか、黒を基調とした制服を崩して着ており、短い頭髪は珍しい銀色で太陽の光を鈍く反射している。整っている顔には嫌味つたらしい笑みが浮かんでおり、紫の瞳は遠くを走る大陸横断列車に向けられていた。

少年は両手にはめた黒縁の銀箸手の内の右腕をかすかな金属音を響かせながら持ち上げ、手のひらを広げて大陸横断列車に向ける。

「さア、凶劇のはじまりだ」

ギチリ、と彼の口元が裂けた。いや、笑みを『変えた』。

先ほどの嫌みつたらしいものではなく、愉悦を含んだものへと。

「きッちり、仕事しろよオ？ クソッタレビも」

そして少年は、開いていた右手を勢いよく握りこんだ。

大陸横断列車『ブラウアーエンツイアン一号』の機長、ラウダー・リストールの人生は順風満帆そのものだった。

父親は政府の幹部であり、母親は厳格だが時に優しく、三十路を迎えた今では妻もいる。

さらには小さな頃から高い教養を身に付け、今まで培ってきた経験により勘は冴え渡り、そのおかげで大胆な駆け引きに生き残る事が出来てここまでやつてきた。

このまま順調に業績を伸ばしていくば、父親の口ネを使って政府の幹部にもなれるはずだった。

だがしかし、そんな彼でも今日のようなことは夢にも思わなかつたのだろう。

頼りにしていた魔術式の警備システムが唐突に沈黙し、ロックしていたはずの鉄戸^{バトルスープ}が蹴り開けられ、漆黒の戦闘服に身を包んだ連中から一斉に銃が突きつけられるなどとは。

銃口を向けられて一斉に動きを止めた機長たちを眺めていたその男は、銃を構えている漆黒の部下たちの間を通り抜け、隣に巨漢を一人だけ連れて後ろ手に腕を組み、ゆっくりと足音を立てて前に進

み出た。

細身で、若く精悍な面構えの男である。

隣で静かに立っている巨漢が握れば簡単に折れてしまいそうに見えるが、漆黒の戦闘服に包まれた体躯は仮にもその一撃を受けたとしても、決して倒れることはないだろう。

事実、ここにいる全員が彼に襲い掛かつたとしても、傷一つなく全員を殺しつくことが可能だった。

それだけの力を、その青年は持っていた。

そんな彼は、じろり、と周囲を睨めつけるように見渡す。

大陸横断列車の先頭に位置する主操縦室は、列車の中でも最大級の大きさを誇るこの列車の車両と比べると、驚くほど狭い。
壁面のありとあらゆる場所には全車内を一望できるディスプレイが設置されており、前方と左右を機能的に取り巻く操縦用の装置が設置されているからだ。

その前には機長席を中心として、左右に副長席、操縦士席、副操縦士席があるだけである。

どうやらかといふと簡素な作りな彼らを眺めて、口を開いた。

「機長は、誰かね？」

「……わ、わたしだ」

恐る恐るといった様子で機長が手を上げる。男はそちらに瞳を向けると、顎に手を当て、ふむ、と呟き、

「では今からその座、譲つてもいいね」

常人では反応できぬ速度で機長へ右手のひらを向け、

「我が漆黒は憎悪の牙 シャドウサーガント
“闇色演舞”」

「あ」

瞬間、男の足元に存在していた『影』がまるで熱湯のように沸き立ち、そこから姿を現した漆黒の巨大な『口と顎と牙だけで構成されたケモノ』が目の前の機長を喰らつた。

そう、文字通り『食べた』のだ。
ガシュ！ と硬質な音が響き、一瞬で機長『だつたもの』を噛み碎いたこの世のものとは思えない『影のケモノ』は、粘着質な音を立てながら咀嚼し、最後は「ゴクリ」と飲み込んで、再び男の影の中へスルスルと戻つてゆく。

その手の知識があるものならば、今の現象を『特化能力』による殺人と判断できただろう。

だが、あまりの出来事に副長も、操縦士も、副操縦士も、まったくといつていいほど反応できなかつた。

メインルーム
主操縦室は静まり返る。

そのあまりの無反応さに男は多少眉を動かし、しかし冷静な口調で告げた。

「私はアル・サレヴァート。今ヨリこの大陸横断列車は、我々反世界統一政府組織『黒の肅清者』の物となつた。君たちの上司のチ・アスガルド ような最期を迎えたくなれば、大人しく操縦だけをしておうか」

状況は進行してゆく。だれも気づかぬまま、ゆづくつと、しかし確實に。

主操縦室^{メインルーム}にて状況が進行してゆく一方、レーぜたちがいる三級車両は穏やかな静寂に包まれていた。

ある乗客は膝の上に置いた本へ目を落とし、ある乗客は眠たげに瞬きをしてあくびを繰り返す。

乗務員たちは、今の時間はそれほど動くことがないのか、奥の乗務員用の部屋の中で談笑をしていた。

そして、ギルドが誇る3人の魔術士たちと今回の旅の主役もまた、その穏やかな静寂の中に身をおいていた。

レーぜは、最近巷で名を上げている歴史家が執筆した『古代文明シンフォニアの輝き』という名の文庫本に視線を落としている。

だがその内容は憶測に憶測を付け足したようなざさんなもので、そのためか青年はくだらないものを見るかのような目つきになっていた。

アシュレイはコッククリコッククリと電車の揺れに合させて舟を漕いでおり、向かい側に座っているセレーネは欠伸をかみ殺しながら女性ファッション雑誌を流し読みしている。

そしてイリスは、飽きもせずに窓の外に流れる景色を眺めながら、鈴を転がすような、しかしさな声で『歌』を口ずさんでいた。

「

〜、〜〜〜

」

彼女が歌っているのは子守唄だつた。

『蒼い空』の広大さを説いた風変わりな内容の、昔から歌い継がれてきたためかこの地に暮らす人々ならば誰でも知っている、とても古い歌である。

向かい側にいたレーゼはその聞き覚えのある子守唄を歌っている少女をちらりと見やり、口元にかすかな微笑を浮かべる。

最近、イリスは目に見えて明るくなつた。

言いたいことをハッキリと言えるようになつたのも大きいだろう。

青年は思つ。良い兆候だ、と。

同居し始めた頃に比べれば格段に良くなつたと、そう思考する。最初期の彼女を表すのならば精巧な人形、だが今は歳相応の少女にしか見えない。

あとは記憶を取り戻さえすれば、レーゼの役割は終わりとなるだろ。

(寂しくなるな。……いや、俺はなにを考えているんだ)

思わず胸中でポツリと呟いたその言葉に驚きを覚え、頭を軽く振つてその思考を払拭する。

そして自分にそんな感情が残っていたのか、と、内心苦笑混じりに独りごちり、再びくだらない歴史解釈書に視線を落とそうとして。

「動くな！　ぐおっー？」

二級車両へと続く扉を蹴破つて突入してきた黒い戦闘服に身を包んだ一人の男の内の一人へと、瞬きするよりも早く、手元の『古代文明シンフォニアの輝き』を投擲していた。

魔力によつて常時強化されている腕力。それにより放たれた文庫本サイズのその本は、風の抵抗すら凌駕して直進。

余裕の表れからかヘルメットを装着していなかつた先頭の男の顔面へと、吸い込まれるように直撃した。

いきなりの反撃を予想していなかつたその男の体は頭部への衝撃で仰け反り、後ろにいた彼の仲間は慌てた様子で銃から手を放し、その体を支える。

その出来事は時間からすれば『わずか』2・2秒ほど。

だが、魔術士たるレーゼにとって、十分すぎる時間であった。

クイックブースト

コンマ8秒で脚部に身体能力の瞬間強化を発動。ジャスト1秒目には『アルゼス』を引っつかみ、驚くイリスを横目に男たちめがけて天井や壁を利用して高速移動。

そして1・6秒目には瞠目する彼らの眼前へ着地し、鞘に入れたままの『アルゼス』でなぎ払った。

「な、なに！？」

「遅い……！」

狙いは胴体。バトルスーツ戦闘服を着ていようがお構いなし
るからこそ、全力の横薙き一閃。

「う、か、あ　　ツ！」

ゴキン！　と、骨の折れるような嫌な音が響いた。

鞘付き『アルゼス』が戦闘服もろとも男のわき腹にめり込み、その肋骨の一本をへし折つたからだ。

あまりの激痛に男は白目を向いて気絶し、口から「かひゅつ」と空気を漏らす。

「まずは、一人」

「き、きさまあ　　！」

目の前で仲間が倒れる姿を見て、頭に血が上ったもう一人の男は

がむしゃらにそう叫び、手にしていた小銃をレーゼに向かた。

剣を振り終わった直後だ、連續して攻撃できる状況ではない。
「うなれば、それは『隙』。大振りの一撃が直撃したが故の空白時間。

長い間、戦闘訓練を続けてきた男は『それ』を見逃さなかつた。
だからこそ、絶対の勝利の確信を持つて魔力銃の引き金に指をかける。

だがレーゼは、引き金が引かれるよりも早く、動いていた。

彼は『見て』いたのだ。その蒼の瞳で、目の前の男が引き金を引き絞る動作も、勝利を確信する表情にゆがむ様も。
ゆえに、硬直していた体を無理やり動かす。レーゼにとつてそんなことは造作もないことだ。

筋肉のかすかに軋む感触を感じながら動きを開始。

それはひどく単純な動作だつた。

空いていた左手を腰のホルスターに伸ばして魔力銃を引き抜くと、滑らかな動作で左回転し、それによつて加速した銃床の一撃を、相手の首筋へと叩きつける。

「せつ…」

「やつ…？」

首と肩の中間部に重い打撃を受けた男は、あまりの痛みに悲鳴を上げて小銃を取り落とした。

その隙を逃さず、レーゼは全力の右回し蹴りを顔側面へと放った。

「沈めつー！」

「『J』ハー！？』

体重と遠心力の乗った一撃を横つ面に喰らった男は凄まじい勢いで横に吹っ飛び、壁にぶつかって床にずり落ちる。

しばらくの間呻いていたが、やがて気絶したのか動きを止めた。

僅か10秒程度の攻防。一人の死者も出ことなく勝利したレーゼは、『アルゼス』の鞘と魔力銃をホルダーとホルスターに收め、軽く息を吐いた。

「ふう……。で、だ」

いきなりの出来事から我を取り戻した乗客がざわめき始めるが、それに構わずレーゼはアシュレイに向き直り、首をかしげて口を開いた。

「コイツらは、何者だ？」

「おおう、確かめもせずにやつたのか」

「『殺意』に反応しただけだ。殺してはいない

アシュレイのあきれた声に、レーゼは鼻を鳴らしてそう言い返した。

原則、ギルドは殺人を許容しない。

もしそれを破つたものがいるのならば、一切の例外なく処罰が下される。

それは、一般の人々とは隔絶した力を有している魔術士たちの暴走を抑えるための、ギルドが定めた『厳格な規則』の一つだつた。

そもそも魔術士とは、極端に言い表すのならば『暴力の塊』である。

そんな存在が森羅万象を操り、無秩序に力を振るい始めればそれは歯止めも利かぬ暴力の嵐となるだらう。

だからこそその『規則』なのだ。

それを理解しているがゆえに、レーゼは『アルゼス』を鞘から抜かずに戦つたのである。

「それに

「レーゼさん？」

青年は懐から取り出した縄 拘束用の綱糸が編まれた頑丈なものだ で手早く謎の襲撃犯一人を拘束すると、元いた座席近くまで歩いていきながら口を開く。

彼のピコピコとした雰囲気にイリスは首を傾げた。

そんな彼女の頭をレーゼは落ち着かせるようにぽんぽんと撫でると、

「まだ来るぞ」

「おう」

「ええ」

そんな緊張を孕んだ声と共に、一人の魔術士は立ち上がっていた。アシュレイは右手に漆黒の十字架を、セレーネはどこからともなく取り出した札を数枚指の間に持ち、三級車両の一車両目へと続く扉に顔を向けながら構える。

やがて数瞬の後、鋼鉄製であるはずの扉が、ガラス窓が激しく震えるほどの爆音と共にひしやげとんだ。

「敵発見！」

「排除する！」

その爆煙の中から現われたのは、漆黒の戦闘服^{バトルスーツ}に身を包み、突撃魔力銃を手にした『敵』が4名。

それを視認すると同時に、3人の魔術士と1人の少女は動き出す。

「やれやれ、今は勤務時間外なんだがなあ」

「あとでたつぱり請求すればいいじゃない、行くわよ」

「俺の傍^{そば}から離れるなよ、イリス」

「はいー！」

かくして、戦いは始まる。
裏に潜む何者かの思惑に、気づかぬままこ

。

第十六話・襲撃　　全て見つめるもの（後書き）

第三章、本格的に戦闘スタートです。

反政府組織連中がどうやって乗り込んできたかは、次あたりで…。
また、冒頭の少年の出番はまだまだ先だつたりします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9967/>

蒼天のシンフォニア

2011年3月14日19時45分発行